

---

# 《天竜》の伝説

P A P A

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『天竜』の伝説

### 【NZコード】

N4788W

### 【作者名】

PAPA

### 【あらすじ】

神のうつかりで死んだ主人公はテンプレ通りチートをもらえたと浮かれていたが、チートな能力は一切もらえず、転生先は死亡フラグ満載のワンピース！

そして自分の生まれた種族はなんと最も極悪な天竜人だった！

不定期で駄文ですか読んでいただけだと嬉しいです。

## プロローグ（繪畫#0）

さて、思ひつねで書いたがどうか…

## プロローグ

「よお、田が覚めたかの」

田の前に白髪の爺がいた

「うわあー！」

ボカツ！

「ふふうー。」

思わず殴ってしまった。

「こきなり何をするんじやー。」

「いや、こきなり田の前に見知らぬ爺が現れたらなぐるでしょ」

「爺とは失礼な。わしは神じゅー。」

神？

「嘘つき爺」

「だからわしは嘘つきでも爺でもないー。神と言つておぬじゅりうが

ー！」

え〜

「証拠は？」

「証拠？やうじやな。おぬし、名前は言えるかの？」

「名前？んなの当たり前じゃん。俺の名前は？」

あれ？

えーと、何だつけ？

思い出せない…

「まつまつま。思い出せないか。そら、やうじやの。おぬしは死んだのだから

死んだ…？

「じうじゅ。これで信じたかの？」

「む…分かったよ。信じるよ。それより俺はどうして死んだんだ？」

「わしのせ

は？

「いやーのう。天界には生者帳といつものがあつての。それぞれの生物のことが書いてあるのじや。その内のあなたのおぬしの事が書いてあるページを誤って鼻水を拭くチリ紙として使ってもうたのじや

「……」

「それでおぬしのページが狂つての。そのせいでおぬしは死んでしまったのじゃ」

「つまり俺の死はあなたの不注意だと…」

「すまんのハ」

「ふざけんな…。」

神の胸ぐらを掴み、振る。

「待て待て！話を最後まで聞くのじゃ」

チツと舌打ちしながら神を離す。

「ふう。だからお詫びとしておぬしを別の世界へ転生させてやれりゃ  
ではないか」

テンプレキタ――――――!

「転生先はもう決めてある。ワンドースの世界じゃ」

「おおーやつた！！

これなら確実にチート能力がもらえる！

じゃないとあんな死亡フラグ満載な世界生きていける訳がない。  
さて、どんな能力で無双しようつかない

「先に言つておぐが、チートな能力はやりんぞ」

は？

なんだつて？

じゃあなんだ。つまりあんな死亡フラグ満載の世界をただの人間のまま生きろっていうのか？

絶望した。

「俺に死ねと？」

「じやが心配は無用じや。  
あちりの世界で闘いなんかせず[安全に暮らせるよう取りつけ]から  
の」

はあ？

「ではゆくわ」

「え、」

ワンピースの世界に闘わず安全に暮らせる場所なんてあるのか？

おい、ちょっと待つ

俺の立つてこると「ひた六」が開く。

「良き人生をのー」

落ちる俺

うん？

俺、どうなつたんだっけ？

確か神に穴に落とされて、それから

とにかく目を開けてみよう。

「おお、目を開けたぞ！ サマルドリア！」

目の前には三十代ぐらいの男の顔。

「本當ですか！ゾディアック！」

パタパタと音が近づいてきたかと思つと、二十代ぐらいの女の顔が目の前に現れた。

「アラマキアは、可愛いの？」

「ほり、ゾディアック。目元なんかあなたそっくじよ

「ほりー・さうかのつ

微笑ましい会話が続けられる。

俺の名前はテラマキアと言ひひじい。

それと今、俺は赤ん坊らしい。

後、会話から察するにこの一人の男女が俺の両親なんだろう。

「ほりまではいい。

問題は彼らの容姿だ。

(マジかよ…)

その容姿は原作ではほりつことなき悪として描かれた

天竜人だった

## 第一説：天竜人（前書き）

主人公テラマキアの天竜人に対する印象の話。

## 第一説：天竜人

「いやはや、時が流れるのは早いな…」

天竜人として産まれてからあつという間に4年の歳月が流れた。

そしてやつぱり天竜人は漫画と変わらず胸糞悪い奴ばかりだった。

2歳の時に屋敷から両親と初めて外に出たが、愕然とした。  
普通に人や魚人に鎖をつけて、ペットみたいに連れて歩いているのだ。

それどころか殴る蹴るの暴行も加えて、最後には殺していた天竜人  
すらいた。

（漫画で見るより酷いじゃねえか…！）

あまりにも残酷過ぎて、吐いてしまったこともあった。

（いくら安全に暮らせるからと言つてもこれは耐えられないぞ…）

神の奴め…覚えてろよ…

そして今、俺は4歳だ。

一応原作知識は頂上戦争まである。しかし、

「今はいつたい、いつなんだ？」

今年の年代がいつなのか全く分からなかつた。

世間はどうなつてゐるんだ?

原作、もうはじまつてゐるのか?

俺はまだマリージョアから出たことはなかつた。

理由は簡単。

ゾディアック父様が出ることを許可してくれなかつたからだ。

どうやら俺を下々民、つまり人間に近づかせたくなかつたかららしい。

天竜人の価値觀つて本当に腐つてるよな。

でも父様はまだマシだった。

まあマシといつても他の天竜人と比べてだけど。

父様も奴隸を持つてはいるが殺したりすることはなかつた。  
役に立たなくなると解雇するだけ。他の天竜人なら役に立たない=殺すだからな。

ある意味殺人狂じゃね。天竜人。

だが、俺は母様を見て天竜人の価値觀が変わつたんだな。

驚くべきことに母様は一般的の天竜人とは全くの逆だつた。

奴隸は一切持たないし、

前に父様から奴隸をもらっていたが、わざと逃がしたりしていた。

他にも、他の天竜人が下々民と同じ空気を吸うのが嫌だからといってつけているシャボンや防護服を身につけている姿を一切見たこともなかつた。

そのせいで他の天竜人から変わり者扱いされているのだ。  
かの父様もどうやら母様に感化されてあんなふうにマシになつたらしい。

前になぜそんなことしているのかそれとなく聞いてみたことがあつた。

そしたら母様は話してくれた。

「そうね…罪滅ぼさしかしら。母さんはね、小さいころに人せらいに誘拐ヒヤーマンされて人間オークションに売られそうになつたのよ」

「もうだめかと思つた時、とっても強い人間が入下さいを蹴散らして助けてくれたの」

「私は彼に聞いたわ「どうして助けたの。私はあなたたちが憎んでいる天竜人よ」って。そしたら彼は「誰かを助けるのにそんなのは関係ない」と言つたの」

「私には衝撃的だつたわ。今まで人間は憎悪しか向けられたことがなかつたから。ましてや助けてくれるなんて思いもしなかつたわ」

「私は彼を屋敷に招いてお礼するために、両親に紹介したわ」

「事情を知った両親はいきなり銃で彼の頭を撃ち抜いたの。『下々民の分際で娘に触れるとは何事だつて』ね。助けてくれたことを棚にあげて」

「私はショックを受けたわ。助けてくれた彼が殺されたこともだけど、それよりもその彼を殺したのが自分と同じ天竜人だつてことに。吐き氣すら催したわ」

「その時に初めて分かつたの。目の前で大切な人が殺される人間の気持ちが。そして誓つたの。そんな天竜人にはならないってね」

そんなことが…

「あら、少し熱がはいりすぎてしまつたわね。テラマキアは少し難しかつたかしら」

大丈夫だ、母様。  
ちゃんと理解してゐる。

「そう。でもねテラマキア、これだけは覚えておいて。たとえどんな人から助けてもらつたとしてもその恩を忘れないで。そして必ずその恩をかえしなさい」

その言葉を重く受けとめる。

浅はかだつたよ、俺は。  
今まで天竜人が悪だと認識していた。  
でも母様みたいな天竜人もいる。  
全てが悪ではないんだ。  
海賊みたいに。

俺はその日に天竜人に対する認識を改めた。

他にも天竜人についていくつか分かつたことがあった。

まず漫画の天竜人は語尾に「～え」や「～アマス」とつけたりするが、実際にやっているのは一部の天竜人だけだつたりする。

これは意外だつたな。

漫画で見ていた時、全員が語尾に「～え」とかつけると思ってたんだが。

まあ現に俺の父様と母様はつけてないからな。

それと全ての天竜人はどでかい屋敷を持っている。いずれの屋敷も絢爛豪華だ。

金の無駄遣いだろ。

広すぎるから今でもたまに迷ってしまうことがある。

あ、そうそう。

原作でシャボンディ諸島に出てきた天竜人のロズワードは家の近所さんだ。

とはいもののまだまだ若いが。当たり前にまだ子供のチャルロスとシャルリアはいない。  
二十代だろうか。

ん、待てよ。

原作に出たとき、正確な年齢は分からなかったけど見た目からして恐らく四十年代だったはずだ。

つまり今は原作より最低でも二十年以上は前とこいつになれる。

やつたぜー！

思わぬところから情報ゲットだ！

状況を整理するためにモノローグしたのが功を奏したな！

「何を喜んでおるのじゃ？ テラマキア」

「あつ父様」

俺は現実に引き戻される。

「こえ、他愛のなことあります」

「まう、やうかの」

あぶねー。

危うく変なこと口走りそうだったが。

「それはそつとの、テラマキア。お前に伝えたことがあるのじゃ

伝えたいこと？

「何ですか？」

「外に、出でみるかの？」

「本当にですかー！」

「本当にじゃ。お前もそろそろオーケーションに行へのも遅くなこと思つての」

「げつ人間オーケーションかよ..」

「まあいいや。外に出れるなり向でもいい。」

「行きませー。」

「うむ、では支度をせよ」

「まーじー待つてうよ、シャボン『トイ諸島』ー」

第一説：天竜人（後書き）

ネタがねえ。

## 第一回説・シャボンテイ諸島（前書き）

初めてのシャボンテイ諸島。

## 第一二説・シャボンティ諸島

やつてきましたシャボンティ諸島！

いやー、圧巻だな。

シャボン玉にヤルキマン・マングローブ、スゲー！

「どうじゃ、初めての外は？」

「すごいです！父様！」

「はつはつは！それはよかつた」

シャボンティ諸島には俺と父様、巨人族の奴隸と何人かの守護兵を連れて来ている。

母様は防護服を着ないので父様がついてくることを禁止した。故に今ここにはいない。

そもそも母様は人間オークションに行くのは嫌がっていたしね。

まあ、それはいいんだが、マリージョアをぐる時に着せられたこの防護服は窮屈だな。蒸し暑いし。

よくこんな服着るな、天竜人は。

それともう一つ。

「それはそつと、テラマキア。巨人の乗り心地はどうじゃ？」

「は、はい。いいです」

そう、俺は奴隸の巨人に乗っているのだ。

一応罪悪感はあるのだが、恐ろしいことにそれをあまり感じなくなつていてる。

やつぱり4年も天竜人をやつてると少しへ影響されてしまうのだろうか。

俺もあんな天竜人みたいに…

いやいや、そんなことはない！

頭を振つてそんな考えを払う。

「どうかしたかの？ テラマキア」

「いえ、なんでもありません」

今は初めてシャボンディ諸島に来れたんだし、変なことを考へるのはやめよう。

それにして、本当に天竜人つて恐れられているんだな。

さつきから道行く人全てが膝をついて俯いている。

背徳的だが何かこいつ、優越感を感じてしまうな。

はつーやばい。今また天竜人の思考になつてた。  
油断ならないな、本当に。

「ん、あれはロズワードかの」

父様の視線の先には何か争っているロズワードと人間の女性と子供がいた。

「貴様、下々民の分際で！！何様え！」

「お許しください……！」

「ビエエエエン！ママあ！」

「うるせーえ！死ね！」

ジャキンッと子供に銃を向けるロズワード。

おこおい、ちょっと待て！

「待つてくださいーーロズワードさんーー！」

慌てて、巨人族の奴隸から飛び降り、ロズワードと子供の間に割つてに入る。

「むつー！テラマキア、貴様下々民の味方をするつもつかえー！」

「あ、いやその……」

やべえ……

反射的に飛び出してしまったから何も言い訳考えてねえ。

「テラマキアは誰かが死ぬところを見るのは嫌つておるから。のう、テラマキア」

「あつ、はい父様」

ナイス助け船！父様。

「これはゾディアック！そりであつたかえ。確かに下々民の血を見せるのは教育に悪いしな」

ロズワードは銃を下げてくれた。

子供の前で奴隸使つてる奴が教育に悪いとかよく言つよ。

「それでどうしたかの？ロズワード？」

父様がロズワードに声をかける。

「そうだ。聞いてくれえ。この人間の子供が私の通り道にボールを転がしたのえ！」

えー……。

本当にむちやくちやだな。  
どれだけ心狭いんだよ。

「ロズワードさん。下々民に構つ価値すらないんだから、捨て置き

まじょつよ」

俺はロズワードの氣をなんとかそいつとする。。

「むへ、しかしこの人間は私の通り道に……」

「もういいじゃら、ロズワード。テラマキアの言うことはもっともじゃ。それにもうすぐオーラクションも始まってしまつしの」

「…ゾディアックがいうなら仕方ないえ。ふんつ、人間。私につまらないことに時間を使わせるなえ！」

女性を一回蹴りあげてからロズワードは自分の奴隸に乗つた。

「ほらつゾディアック。早く行くえ」

「分かつておる。ほら、テラマキアも」

「はい、父様」

俺も急いで巨人族の奴隸に飛び乗つた。

ふう、よかつた。

せつかくの初めての外なのに血を見るなんてごめんだしな。

## 人間オーケション前

とうとうきたか。

人間オーケション。

出来れば遊園地とかの方がよかつたけど、ここに興味が無いかと言われば嘘になる。

「これはこれは、ゾディアック聖にロズワード聖、そしてテラマキア聖。ようこそお越しくださいました」

係員の一人が挨拶をしてくる。

「か、テラマキア聖つて。

何回か言われたことはあるが、こそばゆいもんだな。

「会場内では膝つきなどの作法は無礼講願います」

「つむ、分かつておる」

「じゃないと、競りにならないもんな。

「ありがとうございます。それではVIP席の方へ案内いたします」

「早くするえ」

「はつ」

俺たちは奴隸から降り、席へと案内された。

「今日は何か入つておるかの？」

「はい、それはもうすこいのがはいっていますよ

すこいの？」

「人魚か？」

「それはお楽しみです」

勿体ぶるなよな。

何だらう?

全然分からん。

「それでは皆さま長らくお待たせ致しましたーー！」

舞台の中央に司会が現れる。

「まもなく」

「毎月恒例一番G.R」

「ヒューマン  
グローバル  
人間オーケションを開催致したいと思いますーー！」

オークションが始まった

うーん、思ったより退屈だな。

出てくる奴隸もイマイチパツとしないし。

原作みたいに冥王レイリーに会えるかなと思つたけど、よく考えたら今は最低でも原作の20年以上は前なんだからレイリーがいる可能性は限りなく低いんだ。  
早く終わらないかな。

「さあ、始めます。

次が最後にして今回の田玉ですー！」

ん、いよいよ最後か。

どうせ田玉も大したことないんだろ。

「海軍本部中将、？鍊金？のガイアです！－！」

ほらやつぱり大したことない海軍本部中将…

つてええええ――――――! ! ?

江東之書

サワサワサワ

会場がどよめく。

「そう、あの名高い？鍊金？です！彼は悪魔の実？自然系？ツチツチの実の能力者で、その実力も折り紙付き！残念ながら安全のために海楼石の手錠をつけておりますので能力をお見せする」とはできません」

いやいや、海軍本部中将つてあんた。

名前は原作では聞いたことないけど、中将だから霸氣も使える上に、ロギアの能力者なんだからメチャクチャ強いはずだろ！？

でも人間オークションに出されるってことは誰かに負けたってことだよな…

いつたい誰に負けたんだ？



誰からも声は上がる」とはない。

「それでは、海軍本部中将ガイアはゾーティアック聖が落札——！——！」

「ほれ、テラマキア。初めて外に出た祝いじゃ」

「う、うれしいです

うーん、まあ使い道は考えたし、海軍本部中将だ。聞きたいことも  
ある。

初めての外出でとんでもないもん、得ちまつたな俺。

## 第一回説・シャボンティ諸島（後編）

若いロズワード聖つてチャルロス聖みたいな感じだと思つ。

第三説・?元?海軍本部中将（前書き）

スミマセン。

文化祭とかで忙しかったので更新遅れました。

## 第三説・?元?海軍本部中将

人間<sup>ヒューマン</sup>オークションで海軍本部中将の?鍊金?のガイアを買って家に帰つてきた後、父様が母様に「なに、テララマキアに奴隸<sup>』</sup>えてるの!」としばかれていた。

その後、母様にその人を逃がしてあげなさいと言われて手錠と首輪の鍵を渡され母様は父様を引っ張つて部屋から出でていった。故に今は2人きりである。

ていうか母様、父様に馬乗りになつてジンタしてたぞ。怖ええ。で、母様には逃がせと言われたけど俺はこいつに聞きたい事とかしてほしい事があるからそつ簡単には逃がすことはできない。しかし、

「何かしゃべれ

「……」

「…しゃべつてくれ

「……」

「お願<sup>い</sup>い、しゃべつて

「……」

なーんにもしゃべつてくれない。

これ以上ない氣まずい雰囲氣。

父様母様、心が折れそうです。

はあ。

仕方がない。

俺は母様から『えられた鍵でガイアの海棲石の手錠を外した。

「…」

「さあ、手錠は外したから話してくれ

「…君はどうしてこんなことをする?..」

おつー

やつと口聞いてくれた。

「どうしてって、話してくれないからだよ

「私はロギアだぞ?首輪を外して今すぐ逃げるかもしれないんだぞ

?』

あつ。

「…不思議な天竜人だな、君は

「でもあんたは逃げずにいるじゃないか

「…そつか?」

確かに他の天竜人に比べたらずいぶん違うだろうが。

「とにかく話を聞いてくれるか？」

「…分かった。聞く。君は他の天竜人とは違うよ」だからね

よかつた。

聞いてくれるみたいだ。

「よし、あんたには聞きたい事としてもういたい事、一つある。まずは聞きたい事だ」

「なんだい？」

「ゴール・D・ロジャーはどうなった？」

やつぱり年代を確かめるならこの事だろ？  
これで22年以上前か後かが分かる。  
大海賊時代かそうでないかが。

「？　どうなったって、別にどうもしないが

「本当？」

「本当だ」

よし、これで原作より22年以上前だつてことが確定した。  
大海賊時代はまだ始まっていない。

「何でそんなことを聞くんだ？」

「いや、別にたいしたことじゃない」「

さて、次こそが本題だ。

受け入れてくれるかどうか…

「じゃあ次だ。あんたにしてもらいたい」と。それは「…

俺は一息を吸い込む。

そして言った。

「俺を、鍛えてくれ…！」

「……は？」

ガイアは啞然としている。

「今、なんて？」

「いや、だから俺を鍛えてくれ…」

確かに唐突だけど。

「…ダメか？」

「ダメというわけではないが…何故なんだ？君は天竜人だろ。なら強くなる必要なんてないはずだ」

「それは…」

やつぱりある程度は強い方がこの世界では動きやすいし、損はないと思つ。

俺は膝をついた。

「頼む、お願ひだ！！」

そして、土下座した。

「お、おい！顔上げるんだ！」

「鍛えてくれたら必ず逃がすから！」

「わ、分かった。分かつたから！鍛えてやるから土下座はやめてくれ！」

「本当か！？」

思わず顔を上げる。

「あ、ああ、本当だ。君は天竜人なのにどうして奴隸なんかに頭を下げたり…」

「え、人を頼むのに頭を下げるのは当たり前だ。ましてや鍛えてもらつんだから土下座ぐらいしないと」

「…君は本当に不思議だな」

天竜人としてはおかしいだろうな。  
だが生憎俺は転生者だからな。

その辺の礼儀はちゃんとあるんだ。

「とにかく鍛えてくれるだな？」

「ああ、鍛えてあげるよ。テラスマキア聖」

「そんな堅苦しい呼び方はやめてくれ。テラでいい」

「えつ、でも私は君の奴隸で…」

「これからあんた、えつとガイアさん、は俺の師匠なんだから

「……仰せのままに、トラ」

「よしー。」

やつたぜー！

何せ海軍本部中将だからな。  
絶対強くなれるはずだ。

「ん、つい言えばまだ聞きたいことがあつたんだ」

「なんだい？」

「ガイアさん。なんで人間オーフショーンなんかにいたんだ？」

「……」

俺がそう聞くと、ガイアは黙ってしまった。

「話したくないんだつたらいいんだ、別に…」

「……負けたんだ。私は」

俺が話を切り上げようとした時、ガイアは話しだしてくれた。

「負けたつていつたい誰に？」

何しろ海軍本部中将だ。

一筋縄では倒せない相手なんだから倒した奴もそれなりに名のある奴なんだろう。

「わからない…」

分からぬ?

「どうこうことだ?」

「…私は無名の海賊に負けたんだ」

「おいおい、嘘だろ…！」

「奴には私の攻撃がまったく通用しなかつたんだ」

何かの能力者だつたんだろうか?

「そして私は突然ものすごい衝撃を受け、気を失つたんだ…」

一撃でやられたのか…

海軍本部中将を一撃つてどんだけ強いんだよー

「そして気が付いたらいつの間にか人間オーケーションにいたというわけさ」

「そうか…」

「テラマキア、彼は逃がしてあげましたか？」

ガチャツと扉が開いて母様が部屋に入ってきた。

「か、母様！？」

「あら、まだ逃がしていないの。早く逃がしてあげなさい」

「あ、あの？」

ガイアは戸惑っている。

まあ、当たり前か。目の前で天竜人が自分に逃げてと言つてるんだからな。

それよりも母様には鍛えてもらひことは話しておこうかな。

先にばらしておいたほうが動きやすいし、母様ならきっと分かってくれるはずだ。

「ねえ、母様」

「ん、何ですか。テラマキア」

「私は強くなりたいんです」

「？」

「だから彼に鍛えてもらひたいと云いました」

「……何言つてゐるの……テラマキア……やめなさい……そんなの危ない  
じゃないの……」

「母様……どうか分かってください……」

「ダメです……」

「お願ひします……母様……」

俺は頭を下げる。

「…………」

沈黙。

「……それがあなたの意志なのね、テラマキア」

「……はい」

「やう。ならあなたの血由にしなやが……」

「母様……あつがとうござります……」

「子が本氣で何かをしたいといつんだもの。それを止める親がどこにいるのよ。」

母様はガイアの方に向き直る。

「ガイアさん、でしたわね。テラマキアをよろしくお願ひします」

「は、はー…」

気の抜けた返事をするガイア。

「テラマキア。ゾディアックには私から言つておくから安心しなさい」

「何から今まで本当にあつがとうござります、母様」

「じやあやんからほんと強くなつてね」

そう言ひて母様は部屋から出ていった。

「君の家族もすべく不思議だな」

「そういう天竜人もいることを」

「うして俺は家族公認で？元？海軍本部中将に修行をつけでもうえ  
ることになった。

「…何故元のところを強調する？..」

「地の文読まないでくださいよ、ガイアさん…」

第三説・?元?海軍本部中将(後書き)

次は修行編に入ると思っています。

第四説・修行（前書き）

馱文め……！

## 第四説・修行

シャボンティ諸島からちょっと離れた小島。

「ほらー遅いぞ！」

「くっ、ガイアが早いんだよ！」

俺とガイアは戦っていた。

勿論俺は防護服やシャボンはつけていない。

「嵐脚ーー！」

神速の蹴りで斬撃を放つ。

「甘ーー！」

が、避けられる。

そして裏拳を叩きこまれる。

「鉄塊ー！」

俺は鉄塊でガードする。

「指銃？ 黄連？！！」

指銃の連打でガイアを狙うが、ガイアはすると避けて俺の腕を掴んだ。

「ふんっー。」

地面に叩きつけられる。

「こつてえ……！」

「まだまだだな」

ガイアは俺を見下ろしながら言った。

「くそつー！紙重と円歩以外は使いこなせるようになつたのに

鍛えてくれとガイアに頼んで一年の月日が経つた。

驚いたことにガイアは六式の使い手でもあつた。

すぐに教えてもらえたと思つたけどその考えは甘かつた。

最初は走り込みや腕立て1000回、腹筋1000回など体力作りばかりさせられた。

あれはキツかつたなあ。

「なあ、早く教えてくれよ。六式を」

「だめだ」

「何でだよーー？」

「体力のない素人の一般人じゃ覚える」とさえできぬからな

「そんなん…」

「だからまずは体力作りだ。この島の外周をぐるっと5周、それから腕立て、腹筋を1000回ずつ3セットだ

え？

今なんかあほみたいな数が聞こえたぞ？

「ごめん、ガイアさん。もう一回言つて？」

「島の外周を5周と腕立て、腹筋を1000回ずつを3セットだが

……。

「……あなたは俺を死なせたいのか？」

「がんばれ、テラ（笑）」

「笑つてんじやねーよーー！」

ちくしょーーーいつか絶対泣かせてやるーー

俺は涙目になりながらさう誓つた。

ああ、今となつてはいい思い出だなあ。

そんな感じで今では気軽に呼び合いつ仲である。

「しかし四式しか使えないとはいえ、たった一年でここまで成長するとは驚きだな」

「やつか？」

「ああ、テラ。お前も十分超人の域にいるぞ」

「こちとら師匠が超人を越えた化け物だから全然実感できないけどな」

実際マジでガイアは化け物だと思う。

一年間ガイアに修行をつけてもらつたけど、今まで一度たりとも能力を使わせることができなかつた。

ガイアが持つ悪魔の実の能力。

ツチツチの実。

以前一度だけ見せてもらつたことがある。

それは本当に恐ろしいものだつた。

だつて地割れ起こせるんだぜ！！

その時その地割れで山ひとつ沈めちまつたんだからな。  
全然笑えねーよ。

「しまつたな…。？大地の怒り？（ガイア・ヴァジュラ）なんか使わざもつと軽めの技使えばよかつた」

本人はその時そんなことを呟いていたりした。  
ロギアって本当に恐ろしいな。

「お前ももう6歳か。6歳でこの強さの奴はなかなかないから誇つていいぞ」

なかなかないなって、いるにはいるのかよ。

「修行場所を確保してくれたテラの親父さんには感謝しないとな」

そうそう。

この俺たちが修行に使っているこの小島は父様が見つけて連れてきてくれた島なのだ。

今もこの島にくる時は父様がくれた小型船で来ている。  
父様も俺が修行をするのを応援してくれた。

「がんばるのじゃぞ。テラマキア

何故か顔が腫れ上がっていたが。  
尻に敷かれてるなあ、父様。

そういうえば何で父様と母様は結婚したんだろう?  
言ってみれば母様は天竜人では異端者だ。  
そんな母様を何で父様は選んだんだろう?  
今度なれ初めでも聞いてみようかな。

「なにボーッとしてるんだ。続きをするぞ」

「ん、ああ」

俺は立ち上がり再び構える。

「さあいつでも来い

「つおおつーー！」

修行は続く。

島から帰る途中の小型船の船内。

「いてて…」

俺は顔を腫らしていた。

顔だけじゃない。

身体中打ち身や擦り傷だらけである。

「あんたは手加減で言葉知らないのかよ。俺一応まだ6歳の子ども  
だぞ」「

俺をそんなことにした張本人、ガイアに抗議の声を上げる。

「弟子だからな（笑）」

「…あんた絶対地獄に落ちるよ」

俺はにやついた顔で言うガイアにそう言い放つてやつた。

ひどい奴だ。

だつて攻撃に武装色の霸氣を纏わせてくるだぜ。

痛いのなんのつて。

それにこっちの攻撃は見聞色の霸氣で全部見切られてカウンターを  
ことごとく食らつてしまつ。

こつちは霸氣なんてこれっぽちも使えないのに。

これを大人げないと言わずなんと言つ。

ガイア曰く、霸氣を体感していたほうが霸氣を会得しやすいらしい  
が正直言つと全然わからない。

といふかガイアがただ単に俺を虐めたいだけな気がする。

「なあ、ガイア」

「何だ、テラ」

「俺には才能がないのかな?」

「何言つてるんだ。お前は6歳でこの強さだぞ。もう既に並みの海  
兵じゃ辿り着けない領域まできてるぞ」

「でも俺は六式すら満足に扱えないし、まだ全然霸氣も使えないだ  
ぞ」

「……」

ガイアは少し黙つて、それから俺の顔に手を持つてきてやして、

「バカかお前は」

「いひつ」

「デパッパンをかました。

「あのな、テラ。お前は焦りすぎだ。」

「え？」

「こくら才能があるとこつてもお前はまだ6歳だ。まだまだこれからが成長期だ」

「……」

「だから焦らすむつじと強くなればいい。時間はたっぷりあるんだ」

「ああ……」

「そうか。」

俺は無意識に焦っていたんだな。

俺が無意識に焦っていた理由。

やっぱりそれは恐いくの事件が起じると知つてこむからだらう。

聖地マリージョア襲撃事件。

後にタイヨウの海賊団を結成するフイッシャー・タイガーによって引き起こされる事件。

あの事件で少なからず天竜人も死んでいる。  
もしかしたら原作では父様と母様も死んでしまったのかもしれない。  
でもそんなことはさせない。

俺が強くなつて父様と母様を守るんだ。

いくら天竜人だといっても俺にとつては大事な父様と母様だからな。

俺は改めて強くなる決心をした。

「まあ、テラはいつまでたつても私を越えることはできないがな」

…………ついでにガイアをいつか泣かすことも改めて誓つた。

第四説・修行（後書き）

悪魔の実は食べたほうがいいかな  
…

## 第一外伝説・思い出と願い（前書き）

ゾディアックとサマルドリアのなれそめの話。  
基本ゾディアック視点で進みます。  
いつもよりかなり長いです。

## 第一外伝説・思い出と願い

「父様、母様行つてきまーす」

「これ、テラマキアー島に行くまでぐらいう防護服を着けていかんか  
！」

「ふふつ、ガイアさん。今日もテラマキアをよろしくね」

「分かりました。ほら、行べぞテラ」

「分かつてゐつてーちえつ、分かりましたよ父様。着ますよ防護服  
！」

「うむ、分かればいいんぢやー！」

ぶつぶつ言つながらテラマキアは防護服を着て、行つてしまつた。

「ああ、しかし奴隸にあんな気軽に口をきいて……。」

わしは頭を抱える。

「他の天竜人にバレたりしたらだじゅすまんぞ……」

「あり、その時はあなたが守つてあげればいいぢやない。あの時、  
私を守つてくれたみたいに」

「あの時か……。簡単に言わんでおくれ。あの時もギリギリだったの  
じゅかひ

「ふふつ、懐かしいわね」

妻が顔を緩ませる。

「ああ、 そうじゃの」

わしは懐かしき大切な思い出へと意識を飛ばす。

そのころの私は飽きていた。

この世の全てに。

私は早くに両親を亡くし家督を継いでいたために同世代の天竜人は羨ましがれていた。

周りの天竜人はやれ下々民は汚いだの自分達は至高の種族だの同じことしか言わない奴ばかりだった。

でもそれらは皆例外無く私の持っている権力や屈強な奴隸をみて羨む視線を向けてきた。

世界に力でなびかないものはないと信じていた。

そんな時である。

彼女と出会ったのは。

ある日私は奴隸である巨人族を連れて歩いていたとき、道端でちょっとした人だかりができていた。

「「」の異端者め！」

「下々民に侵された下賤！」

「天竜人の風上にもおけぬえ！！」

いつたい何なんだ？

そう思い人だかりに近づいてみる。

その中心には見るも無惨な姿の天竜人の女性だった。

「……」

その女性は周りの天竜人に暴力を振られて傷だらけである。しかし、

「ほつ…」

顔は美しい女性だった。

「おい、何してる」

「…！ これはゾディアック殿。」

天竜人の一人が媚びへつらうよつに頭を下げる。

「今、この異端者を肅清していただこうなのです」

「異端者？」

「はい。この者は防護服を着ないどころかあまつさえ下々民に施し

を行つたりしたのです

「天竜人の面汚しだえ！」

「ふむ…」

私は女性のほうに向き直る。

「おい、お前助けてやるつか

「……！」

「な、何を言うのです！ゾディアック殿！」

「少し黙つていろ」

「なつ！」

この天竜人の女性は素材がいい。  
恩を売つてそれで脅せば、言つことを聞くだろう。

最近飽き飽きして いたからな。  
これで遊んで暇を潰すか。

「さあ、どうなんだ？」

結果は分かつて いる。

今まで力でなびかないものはなかつたのだから。  
権力に屈さない奴はいないのだ。

心の中でそんな世の中を嘲笑つた。

「……お断りしますわ」

なに？

「何……だと？」

「私はあなたみたいな心が腐っている人には死んでも助けられたくない  
ありません」

信じられなかつた。

今起こつている現実が。

ありえないと思つた。

今日の前で喋つてゐる女性が何か別の生き物に見えた。

今まで権力をちらつかせればどんなものも従い、手にいれることができた。

ましてや逆らう奴などこれまで一人だつていなかつた。

しかしこの女性は逆らつたのだ！

逆らえばこの後にどんな酷いことが待ち受けているか容易に想像できるはず。

にも関わらず彼女は私に逆らつた。

臆面もなく。

屈することもなく。

私に従わないとはつきり言つてのけたのだ！

「貴様！ゾディアック殿に向かつてなんて口を…」

天竜人の一人が女性を蹴りあげる。

「殺すな」

「え？」

「殺さない程度に痛めつけろ」

「は、はい！」

「そして明日またこの場所に連れてこい」

「分かりました！」

私はその場を去りながら考えた。

何なんだ、あいつは？

全然考えていることが分からぬ。

まさか飽きてしまったこの世界にそんな奴がいるとはな…

私はいつの間にか彼女に興味を持つていた。

再び昨日のあの場所に向かう。

やはりそこには昨日と同じように天竜人の女性と女性に暴力を振るう天竜人がいた。

女性の姿は昨日よりも酷くなっている。

「おい」

「！ これはゾディアック殿。約束通りこの異端者を連れてきまし  
たぞ」

「うむ、それで」

女性を見る。

「今一度聞く。助けてやろうか？」

「また…！？」

天竜人たちがざわつく。

「いりません」

女性はキッパリと断つた。

これだけ痛めつけられてまだ屈しないのか。

普通の天竜人では考えられない。

何を彼女がそこまでさせているんだ？

私はそれが気になつてある決心をした。

「お前、私の屋敷に来い」

「なつー！」

「……！」

皆酷く驚いている。

「何故です！何故こんな者をゾティアック殿の屋敷に！」

「勘違いするな。私はこの手で私の慈悲を一回も払い除けたこの異端者をいたぶるために屋敷に来させるだけだ。おい

「ツーきやあーー！」

私は顎で巨人族の奴隸に指図し、女性を捕まえさせた。

「くへ、離して！」

「そのまま屋敷に連れていくぞ」

巨人族の奴隸にそつ命令し私は屋敷へと向かった。

私の屋敷。

女性には手錠を後ろ手につけさせ椅子に座らせていた。

「さて、お前に聞きたいことがある」

「……いたぶるんじやなかつたんですか？」

「あれは嘘だ。本当はお前に聞きたい」とがつた

「聞きたいこと?」

「何故お前は下々民などに施しをした。異端者と呼ばれるのは間違えていたわ」「…………」

「答えないのか」

「……何故」

「一」

「あなたこそ何故そんなことを聞くの?私はあなたの提案を一回も拒否したのよ?」

「…………」

「あなたこそ何故そんなことを聞くの?私はあなたの一回も

「そうだな……確かに屈辱的だった」

私はそこで息を整えた。

「だがそれ以上に嬉しかったのだよ。私の退屈な予想を裏切ってくれたからな」

女性は黙つて聞いている。

「私は世界に飽きていた。今まで私の力になびかない者はなかつたからな」

「だがあ前が現れた。私の力を初めて拒絶したお前が」

「私が飽きた世界にまだお前みたいな奴がいるとは知らなかつた」

「だから私は知りたいのだ。何故お前がそのようになつたかを」

「……」

「さあ、お前の質問には答えたぞ。次は私の質問に答える」

「…分かつたわ。確かにあなたが答えて私が答えないのは卑怯だものね」

そして彼女は話してくれた。

幼い頃ひときらいに誘拐されたこと。

その時人間に助けられたこと。

そしてその人間は自分の親に殺されたこと。

それでそんな天竜人にならないことを誓つたことを。

「だから私は醜い奴には屈する」とはしないの。あなたみたいな力を振り回す醜い人には」

「醜い？私が？」

「そうよ。あなたみたいに力でしか自分を示せない人を醜いと言わず何と言つのよ」

力でしか自分を示せない…

「…クククク」

「？」

「アハハハハハハハハ！」

「え、ええ！？」

「どうが。

そういうことか！」

だから私は世界に飽きてしまったんだな。

私は力でしか世界を見ていなかつたんだ。

それはそうだ。

世界を一つの概念でしか見ていなかつたら飽きてもしまう。  
しかし世界は一つの概念で出来ている訳ではない。

彼女に心があるように。

他の概念からみればある概念なんかは容易く打ち破れたりもする。  
彼女が心で俺の力に抗つたように。

「ハハハハハハハハ！」

たまらなく可笑しかつた。

なんて私はバカだつたんだね。世界がつまらないんじゃない。私がつまらなかつたんだ。

「ハハハ…ハア…ハア…」

ようやく笑い終えて息を荒くする。

「ちょっと、大丈夫？頭狂っちゃつた？」

「いや、狂つてなどいない。むしろ今までが狂つていたな」

女性を見る。

「お前、名は？」

「…サマルドリアだけど」

「サマルドリア、感謝する。私に新たな世界を教えてくれて」

「は、はあ…」

私はサマルドリアにした手錠の鍵を開ける。

「おつと、私の名はゾディアックだ。暇だつたらいつでも私の屋敷に来るがいい。歓迎するぞ。お前は気に入つたからな」

「えつ、でも……」

「遠慮なんかしなくていいだ」

「セツヒトヒヤなくて……」

急に口にする。

「私、異端者だしもう屋敷からも追い出されちゃったから……」

「勘当されたのか」

「…………」

黙つてしまつサマルドリア。

まあ、当たり前か。

普通の天竜人なら自分の家からそんな異端者がでたら悪評が広がる前に縁を切ることを選ぶだらつ。ふむ、なら都合がいい。

「行くところがないなら家に住むか?」

「えつー。」

驚いた顔をする。

「いけません! 異端者である私に関わつたら、ましてや匿つみたいなことをするなんて。あなたも間違いなく異端者扱いされるわよ」

「バレなければどういひとせない。都合のいいことに私の両親は既に亡くなつて家督は私が継いでいる。召し使いや奴隸には口止めすればいい」

「でも……」

「これもお前は拒絕するのか？」

「……私はあなたに醜いとか腐つていろとか酷い」と言つたのよ」「実際そつだつたからな。気にしてはいない」

彼女は顔を俯ける。

「……あなた、急に変わつすぎでしょ。醜いどじろかカツコよくなつてゐじやないの」

そして上げた顔の目には涙がたまつている。

「ありがとう……」

そして溢れだした。

そしてその日から彼女との生活が始まった。

彼女は不思議だった。

誰とでも分け隔てなく接するのだ。

それが召し使いや奴隸であつても関係無く。

だから彼女はすぐに屋敷の人気者になった。

代わりに何故か本来の屋敷の主人である私が蔑ろにされている。

前にサマルドリアが誤つて皿を割つてしまつた時、奴隸や召し使いたちが私たちが割りましたと庇つっていた。それを振り切つてサマルドリアを罰すると彼らからジトーッとした視線を送られた。彼女はありえないくらいに屋敷の皆から慕われていた。

そしてその中で彼女はとても幸せそうだった。

これは天竜人から見たら決して許してはならない

光景だろう。

だが私は彼女が羨ましく思えた。

私にはいくら権力を使つてもあの光景を手に入れることはできない。

人の心は力では手に入れられない。

私は改めて昔の力で何でも手に入れられると思つていた自分を愚かだつたと思い知つた。

そしていつか自分もあんな風に彼女みたいに人から慕われてみたいと願つた。

そんな感じで私は彼女に惹かれていった。

私は異端者だつた。

そんな私を受け入れてくれた天竜人がいた。

彼も元々は周りの腐つた彼らと同じだつたけど、私の言葉から何か

を得たのか人が変わったように私に親切してくれた。

彼は私が異端者だということを躊躇わざ受け入れてくれた。あまりに嬉しくて家を追い出されてからは一度と泣かない誓つたのに思わず泣いてしまった。

そして今私は幸せだ。

今までのどんな時よりも。

彼、ゾディアックのおかげで。

突然、頭にとてつもない衝撃を受ける！！

な、なに…？

薄れゆく意識の中、見えるのは数人の男の姿だった。

私が道を歩いているといつかサマルドリアに暴力を振つていた天竜人の一人が声をかけてきた。

「いい知らせですよ。ゾディアック殿」

「いい知らせ？」

私は正直さつさとあしらつて屋敷に帰り、サマルドリアに会いたいと思つていた。

しかし、天竜人から発せられた言葉に私のその思いは消し飛んだ。

「ゾディアック殿に失礼な口をきいたあの異端者が捕まり、明後日処刑されるそうですよ」

なんだって？

「しかもその異端者をその両親が直々に処刑するらしいです」

頭が真っ白になる。

「何でも家から出た害悪は身内で処理するとか」

サマルドリアが死ぬ

「いや、これでよひやく

私は最後まで聞かず走り出した。

…認めない。

認めてなるものか！

彼女と過ごした日々が脳裏をよぎる。

失うわけにはいかない！

あの日々を。

私の世界を変えてくれた彼女を。

何より私は彼女が、彼女のことが

私は走る。

彼女を救うために。

私は牢の中にいた。

殴られて少し前まで氣絶していたが。  
どうやら私は処刑されるらしい。

覚悟はしていた。

何しろ異端者なのだからありえないことはない。  
悔いはない。

私はやりたいことをやつたのだ。  
それで死ねるのなら本望だ。

そう思つていたら急にあのゾディアックの屋敷での日々が心に浮か  
んできた。

呪じ使いたち。

奴隸の人たち。

…そしてゾディアック。

皆の顔が次々と浮かんで消える。

嫌だ…

楽しかったあの日々。

怖い…！

もう一度と戻れないあの日々。

死にたくない……！！

死の恐怖がこみあげてくる。

助けて……誰か……

ゾディアック……！！

「サマルドリア！」

牢の扉が開く。

「迎えにきたぞ」

その姿は幼い頃に助けてくれた人間の彼にダブつて見えた。

「どうして……」

牢にいた彼女が発した第一声。

「どうして……私を助けるの？私は異端者よ？」

私はその問いにこう答えた。

「お前を助けるのに、そんなのは関係無い」

「……」

彼女は驚いた表情をし、それから顔をクシャッとして、

「うわあああああーーー！」

大きな声を上げて泣き出し、私に抱きついてきた。

私は突然のことの一瞬怯んだが、彼女を抱きしめてその背中を優しく撫でた。

一層強くなる泣き声を私は聞いていた。

屋敷に戻つたら召し使いたちがサマルドリアを心配して近寄つてきた。

彼女は召し使いたちを落ち着かせていたが途中であることに気づいた。

「ねえ、奴隸の皆は？」

それを聞いた召し使いたちは顔を俯けた。

「……？」

「奴隸たちは……」

「お前と引き換えに連れていかれた」

「何よそれ……」

サマルドリアは私に食つて掛かる。

「そんなの聞いてないわよ……」

「お前を救うにはそれしかなかつたんだ……」

「何で私一人を救うために皆が犠牲に……！」

「彼らも望んだことだ

「でも……」

「……私たちちはお前を助けた。それはお前ことって間違つたことなのか？」

「……

彼女は少しの間、黙る。

「……そんなこと

「そんなこと言えるわけないじゃない……」

彼女は肩を震わせて言った。

私はそんな彼女を優しく抱きしめた。

「彼らはお前が幸せになる」と願っていた

「だから言ひよ。私の気持ちを」

「え…？」

「サマルディア」

「私はお前が好きだ」

「…」

「だから私と一生いてほしい」

ありつたけの思いを込めて言つた。

「…あなたばかでしょ。全然そんな雰囲気じゃないのに」

顔を上げて私を見つめる。

「私は異端者だよ。それでもいいの？」

「よくなかつたら助けてなこせ」

「ふふつ、そうね」

彼女は軽く微笑む。

「私も好きよ」

「 セウカ」

彼女を強く抱きしめる。

「 よかつた…」

召して使っていたの拍手が聞こえる。

いつも私は結ばれた

「 本当に癒かしこのう」

「あれからもう二年も経つのかね

「 セウカ ザジウのう」

本当に長かった。

彼女に対する排斥を無くすために今まで色々な根回しをした。汚い  
こともした。

そのかいがあつてか今は昔比べるほどごぶんマシになつてゐる。

「 あなたこは苦労をかくなはなしな。 テリマキアのことむ…」

「そう、6年前にはテラマキアのこともあった。」

「サマルドリアと私の子。」

「異端者の子どもと知れたらあの子にどんな危害が及ぶか分からぬ。」

「だから私はあの子のためにサマルドリアにためにした」とよりもた  
くさん汚いことをした。

「越えてはならない一線も越えてしまった。」

「世間にもバレないようにわざと極悪な天竜人の振りもしている。」

「そのために口癖も変えたりした。」

「そして今はまだバレないで済んでこる。」

「だけどそのせいであなたがあの子に疎ましく思われるなんて……」

「まだテラマキアにはそのことを言ひていれない。」

「だからあの子から見たらわしは悪い奴に見えているだらう。」

「いいんじゃよ」

「彼女の肩に手を置く。」

「全てはあの子を守るために」

「親は子のためなら何よりも汚くなれるもんじゃ」

「その代わりお前はいつまでも綺麗であつてくれ。あの子のために」

「わしは笑う。」

「汚れきった悪役は一人で十分じゃからの」

もしかしたらいつかはバレてしまつかもしれない。  
それでもやつぱりその時は

「何とかして助けちゃうんでしょ？」

わしの心を見透かしたよつこサマルドリアが言つ。

「あなたは昔からやうこつ人だから」

そうだな。

確かに助けるだらつ。

何としてでも。

でもやせつでさればそんなことにはなつてほしくない。

願わくはあの子がこの先幸せでござりますよつこ

わじまねつ思つた。

第一外伝説・思い出と願い（後書き）

無駄にゾディアックがかっこよくなつた。

**第五説・初めての戦闘（ヒヒ独壇場）（前書き）**

修行の成果。

## 第五説・初めての戦闘（ヒヒの独壇場）

「いつものように小島で鍛練をして帰りの船の中。

「ハハハ…」

「こつこつもましてボロボロな俺。

「まだまだ弱いな（笑）」

それを見て笑うガイア。

「いつもと変わらない平和？ な日常。

「なあ、ガイア。せめて霸氣は無にしてくれ。攻撃読まれちゃ勝てないぞ」

「ダメだ。これもお前のためだからな。お前も早く霸氣を覚えたいだろ？」

「確かにそうだけど…」

「なら我慢しろ。それに実際見聞色の霸氣なんて上位者同士の戦いになるとあまり役に立たない。考えを読んでいる暇なんてないからな」

「…本当の理由は？」

「私がお前をボロボロにしてスッキリしたいか……、ゲフン、ゲフ

ンー何でもない

「おじいちゃん、ちょっと待てガイア。てめー今本音漏れただろ

ボコボコにしてスッキリしたいからって聞こえたぞ。

「空耳だ

「シラをきるな

「……

黙りこくるガイア。

「……？ 錬金？ ダイヤモンド？」

「あつー！」

「？ 大地の揺りかご？（ガイア・エッグ）ダイヤモンドバージョン

ガイアがダイヤモンド製の丸い壁に包まれた。

「ちよつ、こらー！ ガイアー！ 能力使って逃げるなー！」

「……

とっても平和な日常だった。

まあ、そんなこんなで船はシャボンティ諸島に着いた。

「ほら、早く防護服着ろ。テラ」

今の今までダイヤモンド製の丸い壁に隠れていたガイアが能力を解除して船から降りる。

「ガイアお前、後で覚えとけよ…」

「覚えておいてもいいが、お前は私に勝てないだろ？？」

「うぐ…」

「んちくしょー！」

言い返せないのがまた悔しい。

「諦める、テラ（笑）」

……泣かす。

いつか絶対泣かす。

俺は防護服を着ながらいつものようにそのままして傷が多いな

「ふむ、にしてもいつにもまして傷が多いな

確かにさつきからジンジン痛みますが。

「特に顔の傷は不味いな。何があつたか勘ぐられるかもしねない」

そうだ。

体の傷は防護服で隠せても顔は隠せない。  
他の天竜人に何があつたか聞かれて奴隸に修行をつけられている、  
なんてことがバレたらただじや済まない。

「…仕方ない。近くで顔を隠すマスク買つてくるからニード待つて  
る」

「え…」

そう言ってガイアは街の方に行こうとする。

「ちょっと待てよ。マスクなんかしてたら余計に怪しまれないか?」

「下々民と同じ空氣ができるだけ吸いたくないからだ、とでも誤魔化せばいいだろ?」

「あつ、わうか!」

納得する俺。

しかしむりっぽり罪悪感があるなあ…

「とにかく買つてくるから必ず」ここで待つていよう

そう言い残すとガイアは行つてしまつた。

「……」

待つしかないか。

俺は待つて いる間だけでも防護服を脱ぐ」とこした。

本当に辛いんだよ着てるのが。

蒸し暑いから汗をかいてそれが傷にしみてかなわないだよ。

本当にこんな服よく着るな。

天竜人のここだけは素直に尊敬する。

「ふう……」

防護服を脱ぎ終わつた俺は一息つく。

その時、誰かの気配を感じた。

それも多数。

嫌な予感がする。

そしてその気配の主たちが現れる。

「グヘヘヘヘ……」

人相の悪い男たちだ。

全員それぞれ武器を持っている。

「まさかこんなところで天竜人のガキに出会えるとはよお……」

いつたい何が目的なんだ、

「……」

「こつらは？」

「ついてるなあ、おい。何で傷だらけのかは知らねえが、しかるべきところに売ればたんまり金が貰えるぜ」

「……」

人さらに屋か！

「へつへつへ…。悪く思つなよ、坊主。これも商売だからな」

ふざけるなよ。

誰が易々と捕まるか。

とはいのものまづいな…。

いかんせん数が多い。

それにはこつちは手負いの状態。

圧倒的に不利だ。

「行くぜ！俺達？ ブラックオーガ？ の獲物だ！ 絶対逃がすなよ！」

チームのリーダーっぽい奴がそう言って手下に俺の周りを囲ませる。

くわッ！

どうする…

いやはやマジでついてるぜ。

天竜人のガキが独りでこんな人気のないところを彷徨うて居るのはな。天竜人に対してはほとんどの奴はよくは思ってないから奴隸として売れば、確実に売れる。

政府や海軍、天竜人にはバレないようにならないとな。

「さあ、野郎共。ガキを捕らえろ！」

手下の一人が俺の言葉に反応してガキに向かって行つた。

が、鈍い音がしてそいつは吹き飛んでいった。

「は？」

何が起こったんだ？

うわー、ビックリした。

自分の強さではない。

相手の弱さにだ。

だって余りにも動きがトロイ。

ト口す。まる。

それに軽く殴り飛ばしただけでヒューンと飛んでいった。  
これがガイアだったら逆に俺が飛ばされてるところだな。

「くつ、このがき！」

手下の一人が手にした武器で斬りかかってくる。

俺は腰を低くしてそれをかわし、その腹を殴り飛ばした。  
それだけで相手は空中を飛んでいく。  
負けるかと思つたけど杞憂だったようだ。  
六式を使うまでもない。

「こゝ、この野郎……！」

「ふざけやがって……！」

「舐めんじやねえよ……！」

手下が一斉に襲いかかってくる。

「はあ……」

早く帰つてこないかなあ、ガイア。

「…何やつてるんだ、お前？」

「おひ、ようやく帰つてきたか、ガイア」

ガイアは呆れている。

それはそうだろう。

何せ当たり一面に人が倒れてるんだ。  
手下全員は倒すことはなかつたかな。  
やり過ぎた。

「な、何で天竜人がこんなに強いんだよ！？しかもこんなガキが！」

そして今唯一立つてているのが人さらいたちのリーダーだった。

「そりや、鍛えてるからな。それよりもお前らをどうしよかな？天竜人に手を出した大罪人として海軍につきだしてもいいんだけどな  
ー」

「ひいつ、お助けを！」

必死に平伏する。

うーん、少し可哀想だな。

……そうだ！

「…【冗談だよ。あんた名前は】

「はえ？」

「名前だよ。名前！」

「ギードーですか？」

「よし、ギードー。」されあげるからもう入らうござやめひ

俺はそう言つてお小遣いの内の100万ベリーをギードーに渡す。

「へ？」

「それで俺の情報屋になれ」

「はあ……」

ガイアがため息をつく。

「許して……くれるのか？」

「んー？」

「俺達はあなたをさらつて売ろうとしたんだぞ

「別にこいつは結果的に何も被害なかつたしね」

「……お前本当に天竜人か？」

「よく言われるよ。それよつやむのか？」

「それは……」

「ガイア、海軍の駐屯所つてどこだっけ？」

「やりますーーやらせていただきますーー！」

「うん」

やつたぜ！

思わぬところで情報源をゲットだー！人さらい屋もやめさせられてー  
石一鳥ー！

「報酬は定期的に渡すからな。絶対に人さらいなんかするなよ。し  
たら海軍につきだすからな」

釘を刺しながら俺は防護服を着る。

「さあ、行こうぜ。ガイア」

「まつたくお前は…」

俺はガイアからマスクをもらつてつける。

「まあ、いいじゃないか。それよりも…」

「何だ？」

「俺つてマジで強かつたんだな」

「…はあー……」

ガイアは再びため息をついた。

「ただいまー」

「ただいま戻りました」

家に戻ってきた俺達。

「お帰りテラマキア」

「父様は?」

「どこの人との取引の算段を立ててるらしいわってあらあら。 今日も傷だらけね。 リビングに行っていて。 薬箱出してくるから

「すみませんお母さん。 お風呂にただいいでいいですか?」

「ええ、 いいですわよ。 ガイアさん」

「あつがとうござります」

ガイアは風呂場に向かつ。

くそつ、 ガイアめ。

ぬけぬけと風呂に向かいやがって。

鬱憤晴らして元俺を殴つてるとバラしてやるつか。

「ああ、トトロマキア。リビングに行きなさい。果物を用意してるから

「分かりました。母様」

俺はリビングに向かつた。

リビングには母様の言つた通り、机に切られた果物が置いてあつた。

「母様に感謝だな」

俺は果物を手にとる。

「いただきまーす」

がぶつ。

モグモグ：

۱۶۷

何なんだよこれ！？

何の果物だよ！－！

「つぶつぶ」

ダメだ吐いちゃ！

いくら何でも吐くのはまずい。

母様に怒られる。

「うう…く…」

「くくさり

何とか飲み込む。

「はあー…」

地獄を見たぜ…

「どう、テラマキア。おいしかった？」

薬箱を持ってリビングに入ってきた母様が聞いてくる。

「は、はい…」

滅茶苦茶不味かつたけどね。

「よかつた。変な模様がついた果物だったから味がわからなかつたのよ」

変な模様？

……嫌な予感がする。

「おーい、サマルドリア。取引用にここに置いていた悪魔の実を知らぬかの？」

「あら、悪魔の実は知らないけどそこにはあつた果物なら切ってテラマキアが食べたわ」

「なん……じゃと……」

父様の顔が驚愕の色に染まる。

「つあ……」

つまり俺が食つたのは悪魔の実だといつことですか。

……マジ？

## 第五説：初めての戦闘（とこづ独壇場）（後書き）

ついに悪魔の実を食べちゃった。  
能力は次回明らかになります。

## 第六説・悪魔の実（前書き）

いよいよテラ・マキアが食べた悪魔の実が分かります。

## 第六説：悪魔の実

さて、いつたん落ち着いて今の状況を整理しよう。

俺は悪魔の実を食べてしまった。

これはまぎれもない事実だ。

このことから一つのこと方が分かる。

一つめ、俺はかなづちになってしまった。

それは別にいい。

俺は泳ぎが好きなわけではないからな。

重要なのは次、二つめだ。

俺は何かの能力者になってしまったということ。

何の能力かは分からない以上、無闇に能力を発動させるのは危険だ。

ということでいつもの鍛錬をするときの小島に来ている。

ここなら多少荒っぽいことが起こっても大丈夫だ。

とこうかここでいつも荒っぽいことしてるしね。

今回は俺とガイア以外に母様と父様も来ている。

それはなぜか？

事の発端は昨日、俺が悪魔の実を食べた直後のことである。

「吐け！…吐くのじゃ テラマキア…！」

「む、無理ですよ。父様！胸ぐら掴んで揺りたいでください…！」

そう言つと父様はやつと放してくれたが、膝をついて落ち込みはじめた。

「ああ、なんて！」とじや…。よつともよつて悪魔の実じやなんて。」なんじどがバレたら今度は…」

「まあまあ、ゾディアック。落ち着いて」

母様が父様を慰めようとする。

「これが落ち着いていられるか！元はといえばお前のせいぢやぞ！お前がテラマキアに悪魔の実を…！」

「二つめのカジハジマの仕事は、おつまめで……」

# 母様の一喝。

父様も驚いてのナゾつている。

「食べてしまつたものは仕方ないのでから、今の現状に対することを考えなさい」

「う、う。そうじやのう。すまんかった、サマルドリア」

「分かればいいのです」

とりあえず納得する父様。  
ていうか母様もつともいらっしゃりしこ」と言つてゐるナビ完全に自分の責任を  
誤魔化してゐるよね?

それでよく納得する父様はある意味す”い。  
本当に尻に敷かれてるな。

「お風呂、お先にいただきましたーってどうしたんですか？」

ガイアが風呂から上がってきた。  
空氣読めよ。

「あら、ガイアさん。ちょっと聞いてくださいね。」

「はあ…」

母様がガイアに事情を説明する。

そして全てを聞き終わつたガイアは深いため息をついた。

「テラ。お前つて奴は…」

「あはは…。成りゆきで食べちゃつた」

そんな俺の能天気な」とを言つ俺を見て、ガイアはもう一度ため息をついた。

「なんだか最近、ため息をつきっぱなし気がするな」

「なあ、ガイア。さつきから能力を使いたくて体がウズウズしてゐ  
んだけど能力使つていいいかな？」

その証拠にさつきから体が若干熱い気がする。

「ダメだ抑える。もしその能力が危険なものだつたらどうする？それに能力の扱いはかなり難しいんだ。下手に使うと周りに甚大な被害をもたらしかねないんだからな」

「うう…」

ちえつ、分かつたよ。

確かにここは家中だし、何より父様と母様がいる。もし能力を使って危害が及んだら目も当てられないからな。

「能力の把握は明日、いつもの鍛錬の小島でするからな」

「あの、ガイアさん」

母様が躊躇いがちにガイアに話しかける。  
どうしたんだ？

「明日の鍛錬、私が見に行つてもよろしいでしょうか？」

「なつー？」

「何を言つのですかー？母様！」

驚愕する俺とガイア。

「テラマキアが悪魔の実を食べたのは私にも責任がありますからね

勇ましい母様。

「ですが何が起るか分かりませんよ？命の保証もできませんし…」

「覚悟の上でや」

「しかし……」

「いりの言つたらサマルドリアは絶対に譲らないよ、ガイア君」

父様が前に歩みでてくる。

「昔かうじうじやからな」

「当たり前でしょ。それに私が行くからにはあなたも来るのでしょ」

「当然じゃ」

ガイアはしづらべ黙つていたが諦めたかのように体の力を抜き、

「…分かりました。連れて行きましょう」

「ありがとうございます。ガイアさん」

「ですが絶対に私の指示に従つてくださいね」

「いむ、礼を言ひ。ガイア君」

といつわけで父様や母様もいるのである。

「さあ、テラ。いつでもいいぞ！」

ガイアは父様と母様の前に何が起きても守れるよう立っている。

「ああ、行くぞ！」

俺は能力を発動させた。

その瞬間体の形が変わり始める。

骨格が変わり、筋肉が隆起していくのが分かる。

これはあれか！

もしかしてあの動物系幻獣種のドラゴンか！

天竜人なだけに！

すると突然、どんどん大きくなると思っていた体変化が止まった。

あれ？

ドラゴンってこんな大きさなの？

「これはまたす”いのを引き当てたな…！」

「まあ…！」

「体長10メートルぐらにはあるかのう!」

皆が感嘆の息を漏らす。

「動物系幻獣種か…」

!!

やつたぜ!

やつぱりドラゴンだつたんだ!!

「へへへ、見たかガイア!俺はドラゴンだぞ!」

「はあ?」

ガイアが間の抜けた声をだす。

「何言つてんだ、テラ?自分の体をよく見ろよ」

え?

俺は慌てて自分の体を調べる。

手のひらには柔らかい肉球。

口には鋭く抜きん出て尖った二つの牙。

頭には丸っこい耳。

尻にはふさふさの尻尾。

そして何より全身を覆つ雪の様に真つ白な毛並み。

「ねえ、ガイア。これってまさか…」

「ナニヤベサハシテアタカ」

ガイアが呆れたように言う。

「お前が食つたのは動物系幻獣種ネコネの実モテル？白虎？だ」

# 何で虎なんだよ！

普通は絶対にドブゴンだろ!!!

## 「ア音」ハなだけには

「ウガアアアア！」

苛ついて思わず叫んでしまつ。

その時、物凄い強風が巻き起こった。

「うわっ！何だ！？」

「それがー。」

「サマルドリア！」

「くそつ！？大地の揺りか？」（ガイア・エッグ）－！」

ガイアが能力を発動し、父様と母様を強風から守る。

「こら！…テラ！」これは恐らくお前の力だ！早く何とかしろ…」

「ええつ！何とかしろと言われても…」

風は依然として荒れ狂い続いている。

「だつたら能力を解除しろ！…そつするば止まるはずだ！」

「わ、分かつた！」

俺は急いで能力を解除し、獣型から人型に戻る。  
それと同時に荒れ狂っていた風もおさまった。

「ふう…」

ガイアは能力を解除して父様と母様を解放する。

「だから言つただろ。能力の制御は難しいから一歩間違えば甚大な被害をもたらしかねないって」

「ごめん…ガイア。それよりどうしてあの風が俺の力だつて分かつたんだ？」

「ん？それは勘だ」

「勘かよー。」

思わずツッコミをしてしまった。

「ふむ、こしても風を操れるのか…。これは強力だな」

ガイアはブツブツと独り言を言しながら考え込んでしまつ。

「トラマキア…」

「母様」

母様が近づいてきた。

「母様。俺には近づかない方がいいですよ。俺はいつまた力が暴発するか分からぬ化け物なん」

俺は最後まで言えなかつた。

何故なら、

「どう…して…」

抱きしめられていたからだ。

「どうしても」いつしてもないでしょ。あなたは化け物である前に私たちの息子なのよ

「やうじや。だから愛し続けるに決まつておらわ」

「それだけはこれからも変わりないわ

ああ…

なんて…

なんて暖かくて優しいんだろう…

俺はこの時心の底から思つた。

父様と母様の子どもでよかつた、と

## 第六説・悪魔の実（後書き）

あまのじやくな自分ですからあえて虎にしました。  
詳しい能力についてはまた次回。

第七説・近況報告（前書き）

今回はちよつと短い。

## 第七説：近況報告

悪魔の実食べちゃった事件（俺はそう呼んでいる）から早い話、2年歳月が流れた。

あー、何か色々あつたなー。

まあ順を追つて話していくことにしよう。

まずは皆？が気になつてゐる悪魔の実についてだがご存じ通り俺が食つたのは動物系幻獣種ネコネコの実モデル？白虎？である。

ここ一年間で何とか人獣型を常時保ちつつ、能力を使うことはできるようになつた。

最初は体力がもたず人獣型を保てなくて、能力を使つどころではなかつたのだから、大した成長だ。

ちなみに能力は最低でも人獣型ではないと使えなかつた。  
そしてその能力は五行の金、つまりあらゆるもの金属のように硬質化できることだった。

厳密に言つと自身と自身に触れている物を硬質化できるのだ。  
その強度は驚くべきものだつた。

「大地の守護」  
ガイア・ウォール

俺の目の前に土の壁がせりあがつてきた。

「よし、これを硬質化して私の攻撃をガードしてみろ」

「ええっ！ 何で？」

「お前の能力の硬質化の強度がどれくらいか確かめるためだ」

「うー…」

ガイアの攻撃を真正面からガードしきりとか無理だろー。  
俺死んだな…

「早くしろーじゃないと死ぬぞー！」

「分かつてるとーうひつ…」

あんたの攻撃だつたら硬質化してても死ぬよ…

「？五行の金？物体硬質化」

俺は目の前の土の壁に触れて全力で硬質化させる。

「じゃあ、いくぞ」

ガイアが能力を使う。

「？鍊金？ダイヤモンド」

「大地の武具・槍<sup>ガイア・ウェポンラングス</sup>ダイヤモンドver」

ガイアは構える。

「ふんつー！」

そしてダイヤモンド製の槍を投げてきた。

ああっ、さよなら父様母様。

先に旅立つ親不孝な息子をお許しください。

固いもの同士がぶつかる鋭い音がした。

：

……

死んでない？  
あれ？

「すごいな……」

ガイアの驚愕した声が聞こえた。

硬質化を解いて土の壁の裏にまわる。

そこには砕け散ったダイヤがあつた。

その強度はダイヤを碎く程だった。

さすがに武装色の霸気を纏わせられると無理だったが。

しかし、ぶっちゃけ俺はあんまりこの能力を使いこなせていない。  
自身の体で硬質化できるのは両腕だけだし物体硬質化だつて集中してようやく一個が限界。

能力の扱いが難しいとガイアが言っていたのがよく分かる。  
それと能力でもう一つ、あの時に見せたあの荒れ狂う風。

あれはあの時の一度つきりで一年間修行したが全然だせなかつた。  
俺的には五行の金よりそつちの風が使いたかつたなあ。  
そうだ。

六式は全部使えるよくなつたんだ。

おかげで変装してお忍びの一人での外出ができるよになつた。  
いやー、用歩つて便利だなー。

まあ、マリージョアをぐるまでは防護服を着なきゃならないんだけ  
ど。

変装するのは、そうでないと皆、膝ついたりして全然相手してくれ  
ないからだ。

まあ、それで父様に大目玉とかをよく食らうんだけどね。

母様に「昔の私にそつくりね」と言われた。

そうそつ。

ロズワードの子どもたち、チャルロスとシャルリアもこの二年で生  
まれた。

チャルロスは一昨年、シャルリアは去年にだ。  
前にチャルロスの誕生会に呼ばれた時に見たが原作通り鼻水垂れつ  
ぱなしだった。  
誰か拭いてやれよ。

そして最後に一番大事なこと。

ついに今年の始めにロジャーが処刑され大海賊時代が始まつたんだ。  
つまり今は原作開始の22年前ということだ。  
まあ大海賊時代が始まつたからといって何かが変わるわけでもなく  
天竜人たちは数日後にある年に一度に開催される大人間オーケーショ  
ンを前にそわそわしている。

暢気なもんだ。

かくいう俺もまた変装してお忍びでシャボンディ諸島に遊びに来て  
いるのだが。

アイスづめー。

「さつさと動け！新世界を田指すルー・キーたちはいつ来るか分から  
ないのだからな！」

俺の目の前を海兵たちが横切っていく。

最近はやけに海軍や海賊を見かけることが多い。

そりゃあシャボンディ諸島つて新世界の海に行くために海賊たち  
が一斉に集つんだっけ…

この時海兵の言っていた言葉が後に起つる大事件  
の始まりを予告していたなんて俺は知る由もなかつた。

第七説・近況報告（後書き）

次回は長編がいよいよ始まる。

## 第八説：初代超新星（ルーキー）（前書き）

祝！10万PV突破！

これからも読んでいただけるとありがたいです。  
後、活動報告の方でアンケートやってるんで覗いてやってください。  
お願いします。

## 第八説：初代超新星（ルーキー）

俺はいつもおの様に変装をし、お忍びでシャボンティ諸島にある町の一つを歩いていた。

「相変わらずヤルキマン・マングローブは圧巻だな」

そんな暢気なことを言いながら。

「さやあああつ！！」

突然、轟音と悲鳴が街中に響いた。

「な、何だ？」

どうやら酒場の方から聞こえてきたようだ。

何か事件でも起こったのか？

俺は野次馬根性丸出しで見に行くことにした。

酒場の前。

酒場は遠くから見ても分かるくらい半壊していた。

そしてその酒場の前に俺と同じく興味本意で集まつた野次馬たちがいた。

俺は野次馬たちをかき分け、その中心を見る。

「うう……」

俺はそれを見た時思わず呻いてしまつた。

「酷いな……」

「しかしいつたいどうしたらこんな風に……」

野次馬たちもそれを見て呻き声を上げる。

半壊した酒場の前にあつた物。

それは全身の水分を抜かれてからからにミイラ化した死体。そして体のあらゆる部分を切り裂かれた死体だつた。

あの死体……。

俺はあんな風に殺せる奴を知つてゐる。でも奴は本来この島に何かいるはずがない。いつたいどうなつてるんだ？

「お、おいーあれー！」

俺が考へに耽つてゐると野次馬の一人が死体を指差しながら叫んだ。  
いつたい何なんだ？

俺が死体の方を見ると、なんと死体から草花が咲き出していく、あ  
つという間に死体を覆つてしまつた！

「気持ち悪い物を残しやがつて…」

誰かがそう言いながら半壊した酒場から出てきた。

「ちやんと後片付けぐらいしていけよな」

それは青い髪の青年だった。

その言動から察するにこれは彼がやつたことなのだろうか。

「たくつ…。くせえ生ハマだぜ」

青年はそう言いながらどこかへ行ってしまった。

「フフフフ…。おもしれえ奴がいるな」

突然、若い男の声が聞こえてきた。

この笑い声…！

俺は後ろを振り返つて声の主を探すが見つけられない。

「いい時代になつたもんだ…！」

それきりその声は聞こえてこなかつた。

「しかし物騒な時代になつてしまつたな」

「これもあるの忌まわしい海賊王が焚き付けたせいだ……」「

その代わり野次馬の会話が聞こえてきた。

「海賊たちは新世界に行くためにここシャボンディ諸島に集まるからな。しかも集まるのは過酷な生存競争を乗り越えてきた選りすぐりの海賊、つまり超新星たちだから必然的に物騒になるさ」

「さつきの青い髪の奴だつて超新星の海賊だろ」

「そうさ。確かに懸賞金1億8000万ベリーの『神咲』のブルーつて奴だ」

「他に船員はいなくてたつた一人の海賊だつて話だ」

「たつた一人の海賊つて言つならもう一人いるぜ。俺今日そいつも見たんだ」

「マジか！？」

「ああ。何か身の丈ぐらゐある黒い剣を背負つてさ……」

「私知つてゐるよーたいつのこと。えーと、確か……」

そこで会話は聞こえなくなつた。

うん。  
…………

ソフトクリームでも食べて落ち着こう。

俺はその場を離れ、ソフトクリームを買いに行くことにした。

うーん、やっぱソフトクリームはうめーな。  
さてと。

落ち着いたことだし頭の中を整理しようつか。

恐らく今この島にはルーキーたちが多数いるのだろう。  
大海賊時代に入つて初めてのルーキー。

いわば初代超新星ルーキーだ。

そして原作時代で名を馳せていた海賊たち。  
彼らにもかつてルーキー時代というものは確かに存在したのだ。  
そしてそのルーキー時代と言うのが今なわけだ。

はあ…。

めんどくさいことになつたな。

俺が得た情報からは原作時代に名を馳せた海賊が少なくとも3人は  
いる。  
ここまで揃つているとなると恐らく残りの奴も一人を除いてはいる  
だろつ。

運命とはつづく不思議なもんだな…。

「じてつ」

「おわい

考え事をしながら歩いていたせいで人とぶつかってしまった。  
その際俺が持っていたソフトクリームがその人の服にべつたりとついてしまつ。

「ああーすみませんー。」めんな……れ……い……

「こやこや、気にすんな坊主ー。」

シャ…

「うひうひうひ悪かったな。ソフトクリーム台無にして

シャ…

「ん? ビウしたんだ? そんな口をパクパクさせて

シャンクスだああああああああああああああ

「ほれ、金やるからこれでまた買つていい

そう言つてシャンクスは俺に金を握らせる。

「あ……え……でも……服が……」

あまりのことで声がつまへ出なくなる。

「服のことない。また洗えば済む話だしなー。」

屈託のない笑顔で言つシャンクス。

「じゃあな、坊主。俺は用事があるから行くわ」

シャンクスは踵をかえす。

「さてと、みんなどこに行つたんだ…？」

そつ言つて行つてしまつた。

途端に俺は全身の力が抜けた。

どうやら知らず知らずの内に体に力が入つていたようだ。  
まさかこんなところにシャンクスがいるなんて…

でも普通にいい人だつたな。

服を汚しちゃつたのに逆にソフトクリームを買つお金くれるなん  
て。

この恩はいづれ何かの形で返さないとな。

母様に受けた恩は必ず返せつて教わつたしね。

さて。

もはやこの島に後に有力な海賊になる奴が多数いるのは確定だな。

うーん、いつたい誰がいるのか情報が欲しいな。

… そうだ！

こんな時こそ奴等の出番じゃないか！

2年前に俺の情報屋として雇つた奴等の！  
呼び出せばすぐに飛んできてくれるだろ？  
この2年ですいぶん仲がよくなつたからな。

よしーせつと決まれば善は急げだ。

おつと。

その前にシャンクスからもらつたお金でソフトクリーム買い直すか。

俺はその時気づけなかつた。

自分を見ている奴がいることに。

「フフフフ…まさか変装している天竜人のガキがいるとはな…。

本当におもしろい」

## 第八説：初代超新星（ルーキー）（後書き）

一部のルーキーの名前は伏せましたけど、皆さんには誰が誰だか分かりましたか？

## 第九説・超新星の情報（前書き）

まだまだアンケート実施してるので皆さん答えてくれるとうれしいです。

詳しくは活動報告を見てください！

## 第九説・超新星の情報

シャボンティ諸島の無法地帯のある場所。

「オーッス！久しぶりだな！テラの旦那」

「ああ、久しぶりギター。人らしいなんかやってないだろ？」「

俺は情報屋に会っていた。

「何言つてるんだ！あんたからたんまり金もりつてるんだからやる  
わけないでしょ？」「

「まう、金もりつてなかつたらやるんだな？」

「うう…。それは言葉のあやつてもんですよ、テラの旦那

俺の情報屋。

そう。

それは俺が2年前にボコボコにして親切に「無理矢理ですよ」「あ  
あん？」「…何でもありません」…そう、親切に雇つてやつたかつ  
ての人をらしくチーム「ブラックオーガ」だった奴等だ。

今までも何度もお世話になつていて

「連絡した通りの情報はもう仕入れているよな？

「あつたりまえですよ旦那！今やルーキーについては話題沸騰中だ  
からすぐに情報は手に入りますよ」

「よし、じゃあさつそく教えてくれ」

「あーこよーじゅあまざはーにつかーりー。」

そう言つてギードーは荷物から手配書を取り出した。

「懸賞金2億6000万ベリー！『鷹の眼』のミホーク！背中に背負う黒刀はある最上大業物12工の一振りである『夜』で凄腕の剣豪！たつた一人でここまできた海賊。ルーキーの中でもかなりの強者らしいぜ！」

やつぱりいたのか、ミホーク。あの野次馬どもの会話から薄々は分かつていたけど。

「さて、お次はこいつだ！」

「懸賞金3億4000万ベリー！ドンキホーテ・ドフランミニゴー！こいつは鷹の目とは逆で多くの手下を持つてやがる。その能力も未知数で危険度も半端ねえ」

そうだ。

確かに原作でもドフランミニゴーには謎が多い。

第一、あの人を操る力が悪魔の実の能力かすら分かつていないので。関わるのは絶対にやめておこう。もし天竜人だつてことがバレたら何をされるか分からぬ。

「さてさて、次はこいつ！」

「懸賞金2億9600万ベリー！『暴君』バーソロミュー・くまだ

！奴はその一つ名の通りまさに暴君！——キューキュの実の能力者で残虐非道の限りをつくす海賊さ」

！！

そうか。

くまはかつては残虐非道の限りをつくした海賊だつて原作でも言われてたつけ。

原作でも恐るべき強さでルフィたちを圧倒していたんだ。  
その上残虐だなんて手がつけられない。  
こっちも関わらないようにしてよう。

「それで次はつと…」

「懸賞金8100万ベリーのサー・クロコダイルだ。こいつはルーキーの中で一番懸賞金が低いが珍しい自然系の悪魔の実、スナスナの実の能力者だ！戦闘力も他のルーキーに引けをとらねえ」

クロコダイルか。

懸賞金低いな。

まああいつは能力に頼り過ぎてるところがあるからな。

スナスナの実自体、弱点が水つていうありきたりな弱点だしね。

王下七武海なのにルフィが勝てたのも頷ける。

「お次は…」

「懸賞金3億2000万ベリーのゲッコー・モリアだな。こいつも悪魔の実の能力者でカゲカゲの実を食べた影人間だそうだ。部下も懸賞金はかけられていないが有能な奴が多いらしい」

ふーん、ルーキー時代のモリアか…

確か新世界で四皇のカイドウに負けるまで己の力を過信してたんだつけ？

興味あるな。

というかこの時代に海賊やつてる未来の王下七武海勢揃いだな。恐ろしいな：

「次のこいつは大物だな」

「懸賞金4億7000万ベリー！！赤髪のシャンクスだ！かつて海賊王の船員でそのせいか懸賞金がルーキーの中ですば抜けて高い！その強さも折り紙つきだ！」

スゲー…

圧倒的だな、シャンクス。  
まあ、後に四皇になるんだしこれぐらい懸賞金かけられるのは当たり前か。

そつ言えば霸氣はもう使えるのかな。

「次が最後だな」

「懸賞金1億8000万ベリー、『神咲』のブルーだ。こいつも鷹の目と同じくたつた一人でここまできた海賊だな。こいつについては余り情報が得られなかつた。何せ他のルーキーとは違つてごく最近に現れた海賊だからな。悪魔の実の能力者つてことだけは分かつてゐるが…。それでも懸賞金が高いのは民間に多大な被害を与えてゐるからや。ルーキーの中では一番世間に不評な海賊だな」

酒場で見たあの髪の青い青年か。

こいつは原作では名を聞かないな。

新世界でやられてしまったのか?  
俺的には一番興味があるな。

「以上総勢7名のルーキーがこのシャボンティイ諸島に集まっている  
よつだ。」

「わつか。ありがとな、ギード。助かったよ」

俺はギードに報酬の金を渡した。

「こやこや、りひりん大金をもらえて感謝だぜ。わづだ、  
テツの田那。もつひとつがつたぜ」

ギードが思ひ出したよつてそんなりとを囁く。

「何なんだ?」

「ああ。海軍の」と

海軍?

「海軍がどうしたんだ?」

「それが今日の昼頃に海軍の中将がこのシャボンティイ諸島に来るら  
しい。ちよつど今頃到着したんじゃないか?」

……マジですか?

同時刻。

シャボンディ諸島のある港。

その港には海軍の軍艦が停泊している。

その軍艦の甲板に一人の男が立っている。

その男は正義の刺繡が入った背広を羽織っていて、頭には海軍の帽子を被っていた。

海兵の一人がその男に近づく。

「サカズキ中将！全兵士の武装、完了しました！」

その男 サカズキはその報告を聞き、海兵を怒鳴った。

「遅い！…もつと早くせんか…！」

「す、すみません…！」

一喝され怯える海兵を一瞥しサカズキはシャボンディ諸島を見る。

「まずは最優先で赤髪を狙わなければのう…。奴は海賊王の元船員。新世界へと進出を許せば必ず次世代の海賊としての風格を表す。そういうならんためにも今、始末せんとな…！」

シャボンティ諸島のとある無法地帯。

「仲間を探していたつもりがとんでもないやつにあつちまつたな」

「赤髪か…」

そこで二人の男が対峙していた。

「噂はかねがね聞いてるぞ『鷹の目』」

「…………」

ミホークとシャンクスである。

ミホークは無言で背中に背負つた「夜」を手に取る。

「手合わせを願おう。強き者よ」

そして構える。

「決闘つてか…」

シャンクスも腰にさしてある剣を抜く。

「仲間を探してゐる途中だけ見逃してもりえやつもないな

お互ひに構え合ひ。

緊迫した空気が流れた。

シャボンディ諸島のとある街中。

轟音と悲鳴が飛び交う。

「キーッシッシッシッシーせつかちな奴等だな、オイ！」

ゴシック調の服を着た大男 モリアは大声を上げて笑う。

モリアが見てゐる先。

その先の建物から砂嵐と

肉球型に穴の空いた瓦礫に混じつて二人の男が飛び出してきた。

「ちいっ！何だあのふざけた手のひらは！」

一人はクロコダイル。

「懸賞金8100万ベリーのクロコダイル…。こんなものか

もう一人はバーソロミュー・くまだつた。

「キッシッシーくま。お前いきなり仕掛けてきてうちのクルーたちを全員倒すとはどういうつもりだ?」

「……ライバルは今の内に減らしておくべきだと思ってな」

「ムカつく野郎だな…。てめえミイラになりたいか?」

一触即発の雰囲気。

それを見物する人物が一人。

「フフフ…。早くもここで誰かが脱落するのか…?」

「こゝ、シャボンディ諸島において始まる戦いの兆し。

これが大事件の始まりであることをまだ誰も知らない。

第九説・超新星の情報（後書き）

中将も来て、いよいよ戦いが始まります。

第十説・巻き込まれる（前書き）

戦いの臨場感でてるかな……？

## 第十説・巻き込まれる

無法地帯に飛び交う斬撃。

「おらあー」

「…………」

ミホークとシャンクスは打ち合い続ける。

その剣筋は凡百の人間には全く見えない程のスピードだ。

剣がぶつかり合う度に鳴る金属音と斬撃の余波。

その余波はすさまじいもので地を裂き、天を鳴動させる。

「おわつとー?」

シャンクスが体勢を崩し、打ち合いの均衡をが崩れる。

「好機……」

ミホークは黒刀「夜」を構え直す。

「フツ……」

そして渾身の力で振り抜た。

「やべつ……」

シャンクスはそれを紙一重でかわす。

シャンクスがかわしたミホークの渾身の斬撃は後ろにあつたヤルキマン・マングローブを真つ二つにした。

真つ二つになつたヤルキマン・マングローブはメキメキと音を立て崩れ落ちる。

「こんこやうひーーー！」

体勢を立て直したシャンクスは渾身の一撃を放つたことで大きなスキを作つたミホークを狙う。

「お返しだ！」

剣に霸氣を纏わせ、振り下ろす。

「くっ…！」

ミホークは何とか飛び退いて回避する。

霸氣を纏つた一撃はミホークのいた場所の地面を深く抉つた。

「やるな…！」

「貴様…！」

彼らはお互に全力で打ち合い始める。

それは周りにあるヤルキマン・マングローブを次々と真つ二つにして地面を抉つていった。

俺は避けられないことを悟ると急いで人獣型になり、能力を発動さ

情報屋のギドーと別れた俺は一人、無法地帯を歩いていた。

うーん、やばいな。

まさか中将が出てくるとは思いもしなかった。

この時代の中将っていうと後に大将になるサカズキやボルサリーノ、クザンも含むんだよなあ…。

もしこの島に来ているのが彼らだった場合はシャボンディ諸島は原作並みに被害甚大になるだろう。もし遊園地が被害にあって半壊でもしたらどうしよう…。しばらく遊園地で遊べなくなるのは嫌だな。

そんな風に悶々と考えていると田の前に何かが迫ってきた。

「ん? 何だあれ?」

ていうかあれ…

斬撃だ――――!

「くそつー!」

せる。

「？五行の金？右腕硬質化！！」

能力により硬質化した右腕を六式の指銃で全力で向かってくる斬撃に向けて突きだす。

「指銃？白弾？！！」

すさまじい轟音と共に俺の技と斬撃がぶつかる。

そして斬撃は俺の技によってかき消された。

「ふつ……危なかつた」

俺は人型に戻る。

「いつたい誰だ？今の斬撃を放った奴は？」

並みの奴じゃ今の斬撃は放てない。

俺は斬撃を放った奴を探そうとして辺りを見渡そうとするが、スパンツと何かを切る音が聞こえたかと思うと、続けてメキメキという音が後ろからした。

「まさかね……」

俺は嫌な予感を振り払いながら後ろを振り返った。

ひょうごうヤルキマン・マングローブが真っ一つに斬られて俺の上に

落ちて」よつとじこむといひだつた。

「「わああああ…」」

俺は剃を使い全速力でその場を離れる。

それと同時にヤルキマン・マングローブは落ちてきた。

ギリギリ間一髪で間に合つた。

もう少しで死ぬといひだつたじやないか！

俺は立ち上がる。

しかし田の前に起きた地面を抉るような衝撃で吹き飛ばされた。

「「ひやあああ…」」

もつ嫌だあああ…！

家に帰りたい…！

吹き飛ばされてボテツと地面に転がる俺。

「すばしつゝ奴だな、おー…。」

砂ぼこりの舞の中、聞き覚えのある声を聞く。

「の壇は

「向やつてんだよシャンクス…」んなとひるで…。」

シャンクスは驚いた顔でこちらを振り返る。

「お前あの時のソフトクリーム坊主！何でこんなところに……」

シャンクスは驚いていたが頭を振つてその感情を振り払う。

「いや、そんなことよりも一刻早くここから離れる…じゃねえと…つてうわっ！」

シャンクスが突然、体をひねる。

その時その赤髪が数本、切断されたかのように落ちた。

「よそ見をしている場合か？」

神速の太刀筋による突風で砂ぼこりの払われた先に身の丈程もある黒刀を携えた男が立っていた。

ミ、ミホーク！？

何で！？

「ほら、さつさと逃げる坊主。今は決闘中だからお前を助けられない。ここにいたら死ぬぞ」

決闘！？

つまり今まで戦つていたことかよ！

じゃあ最初の斬撃やヤルキマン・マングローブが落ちてきたりとかさつきの

俺が吹き飛ばされた衝撃は全部このシャンクスとミホークの戦いのせいか！

チクショーーー！

お前らもいつか泣かすリストに入れてやるー。  
でも今は

「言われなくても逃げるに決まつてるーーー！」

俺はダッシュで逃げ出す。  
彼らの戦いに巻き込まれたら今の俺じゃ命がいくつあつても足りない。

まだ死にたくないんだよ俺はー！

しかし俺が逃げ出した先の地面から突然マグマが噴き出しへきたーーー！

「うひゃあああああーーー！」

今日あまつにも悲鳴を上げすぎたから変な悲鳴になってしまった。

次から次へとーーー！

今度は何なんだーーー？

「見つけたぞーー。赤髪ーー！」

噴き出したマグマが人の形をとつていぐ。

まさか…

「じつやまたえらいのができただな…」

「覚悟せえよ…ーーー！」

サカズキだああーー！

シャボンディ諸島に来た中将つてこいつだったのか！

最悪だ。

こいつは海賊を成敗するためなら周りの被害は気にしないタイプだ。よりもよつてこいつとはなー。

「逃がしはせんぞ」

俺たちはいつの間にか海兵たちに囲まれていた。

「行くぞ…。冥ご」　　おおー？」

技を繰り出そうとしたサカズキが真つ一つになる。

「決闘の邪魔をするな」

どうやらミホークが斬つたらしい。

しかしサカズキは微塵も効いた様子もなく、すぐさまマグマは元の形へと戻つていく。

「ああ、『鷹の爪』もいたのか…」

サカズキは確認するように俺たちを見て言つ。

「ふむ、三人か。とるに足らんな」

ん？三人！？

もしかして俺も数に入つてんのか！？

変装してるから一応一般人の子供に見えてるはずだよな！

「ちよつと待つてくれ！俺は一般人だぞ！」

「嘘をつけ！…」こんな無法地帯の奥に一般人の、それもただの子供がいるわけがなかろう！

……マジですか？

「《鷹の田》。ここは一田勝負を預けないか？じゃないとやっぱそうだしな」

「…いいだろ？ 決着をつけるのはまた今度だ」

シャンクスたちひづり一時休戦してここから逃げ出すために手を組むようだ。

「悪いな、坊主。巻き込んでしまって。お前は俺が責任持つて守るからよ」

「俺は坊主じやない。テラマキアって名前があるんだ。それに一応自分の身ぐらいで自分で守れる」

そう言つて俺は人獣型になる。

「むつ　ー

「……ー

「くえーー」

ざわ ざわ ！

場がざわつく。

「驚いた…！悪魔の実の能力者だつたのか。見くびつて悪かつたよ、テラマキア」

「分かつたならいいんだ」

「正直そんなに戦えるか分からんだけどね。」

「だが無理はするなよ。あいつにスキができたら全力で逃げる」

当たり前だ。

「言われなくとも」

「ふんっ…」

ボコボコと頭を立ててサカズキのマグマが膨れ上がっていく。

「悪魔の実か…。それがどうした！全員骨も残らず溶かしてやるわー！」

「…来るぞ」

くわっ！

“どうしてこんなことになつたのか分からないが闘うしかないか…！”

俺たちは身構えた。

第十説・巻き込まれる（後書き）

原作のキャラの口調つてこれであつてますよね。

## 第十一説・バトルロイヤル（前書き）

戦闘シーンってやつはむずい…。

## 第十一説・バトルロイヤル

テラがサカズキと対峙する少し前。

「くそつ！ テラのやつ、どこ行つたんだ？」

私、ガイアはお忍びで勝手に出かけたテラを探して街中にいた。

「テラのおとうさんに連れてこいと言われたんだけどな……」

数日後に行われるはずの大入間オークションが多く天竜人の希望、  
というか命令で今日になつたからおとうさんはテラも連れていこう  
としたが、案の定テラはいつも通り勝手に外に出かけていた。  
おとうさんカンカンに怒つてたぞ。

「連れて帰つたらお仕置きだな」

その時、悲鳴が聞こえたと共に何かが私の体をものすごい衝撃で走  
り抜けた！！

「うおつ　　！？」

見ると体に肉球型の穴が空いていた。

ロギアの能力者じゃなければ危なかつた……！

「砂漠の宝刀！」  
デザート・スパード

私の横にあつた建物を砂の刃が斬り倒した。  
一步間違えば私に当たつたかもしれない。

「欠片蝙蝠！」  
ブリック・バット

「圧力砲…」  
パッド

どうやら海賊たちが戦っているようだ。  
その余波で次々と周りの  
人や建物が傷つき、壊れしていく。

「ああっ！私の家がああ…！」

その家の住人らしき女性が斬り倒された家を見て、嘆きの声を上げ  
ていた。

「お願いだから田を開けてくれ…！」

その向かい側では男性が恋人らしき女性を抱えてうずくまっている。  
その女性は大量の血を流していた。

たくさんの人々の悲鳴が飛び交う。

プツンッ

私の中で何かがキレた。

「母なる大地」  
アース ガイア

地面から土が大きく盛り上がり、直径4メートルくらいの巨大な塊

となる。

「慈悲の拳！」  
「慈悲の拳！？」

その塊は拳の形を模して、暴れている海賊たちがいる方へと突っ込んでいく！

「くつ！？砂嵐！」  
「くつ！？砂嵐！」

その巨大な土の拳は海賊の一人がだした巨大な砂嵐と激突した。

「なにっ！」

その土の拳は砂嵐を突き破り、その先にいる砂嵐をだした海賊に直撃し、粉微塵になつた。

「ちいっ！」

しかしその粉が集まつて元の海賊の形をとつていぐ。

ロギアの能力者か！

「お前は確か…」

「キーツシッシッシ！墮ちた海軍中将、ガイアか！」

なるほど、今世間を騒がせているルーキーたちか…。

クロコダイルにゲッコー・モリア、それに《暴君》バーソロミュー・くまの三人だな…！

「お前たち……。暴れるなら街の外で暴れる!」

「何故お前にそんなことを言わねえんだ?」

「民間人に被害が及ぶだろうが……!」

私は激昂して叫ぶ。

しかし彼らの反応は冷めていた。

「知るか」

「……カスが死のうと俺には関係ない」

「キッシッシッシッシー巻き込まれる奴が悪いんだ!」

「……ッ!!」

私は拳を握りしめる。

「……ヒヤリ子共が」

いいだろ?。

鉄槌を下してやる。

「新世界の海のレベルってやつを見せてやろう……!」

ガイアとルーキーたちが戦おつしていぬといひ。

「フフフフ…。まさかあの墮ちた海軍中将がこの諸島にいたとはな  
…」

それを見ている男

デンキホーテ・デフリミンゴがいた。

彼はおもしろそうにこれから始まる戦いを観戦しようとしていた。

「鍊金？ダイヤモンド？」

ガイアは能力を発動させる。

「大地の武具祭！」  
ガイア・ウェポンカーニバル

地面から色々な形をした無数のダイヤモンド製の武器が飛び出し、  
クロコダイルたちを狙う。

もちろんガイアはそれらに武装色の霸氣を纏わせている。

そんなことは露ほども知らない彼ら。

モリアとくまは余裕でそれらを避けるがクロコダイルだけはロギアの能力者である驕りからか避けなかつた。

そしてガイアの放つた霸氣を纏つた武具たちは何の抵抗もなく当たり前にクロコダイルの体に突き刺さつた。

「がはっ…！ なんだと…！…？？」

クロコダイルはあまりの「」とで痛みを忘れて驚愕している。

それはそうである。

弱点である水をかけられて攻撃が当たつたことはあるにしても、通常の状態で攻撃を受けたことはなかったのだから。

ロギアに物理攻撃は通用しないというクロコダイルの常識はもうくも崩れさつた。

「「」や驚いた…！」

「………！」

モリアやくまも驚愕の表情を見せる。

「これがお前たちルーキーと私の差だ」

ガイアは無慈悲にも追撃をしようとクロコダイルに近づく。

「行け、影法師！」  
「エッペルマン」

しかしモリアが横からガイアに能力のひとつである「口の影を操つて、ガイアに体当たりをかまそ�とする。

ガイアは読んでいたかのようにするつとかわした。

「キツシツシツシーつまりお前を倒せば俺の名はさらに上がるつてわけだ！」

モリアはなおもしつこくガイアを追撃する。

だがガイアはそれらの攻撃を全てかすることなくかわしていく。

「ちこつーすばしっこーやつめー！」

そのモリアが突然横に吹き飛ぶ！

そして建物に激突し、壁を突き破つて中へと突っ込んだ。

「横ががら空きだ…」

モリアはくまの「圧力砲」によつて吹き飛んだのである。

「てめえ…くま…いきなり何を…」

「俺達は別にあの男を倒すために協力しているわけではない

それは至極もつともなことである。

彼らはガイアが来るまでの間も戦っていたのだから。

「バトルロイヤルってか……？」

「的を射ている」

その瞬間、パツとくまの姿が消える。

いつの間にかガイアの後ろに移動し、しこを踏み始めていた。

ガイアがそれに気づいたのはくまがしこを踏み終えた後だった。

「つっぱり圧力砲！！」

くまは怒涛の勢いで空気をはたく。

はたかれた空気は衝撃波となつてガイアを襲う。

「当たるかそんなの」

ガイアはそれらを紙一重で避け、くまに急速に接近する。

「……」

くまは急いで両手を前に持つていき、カウンターの用意をしようとする。

「遅い」

が、それよりも先にガイアが近づき武装色の霸氣を纏わせた手でく

まを殴り飛ばす。

くまはそのまま酒場らしき建物に突っ込んだ。

「お返しだ…！」

突き刺さつた武具をようやく抜いたクロコダイルが殴り飛ばした隙を狙つてガイアの背後に迫る！

「三日月形砂丘！」  
バルバン

「角刀影！！」

しかし三日月形の刃で切ろうとしたクロコダイルをモリアが邪魔をした。

「くそつ！ 邪魔しやがつて！」

「そいつは俺の獲物だ！やらせるか！」

... 7

いつの間にか、くまもいて

クロコダイルに向けて「圧力砲」の構えをしていた。

突然、誰かの声が響き渡ると同時に巨大な長いものがさつきくまの突つ込んだ酒場から垂直に突きだしてきた。

「なんだありや…？」

「尻尾？」

その巨大な長い尻尾らしきものは垂直から横に倒れてそしてガイアたちがいる方を日掛けで建物をなぎ倒しながら迫ってきた！

「おつとー！」

「ちつー！」

「影法師！」  
「ペルシヤード」

「……ー！」

全員何とか避けるが尻尾らしきものはその後もそのまま酒場を中心として円を描きながらその範囲内ある建物をなぎ倒していくた。

そして一周してようやく元の位置に戻ったとき、シユルシユルそれは中心である酒場に戻つていた。

「たくつ。おちおち酒も飲めやしない

その巨大な尻尾らしきものに破壊された酒場、いやその跡地には青い髪の青年が立っていた。

「《神咲》のブルーか！」

ブルーと呼ばれた青年はだるそうにして立つ。

「へへっ……つぜえな。一回酔いだ。」

「次から次へと……」

クロコダイルが痺れをきらしたよつて言ひへ。

「てめえら全員//イラになるか?」

そつまつて手を地面につける。

「グラウンド・デス  
浸食輪廻ーーーーー！」

そしてなんと手をつけたところから地面が渴いて瓦礫や植物などをも呑み込んで砂漠化していく！

「やせらるかー！」

それに気づいたガイアも地面に手をつける。

「大地の恵み（ガイア・メルシー）……」

ガイアの手をつけた部分からは地面が水氣を帶びていく！

「はーー！そんなしょぼい水氣が俺の渴きに勝てるヒドモ？」

しかしガイアの地面が水氣を帶びていくスピードはクロコダイルの地面を覆つていぐ渴きの倍速だった。

「な、何故だー？」

「当たり前だ。お前は砂、私は土。私の能力はお前の能力に対して上位にあるからだ。土が砂に負けるわけないだろ?」

渴きは全て無くなりクロコダイルの漫食輪廻は完全に無効化された。

「何をしてあるのじゃ、ガイア」

「え?」

突然、聞き慣れた声が聞こえたことにガイアは驚く。

他のルーキーたちもその姿を見て慌てて膝をつく。

「何があつたか知らんがひどく荒れてあるの?...」この街は

それは天竜人、ゾディアックだった

「フフフフ…! 天竜人まで絡んできたか

ドフラミンゴはまだ彼らの戦いを遠くで観戦していた。

今は天竜人が来たことで中断されているが。

「ここでもあの青髪の野郎ムカつくな…」

ブルーの街をなぎ倒した回転尻尾。  
デフリミンゴも危つくなれに巻きこまれそつだつたのである。

「…」

デフリミンゴの顔が一いつ瞬む。

「おもしれえ」と思ついた…。」

デフリミンゴは手をまくべつと前に持つてくる。

「ハハハハ…。」

そして能力を発動した。

「エヘヘヘ！ などいなー…。」

私は突然現れたテラのおとうさんと対峙していた。

「いやのう、あまりにも遅いから様子を見にきたのじゃ。それでガニアは何をしておる? テラマキアの奴はまだ見つからんのか?」

「あーー!」

わ、忘れていた…

「ん、どうしたんじや?」

「あ、いやその…」

「あいつ、馬鹿か!-?」

後ろからモリニアの驚愕の声が聞こえた。

振り向くと《神咲》が立つてこちらに向かってきた。

ん?

向かつてきた?

天竜人がいるのに!-?

「何であやつは立つておるのじやー!-?」

「か…体が…勝手に…!」

何を言つてゐんだ?

「う…、うおおあああーー!」

《神咲》は飛びかかつてきた。

私は迎撃のためな構える。

「え？」

しかし彼は私を攻撃するビームが通りすぎ、

そして

天竜人であるテラのおとつせん  
！――！？？？

「！」ふえつ　――

ぶつ飛ぶゾディアック。

「なつ――」

ありえない――

何を考えているんだ！？

「いかれてる――」

「キシシ――マジか――」

「――――」

ゾディアックを殴り飛ばした

ルーキーたちも驚愕している。

「ゾディアック聖！！」

衛兵たちが駆け寄る。

「おぬし、いきなり何を…」

ゾディアックは顔面から血を流している。  
どうやら気は失わなかつたみたいだ。

「お、俺は…！」

神咲は自分がやつた行為なのに信じられないという風に驚いている。

「大将を…」

「大将を呼ぶのじゃ…！…！」

ゾディアックの声が響き渡つた

「フフフフフ…！…楽しくなるぜえ…！」

それを引き起こした張本人は大口を開けて笑っていた…

## 第十一説・バトルロイヤル（後書き）

混迷を極めていくシャボンティ諸島。  
どうなることやら…。

第十一説・海軍VS海賊+天竜人（前書き）

最近戦闘シーンばかりかいてる気がする…

## 第十一説・海軍VS海賊+天竜人

シャボンティ諸島のとある無法地帯。

俺、人獣型になつてゐるテラマキアとシャンクス、ミホークは中将サカズキ率いる海兵たちと対峙していた。

「大噴火！！！」

サカズキの膨れ上がつた巨大なマグマが拳に形を変えて俺達に迫つてきた！

「うわー！」

「あぶねえ！」

「……！」

俺達は避けてそれぞれの方向に散つた。

俺達が避けたその巨大なマグマの拳はそのまま飛んでいき、ヤルキマン・マングローブに当たつて焼き折つた。

また折れたな！

今日だけで何本、ヤルキマン・マングローブが折られたんだ？

「大砲、てえつ！！」

海兵たちが見計らつて大砲を放つて來た。

サカズキがロギアだからお構い無しかよ！」

「？五行の金？」

俺は迫つてくる砲弾に対して手を突きだし、

「物体硬質化！！」

そして砲弾が手に触れた瞬間、能力を発動させた。

砲弾は爆発せずそのまま俺の手に収まった。

「な、何で爆発しないんだ！？」

海兵たちは驚いている。

やつぱり思った通りだ。

物体の硬質化。

それは硬くなるというだけでなく形を保つということ。

本来なら爆発する砲弾もそのままの形を保ち続ける訳だ。

「ほり、返すぞ…」

俺は持っていた砲弾を海兵たちに向けて投げ返した。

「うわあ…」

砲弾は海兵たちに当たって爆発した。

よし、命中！

シャンクスやミホークも難なく砲弾を斬り伏せていた。

「何を油断しとる！相手は能力者だ。甘くみるな！」

そう言いながらサカズキが俺に近づき殴りかかってきた。

まずい、油断した！

避けられない…！

「やらせるかよ…」

俺に殴りかかったサカズキを止めたのはシャンクスだった。  
「赤髪い…！」

「悪いな、こいつは殺らせるわけにはいかねえ」

サカズキは歯ぎしりをする。

そのサカズキが袈裟懸けに斬られる。

「むつ　…！」

ミホークか！

しかしあつぱり効いた様子はなく元の形に戻っていく。

「無駄なことを…」

しかしその間に俺達は距離をとり、体制を立て直す。

「助かったよ。シャンクス、ミホーク」

「はい、気にはんない！」

「ふん…」

やつぱり頼りなるなあ。

そういうえばこの一人は将来大きく名を馳せる海賊なんだよな。  
その二人と共に戦っているつてもしかすると「ここなんじゃないか？」

「たぐひ…。わしが命狙つとるんじゃからさつひと諦めんかい…！」

またさつさと回じよつけさせカズキのマグマが膨れ上がりつていぐ。

「あいつは俺が抑える。《鷹の爪》は道を作ってくれ」

シャンクスが剣を構えながらこいつ。

「貴様に描図される覚えはないのだかな…」

やつぱりながりも!! ホークも黒刀を構え直す。

「まずはテラマキア、お前を逃がす。道が出来たら全力で駆け抜け

る」

「えつ、でも…」

「あいつに隙が出来たら全力で逃げろって最初に言つたろ？そしてお前は頷いたはずだ」

それは確かにそうだけど……。

「やつぱりシャンクスたちを見捨ててはいけないよ……」

「ありがとな。でもお前は巻き込まれただけだ。海賊に関係ないお前が頑張る必要はない。それにもし死なれたら俺の夢見が悪くなるしな」

そうだとしてもだ。

「俺達友達だろ！…」

シャンクスは俺の言葉に驚く。  
だがすぐ元の表情に戻る。

「だからこそや」

「…分かつたよ」  
俺は渋々頷いた。

「茶番劇は終わつたか…？」

サカズキがしげれをきらす。

「流星かざ むつ！」

技を繰り出そうとするサカズキにシャンクスは素早く近づいて霸気を纏った剣を振り下ろす。

サカズキは間一髪のところで防御した。

「ほう…。わざわざ死にに来たか、赤髪」

「へっ、誰が死ぬかよ」

そのままシャンクスとサカズキは打ち合ひ。

「フッ！」

ミホークはシャンクスが打ち合っている間に黒刀を振り抜き、渾身の斬撃を放つ！！

その巨大な斬撃は立ち塞がる海兵たちを十人単位で吹き飛ばした！

すさまじい斬撃だな…。

「今だ！行け！」

「甘い…」

俺が走りだそうとしたとき田の前からマグマが噴き出した。

「あぶなっ！」

俺は咄嗟に飛び退く。

その間に海兵たちは体勢を立て直してしまった。

「血ひたはずだ。逃がしはせんと……」

「くわつー。」

シャンクスが万事休すかという顔つきになる。

いや、まだ手はある……！

「ミホーク、もう一度同じよう斬撃を放ってくれ」

「…何を考えている」

「おもじりことね」

俺の答えを聞くとミホークはフツと笑い、

「いいだろう」

と言つてくれた。

「何か考えがあるらしいな……」

「ふんつ、何をしようとも無駄だ」

シャンクスとサカズキは打ち合い続けている。

しかし徐々にサカズキの方が優勢になつてきている。

「大砲、用意！！」

海兵たちもまた大砲を撃つてくるつもりらしい。

不味いな…

このままじゃシャンクスがサカズキと打ち合つて大砲の相手をする暇がないから当たつてしまひ。

「てえつ！…」

「ハツ！…」

大砲が撃たれたと同時にミホークもまた黒刀を振り下ろした。  
さつきよりもさらに巨大な斬撃が生まれる。

「おつと…俺も…」

斬撃と共にダッシュする。

斬撃は全ての砲弾を弾き飛ばしながら海兵たちに迫る！

てかマジですごいな。

剣圧だけで砲弾弾き飛ばすとか。  
あり得ないだろ、普通。

まあこのおかげでシャンクスに砲弾が当たらずには済んだ。

そして斬撃が海兵たちを吹き飛ばす。

「同じことを繰り返しても無駄……？」

俺は斬撃の前に先回りしていた。  
そして海兵たちを吹き飛ばした斬撃に触れ、

「？五行の金？物体硬質化！！」

能力を発動させる。

巨大な斬撃は止まり、硬質化して形を保った。

俺はそれをそのまま持ち上げる。

「おおっー！」

「……ー！」

「なにいー！」

「えええええーー！」

全員驚いている。

かくいう俺も驚いているのだが。

実際一か八かだったんだ。

砲弾は硬質化で形を保てても斬撃が保てるかどうかは分からなかつた。

まあ、現にできてるわけだから可能ということが証明された。

恐らく触れるものであればなんでも硬質化できるのだ。

改めて思つとす』』  
この能力。

さてと…

「シャンクス、離れてろ！！」

その言葉に瞬時反応してサカズキから離れるシャンクス。

「ぬつ…」

「斬撃もつ一発！！」

俺は手に持つた巨大な斬撃をサカズキに向かつて投げ飛ばす。

「むつ…」

斬撃は命中すると同時に衝撃波を発生させた。  
海兵たちが衝撃波でまた吹き飛ぶ。

「うわあああ…！」

『うやら硬質化したことにより威力が増したよつだ。

まあ、サカズキには効果はないだろうけど。  
それでも逃げる隙を作るには十分だ。

俺は剃を使い、逃げ出す。

「あらがとう……シャンクス、ミホーク！！」

逃げる途中に俺は聞こえるように大声で礼を言ひ。

「おおー！！氣をつけなー！！」

シャンクスの声は返ってきたがミホークの声は返つてこなかつた。  
まあ確かにミホークはこんなことする柄じやないもんな。

俺は全力で逃げ続けた。

「…………

シャンクスとミホークも構え直す。

海兵たちも立て直し、大砲を向ける。

「つおおおおーーーーー

無法地帯に轟音が響き渡った。

## 第十一説：海軍VS海賊+天竜人（後書き）

キャラ説明が欲しいかのアンケート、まだまだやっています。

第十三説・青き龍（前書き）

いよいよブルーの能力が明かされます。

## 第十二三説・青き龍

無法地帯を抜けた場所。

「ぜえ…ぜえ…」

シャンクスとミホークの協力によりサカズキ率いる海兵たちから逃れた俺は人型に戻り、荒い息をついていた。

「ハア…ここまでくれば…ハア…大丈夫…か」

何とか息を整える。

それにしてもシャンクスにはまた借りができちやつたな。ソフトクリームを奢ってくれたのと合わせて二つか。何かの形でちゃんと返さないとな。

その時街の方から何か轟音が聞こえた。

「な、何だ？」

見ると街から何か巨大な長い物が垂直に突き出でているいた。

「何だよあれ。尻尾？」

その尻尾らしきものは垂直から横に倒れ、ぐるりと時計回りに円を描いて回り、街の建物をなぎ倒していった。

ああ…?

何してんだよあれ！

あの街にだって人が住んでるんだぞ！？

「ふざけんなよ…！」

尻尾らしきものは建物をなぎ倒して時計回りに一周を終えると小さくなつていった。

くそつ！

いつたい何が起こつてるんだ！

俺は尻尾がなぎ倒したその街に向かつた。

たどり着いたその街の光景はもはや街とは呼べないほど悲惨なものだつた。

さつきの尻尾により街の建物はほとんどが崩壊し、とにかくひびひびで人が死んでいた。

誰だ！

こんなことをしたのは！

俺は尻尾が出た辺りを目指して街中を進んでいく。

すると何人か人がいるのが見えた。

だがそのほとんどが膝をついていた。

ていうか膝ついてるの後の王下七武海の三人じゃないか！  
あの青い髪の奴、『神咲』のブルーって奴もいやがる。

あれ、よく見たら父様もガイアもいるじゃないか！  
俺を探しに来たのか？

いや、だつたら何でこんな悲惨な街にいるんだ？

突然、さっきまで膝をついていたブルーが立ち上がった。

何してんだ、あいつ！？

父様の目の前で立つたりして！？

死にたいのか！？

立ち上がったブルーはそのままずかずかとガイアと父様に近づいて、  
手前で飛びかかり、そして

父様を殴った！？！？

父様はぶつ飛び、場にいる全員がその事態に驚愕している。

だが俺はその光景を見て怒りに震えていた。

「あいつ、父様を……！」

確かに父様は天竜人で以前あいつの恨みを買うこととしたのかもしれない。だからあいつがそれで殴ったのだとしても父様は父様なのだ。

天竜人で悪いことしていても俺の好きな父様なんだ！

その父様を殴られて黙っているわけにはいかない！！

「一発ぶん殴つてやる！..」

俺は人獣型になり、ブルーを目掛けて駆けていった。

父様が何か叫んだような気がしたが俺の頭にはブルーを殴ることしかなかつた。

「分かりました！急いで海軍本部に連絡をとり大将を呼びます、ゾティアック様！」

衛兵の一人がどこかへ駆けていった。

「ちいっ！退くか！」

「キシシ！今、大将とやり合つのは避けたいな！」

「……」

他のルーキーたちはそれぞれこの場所から散っていく。

「俺は……な、何で……」

ただ一人《神咲》だけは未だに動搖していた。

「お前何のつもりで殴った？」

私、ガイアはそんな奴に詰めよつた。

誰も天竜人に逆らわないのは大将が怖いからだ。なのにこいつは何のためらいもなくテラのおとつさんを殴り飛ばした。

普通では考えられない。

「し、知らない！俺じゃない！」

は？

何を言つてるんだ？

「おおおおお……！」

私は奴が言つてる意味を何とか理解しようとしているとそんな大声が聞こえてきた。

この声は

「テラー！」

テラは人獣型でものすこに速さでひかり向かつてきました。

そしてそこにいた《神咲》に殴りかかる！

その事に気づいた奴は間一髪でそれをかわした。

かわされたテラの拳はそのまま地面に音を立ててめり込んだ。

「あんた… よくも父様を殴つたな…！」

「…！」

お前、馬鹿か！？

父様なんか言つたら正体バレるじゃないか！

バレたら色々めんどくさいの分かつているはずだろつ！？

しかし幸い《神咲》はその言葉を聞く前に逃げ出していた。

「あー…待て…」

テラが後を追う。

「お前が待て、テラー！」

呼び止めるがテラは聞かずに行つてしまつた。

くそつ！

後を追いたいのはやめまだがおとつかんを置いていくわけには…

「す…すまぬ、ガイア。テラマキアを追つてくれ…」

なつ、何を！

「で、ですかあなたを置いていくわけには…」

「わしのことは…。テラマキアを…あの子を守つてしまつてくれ…」

「…分かりました」

そこまで言われたら追つしかないだろう。

私はテラが行つた方向に駆けていった。

「へんつー句でこんなこと…」

あまりのことだ。口酔いも吹つ飛んじまつた。

俺、《神咲》ことブルーは逃げていた。

何故か？

それは天竜人を殴つてしまつたからだ。

何で殴つてしまつたのか今でもよく分からぬ。  
体が俺の意思に反してやつてしまつたのだ。

そして今、追手に追われている。

追手の顔は見ていない。

後ろから殺氣を感じてそれを避けてそのまま逃げ出してしまつたらだ。

追手は恐らく天竜人の手の者だとは思つが。  
とにかく早くこの島を離れなれば！

大将が来てしまう！

しかしどうすればいい！？

船で逃げるにしても船は途中で難破してしまつてこの島に来る時は  
飛んできたから船はない。

だからと言つて船を買う金もない。

飛んで逃げるにしてもログポースは魚人島を示していて方角が分か  
らないから違う島にはいけない。

仮にいけたとしてもそこまで飛んでいく体力がない。

ならばこの島のどこかに隠れてやり過ごすか？

無理だ！

もうこの島には既に中将が来ているらしい。

遅からずそちらにも連絡がいくだろう。

第一、俺は今追われているんだ！

隠れている暇なんて無い。

そもそも大将から逃げ切れる自信がない。

万事休す。

「くそつくそつくそおつーーー何で俺がこんな田にあわなきやなら  
ねえんだーーー」

俺の命運は死きた。

だったら奴等を道連れにしてやる！……！

確か今日は一番G.Rで大人間オーケーションがあるんだったな……  
丁度いい。

皆殺しにしてやる。

こんなことになつた原因である奴等を。

天竜人を

俺は能力を発動させた。

俺は父様を殴つたブルーを追つていた。

「絶対に殴つてやる……！」

俺がそんなことを思つていた時、前を走つていたブルーの形が変わり始めた。

走りながらどんどん形が変わっていき、大きくなつていく。

なるほど、動物系の能力者か。

でもこれ、でかすぎないか…？というか空中浮いてないか？

まだまだ形は変わっていく。

「おいおい、まさかこれって…」

鼻先に生える一本のひょう長い鬚。

頭にあるのは一本の立派な角。

巨大で蛇のよつた長い体。

全身を覆うは緑の濃い青色の鱗。

そしてそれは空を浮いている。

完全に変わり終えたブルーの姿。

それは青龍だった。

マジですか…

青龍に変わったブルーは空中をすりて速さで飛んでいく。

「逃がすか！」

俺も人獣型から獣型、完全に白虎になり後を追つた。

同時刻。

シャボンディ諸島に一人の男が上陸した。

「懐かしい島に着いたと思ったたら何か騒がしいことになつてゐるな」

男はため息をつく。

「まったく……お前が死に際にあんなことを言つて焚き付けたから  
だぞ、ロジャー」

男は空を見上げながら言つた。

第十三説・青き龍（後書き）

ついにあの人も現れちゃいました。

## 第十四説・過剰戦力（前書き）

何かもう色々とやばくなつてきたシャボンティ諸島。

## 第十四説・過剰戦力

「うむむ……。サマルドリア、もうひとつと優しく……」

「我慢しなさい」

「優しくないのう。」

わしはあの海賊の男に殴られた後、傷の手当てをうけるために屋敷に戻っていた。

わしの傷をみたサマルドリアは驚いていたが、事の顛末を話すと

「あなた、過去にその人に何かしたんじやないの？」

と疑いの眼差しを向けられた。

失礼な奴じや！

まあ、何とか弁解して自分は何もしていないとわかったでもうえたんじやが。

「大将、呼んだらしいわね」

サマルドリアが手当をしながら話しかけてくる。

「ああ、そうじや」

「大将だけじや足りないとか言つてさらに戦力を要求したとも聞いてるけど」

「ああ、本当じや」

「どうして？海賊一人を捕まえるのに大将だけでも過剰なぐらいなのに」

「トーラマキアを守るためじやよ」

「ガイアさんがいるじゃない。信用しないの？」

「まさか。念のためじやよ」

手当てを終えたわしは立ち上がった。

「行くの？ オークションへ」

「ああ。行かなればならんからの」

色々とあるから。

この生活を守るために。

「そう…。 いつてらっしゃい」

サマルドリアも薄々分かっているのだろう。何も言わずに送り出してくれる。

「うむ、行つてくる」

向かうは大人間オークション会場、一番G Rじゃ。

シャボンディ諸島のとある場所。

天竜人がいた場所から逃げたバーソロミュー・くまは己の能力で飛びついていた。

彼に船はない。

島を渡るのには必要ないからだ。

ニキュニキューの実。

今までも彼はその己の能力で島を渡つてきた。

今回もそれで赤い土の大陸を越えて新世界へ入るつもりしていた。

彼は能力を使い、常人なは見えない程、超人的なスピードで飛ぶ。

瞬間誰かに打ち落とされた！！

くまは突然のことでの反応できず、そのまま地面に叩きつけられた。

「ふむ、間に合ったか」

くまを打ち落とした男が地面に降り立つ。

「《暴君》バーソロミュー・くまか」

「お前は……！」

くまは男の姿を見て驚愕する。

男が羽織っているのは正義の刺繡が入ったコート。

「あいつらは間に合つたのか……？」

その男 海軍大将《ム》のセンゴクはそう呟いた。

シャボンティ諸島のとある海に面した場所。

いや、もはやそれは海とは呼べなかつた。

凍土。

そう呼ぶのがふさわしいくらい見渡す限りの海が凍っていた。

「何だ……これは……！」

クロコダイルは凍つた海やここに停泊していた自分の船の惨状を見

て思わず呻いてしまった。

船は周りの海が凍つてしまつたせいで全く動けなくなつていた。さらに船にいた船員たちは手やら足やら凍らせられて倒れていた。ひどいものは全身を凍り付けになつているのもいた。

そんな中、クロコダイルは船から少し離れた場所でアイマスクして立つている男を見つけた

「誰だてめえ」

アイマスクの男は答えない。

「ちつ！ 砂漠の宝刀！」  
デザート・スペード

クロコダイルはイラついたのか男に向かつて砂の刃を放つ。

そして男に砂の刃が当たる。

だが男からは血は出ず碎け散つただけだった。

その碎け散つた破片は地面を凍らせ、そこから人の形に戻り始めた。

「ふいー。やべ寝てた」

男は何事もなかつたかのよつと言つた。

「自然系か…！」

クロコダイルが呻くよつと言つた。

「んん、お前がクロコダイルだな」

「…お前がやったのか？」

クロコダイルは船の惨状を見て言ひ。

「ああ、悪いな。逃げられなによつてせめてもひつた

「ひめえ…」

「やうカツカしなさんな。血口紹介でもして落り着いや

そつ言つて男はアイマスクをはずした。

「俺はクザン。海軍中将だ」

シャボンティイ諸島のとある無法地帯。

モリアは船を隠した港へと向かっていた。

「キシシ… 昨日の内にコーティングが終わつていてよかつたぜ

モリアは大将がくるといつのに焦りの色も見せず余裕だ。

「君がアゲツロー・モリアだね～」

そんなモリアの前に突然何の前触れもなくグラサンをかけた足の長い男が現れた。

「あ？ お前どこから…」

「ん～、セシ「クさんと言われてるからね～」

その男おとなしい緩やかな物言いをしながらは足を上げる。その足からはまばゆい光が出ていく。

「お手並み拝見させてもうよ～」

そしてまばゆい光を放つ足を前へと蹴りだした。

その足から一筋の閃光が走る…！

閃光はモリアに直撃し、すさまじい爆発を起こした！

「あつれ～。この程度なのかい」

閃光がモリアに直撃したのを見て男はいう。

「手加減したのにね～……」

「バカかてめえ。かわしてるに決まってるんだろ～！」

モリアは爆発が起こったところから少し離れた場所に立っていた。

そう。

モリアは閃光が当たる瞬間、ギリギリで影法師ドップベルマンと入れ替わり回避したのだ。

「どうやつてやつたかはしらないけどオ、あの距離でよくかわしたねえ～」

「今の技とその顔で思い出したぞ…。てめえ中将のボルサリーノだな」

男はさつきの蹴りで少しづれたグラサンを元に戻す。

「そりだよオ。いかにもわつしが海軍中将ボルサリーノだよオ」

男　　ボルサリーノは答えた。

「なるほど…。お前がこの島にいた中将だな」

「いーやア、違うよオ～。それはサカズキのことだねエ～」

「何？」

「わつしたちは天竜人に呼ばれてきたからねエ～」

「嘘をつけ！　来るのは大将のはずだ！」

「もちろん大将のセンゴクさんも来てるよオ。でも天竜人は相当お

怒りのよじでね～。わっしたち中将まで呼んだんだよオ

「……」

「つまり今、この島には大将であるセン「クさんとわっし、サカズキ、クザン三人の中将がいることになるね～」

「……！」

モリアはあまりに絶望的な状況に絶句した。

それはそうである。

こんな化け物じみた奴がこの島に三人もいるというのだ。

これだけでも十分絶望だといふのにさらに大将までいるのだ。

一つの島に投入するにはあまりに圧倒的に過剰すぎる戦力である。

これはこの島にいる海賊たちひとつて間違いなく分かりやすい死刑宣告だつた。

「お～、そこで提案があるんだなア」

ボルサリーノは絶句しているモリアに向つて

同時刻。

セン「クやクザンも同じよじで提案があると田の前の海賊に言つていた。

その海賊、クロ「ク・ダイルとバーソロミュー・くまも絶句していた。

おそらく一人ともモリアが聞かされた話を知ったのだろう。

そしてクザン、セングoku、ボルサリーノはほぼ同時にそれぞれの場所で同じことを絶句している海賊たちに言い放った。

「『王下七武海に入らないか』」

#### 第十四説：過剰戦力（後書き）

個人的にはボルサリーノが好きですね。

## 第十五説・王下七武海への勧誘（前書き）

今回は少し読みにくいです。

センゴクはくまと。

クザンはクロコダイルと。

ボルサリーノはモリアと。

それぞれ違う場所で話していることを頭にいれつつお読みください。

## 第十五説・王下七武海への勧誘

センゴクたちが海賊たちに王下七武海への勧誘をしている頃。

白虎化したテラマキアは未だに青龍化したブルーを追っていた。

「この……！ 待ちやがれ！」

待てと言われて待つわけがなく、ブルーはどんどん飛ぶスピードを早めて行く。

「くそつー！ 剃ー！」

テラマキアは剃を使い、超スピードでブルーに近づく。

「白虎玉ーーー！」

「ーーー？」

そして鉄塊をかけてそのまま剃の超スピードで体当たりをきました。

体当たりを受けバランスを崩したブルーは思わず人型に戻ってしまい、地面に落ちた。

「ハア…ハア…ちょっとは効いたかこの野郎…」

テラマキアは人型に戻り、息を整える。

「いてえじゃねえか、クソ野郎ーー！」

ブルーは憤怒の形相でテラマキアを睨み付けた。

「しつこい奴だな！　どこまでも追つて来やがつて。俺の邪魔をするなら消すぞ！！」

凄むブルー。

「やつてみろよ」

「……」

どうやら彼の一言でカチンときたらしい。

「いい度胸だ……！　草木の肥やしにしてやる……！」

「のぞむところだ……！　泣かしてやるよ……！」

白虎と青龍。

四聖獸同士の対決が始まる。

事の発端はセンゴクたちが天竜人ゾディアックに海軍本部で出動要請を受けた頃に遡る。

部屋にはセンゴクヒガープと報告にきた海兵がいた。

「天竜人を殴るとはどんなバカだ……！」

センゴクは報告を聞き、頭を抱える。

「ぶわっはっはっは……！ 気骨のある奴があるの！」

「黙つとれガープ！！」

暢気に笑うガープを怒鳴り付ける。

「主犯は『神咲』のブルーは逃走中とのことです」

「サカズキに連絡は？」

「どうやら戦闘中のようだ連絡がとれないようです」

「何を暴れているのだあの男は……！」

センゴクはイラついて言つ。

「とにかく軍艦の出航準備をしておけ！」

「はっ！」

海兵は敬礼をし、部屋を出ていった。

「しかし天竜人め…。大将であるわしならず中将まで連れてこいとは無理にも程があるぞ…！」

「センゴク！ お前も一枚食うか？」

「黙つとれガープ、貴様ア！！！」

煎餅を一枚差し出したガープの胸ぐらを掴み、大声で怒鳴り散らす。

「失礼するよオ。センゴクさん」

「……」

そのときボルサリーノとアイマスクをしたクザンが部屋に入ってきた。

「何の用だ。後にしてくれ。今は天竜人の件で手が離せんのだ」

「その天竜人の件の話なんですよ」

「何？」

センゴクはその言葉を聞いてガープの胸ぐらを掴んでいた手を離した。

「話せ」

「政府から天竜人の要請に従いシャボンディ諸島に大将及び中将二

人の戦力投入を許可すると通達がきました

「……どうこういひだ」

センゴクは考える。

本来なら政府はこんな集中的に戦力を一ヶ所に集めるなど許可しない。

天竜人の要請であろうとも例外ではないはずだ。

なのに許可した。

これはいつたい…

「もうひとつ通達があるんですよ」

ボルサリーノには相変わらずの穢やかな口調で囁く。

「島に着いたら優先して島にいるルーキーたちを王下七武海へと勧誘をせよと」

「王下七武海……」

「ほおー。前々から聞いてはおったがどうやら本当じゃつたらしくのう」

ガープは煎餅をバリバリと食いながら言った。

今まで海軍だけで何とか海の平和を守ってきた。

しかし時代は変わり、今は海賊たちが蔓延る大海賊時代になってしまった。

さすがにこれからは海軍だけでは海賊を捌ききれない。

そこで案として出てきたのが政府認可の海賊。

王下七武海の設立だ。

今、シャボンディ諸島にはこれからの大海賊時代を担っていくだろう海賊たちがいる。

政府はその彼らを使い、後に来る海賊に対する抑止力及び排除をさせるために置くつもりなのだろう。

セングokuは命懸けいつたよつに頷いた。

「わっしどしては海賊に手を借りるのは気が引けるんですけどねエー」

「仕方あるまい。我々海軍だけでは手に負えないのもまた事実なのだから」

セングokuはそう言つて立ち上がる。

「ならば急いで島に向かおう。中将はクザンとボルサリーノ、お前たちを連れていく

「了解~」

「……」

クザンの返事がない。

クザンの口からまだれが垂れている。  
どうやら寝ているようだ。

「起きる、クザンーーー！」

「んあ…。すんません」

「ぶわッはッはッは…！」

「笑うなガーブ…！」

そして現在に至る。

「…つまり政府の狗になれと？」

王下七武海の概要を聞かされたモリアは言った。

「それはあんたの考え方次第だねエー」

「……」

他の場所でクロコダイル、バーソロミュー・くまも同じように勧誘を受けていた。

「で、返事は？ くま」

「入ってくれるよな？ クロコダイル」

「どうなんだい？ ゲッコー・モリア」

返事を迫られる三人。  
そして彼らは答えた。

「 「 「断る」」

「...? ?」

「政府の狗になるのは御免だ」

モリアがそう言い、

「それにてめえさうひの船頭に手を出した。落とし前まづせせて  
もらわなことな」

クロコダイルはこう言い、

「…他を当たつてくれ

くまはそう言い、

王ト七武海への勧誘をきつぱつと断つた。

「あらり、何が勘違いしてゐるみたいだね

「何のためにわっしらが直々に勧誘にきてるのだと思つてゐるんだい

「「「これはお願ひなどではない…」」

「「「脅迫だ」「」」

センゴクたちはそれぞれの場所で海賊たちに言ひ。

「政府は大海賊時代が本格的に始まる前に戦力を整えたがっているからねエ～」

ボルサリーノは頭を搔きながら言ひ。

「…つまり入らねえと俺を取つ捕まえるってか？」

「当たり前でしょ？が。こんな首を易々と見逃すわけにはいかないからねエ～」

あるといひは無法地帯で。

「だから少々痛い目みてもいいことになるがいいのか？」

クザンは片手を凍らせてながら言ひ。

「ぬかせ」

クロコダイルは右手に小さな砂嵐をつくる。

あるといひは海に面した場所で

「ふむ、なら仕方がない」

センゴクは両手の指をパキパキと鳴らす。

「少し炎をすえてやるわ」

「…………」

くまは黙つて手袋を外した。

あむといひは破壊しきられた街から少し離れた場所で。

それぞれ戦いが始まつとしていた。

第十五説・王下七武海への勧誘（後書き）

それぞれの場所の会話を交互に書くのがかなり難しい。

## 第十六説・中将ボルサリーノVS海賊ゲッコー・モリア（前書き）

また戦いだなー。

いつたいいくつ戦いが残ってるんだろう?

後、キャラ説明がいるかのアンケートにご協力いただいた方、ありがとうございました。

やつて欲しいという人が多かつたのでします。

シャボンディ諸島編が終わってから書こうと思っています！

## 第十六説・中将ボルサリーノVS海賊ゲッコー・モリア

無法地帯において。

王下七武海への勧誘を蹴ったモリアはボルサリーノと対峙していた。

「本当にわっしと戦うつもりなのかい？後悔するよオ～」

「キシシ！ 後悔なんていちいち感じていたら海賊なんてやつてられるか！」

モリアはそう言つてどこからか巨大なハサミを取り出す。

「これから新世界へ入るんだ。てめえの影で戦闘力を底上げさせてもらひさせ」

「やれやれ…。勝ち目がない戦いに挑むなんてまだまだヒヨツ子の証拠だねエ～」

ボルサリーノはため息をつく。

「ほやけ…！」

モリアはボルサリーノに突進しようとする。

が、一瞬にしてボルサリーノはモリアの目の前に移動し、既に蹴りの体勢に入っていた。

「…！」

「もう終わりだよォ」

モリアは突然のことに対する反応できない！

ボルサリーノはそのまま頭を狙つて光速で蹴り抜いた。

しかしその蹴りはモリアの頭を通り抜けた。

「！？」

これで終わりと思っていたボルサリーノが驚愕する。

モリアの頭は影法師ペルマンになっていた。

頭だけすりかえてかわしたのだ。

「キシシ、もらつた！！」

モリアはその手に持ったハサミが当たる前に瞬時モリアから距離をとった。

だがボルサリーノはハサミでボルサリーノの影を狙つた。

「ちっ！ 後もう少しで影をとれたのに

「おつかし～ねエ～。ちゃんと霸氣を纏わせたのにねエ

ボルサリーノは首をかしげている。

「あまりしたくはないけど仕方ないねエ

「

ボルサリーノは足を構えて蹴りの体勢に入った。  
その足は輝いている。

「またさつきの爆発か！」

モリアは自分から少し離れた場所に影法師ドッペルマンを出して、かわす体勢を整える。

「キーシツシツシ！ 何度してもムダだ！」

「違うねエ」

「…何？」

ボルサリーノの足が一際眩しく輝く。

「今度は特大だよオ～」

「！？」「  
あまのいわと  
天岩戸」

そして前に蹴りだす！

足からでた一筋の閃光が  
モリアのそばの地面に着弾した。

そしてさつきとは比べ物にならない程の巨大ですさまじい爆発がモ  
リアとその影法師を飲み込む！

「おー、こりゃあ～やりすぎたねエ～」

爆発がおさまった後、そこには巨大なクレーターができていた。

モリアはクレーターの隅に荒い息をつきながら立っていた。  
「どうやら爆発」」を当たらなかつたものの爆風を受けてそれなりにダメージを負つてゐるようだつた。

「あれを食らつて立つのかい…。しぶといねエー」

「ちくしょつ…。化け物め」

「そりや心外だねエ。君だつてあの爆発から逃げ延びてゐる化け物  
じゃないかい」

「その爆発を起こしてゐる奴に化け物なんて言われたくねえな！」

モリアは影法師をだし、それを分裂させた。

「欠片蝙蝠」  
ブリック・バット

「…」

「影箱」  
ブラックボックス

そしてその分裂した蝙蝠型の影がボルサリーノの周りに集まり、四角い箱を作つて閉じ込めた。

「今のうち近づいて…」

しかしその箱を中から光の剣が切り裂いた。

「……」

「天叢雲剣」  
あまのむらぐくわ

ボルサリーノのが箱から出てくる。

「小賢しいね……」

そう言つてボルサリーノはモリアを指差す。  
指先は光つている。

「あつれエ～？」

ボルサリーノの指差した先にはいたのはモリアではなくその影法師  
だつた。

「かかつたな！」

「！？」

モリアはいつの間にかボルサリーノのすぐ後ろにいた。  
それは何故か？

モリアは影箱が切り裂かれた後にそれを影法師に戻してボルサリー  
ノの後ろに潜ましておき、ボルサリーノがこちらを向いた瞬間に自  
分と位置を入れ替えたのだ。

「てめえの影、いただくぜ……！……？」

しかしボルサリーノには影が既になかった。

「何で影が……」

「残念。それは虚像だよオ～」

ボルサリーノが突然後ろに現れて、モリアの腹を光速で蹴り飛ばした！

「…………」

モリアは影法師を使って避ける暇もなくモロに食らって吹き飛び、轟音を立ててヤルキマン・マングローブにぶつかった。

「…………」

あまりに重い一撃を食らってしまいモリアはもう体が動かなかつた。

「君の考えなんてバレバレなんだよオ～」

ボルサリーノはモリアより一枚上手だったのである。

モリアの考えが分かつたボルサリーノは影箱から出たときに自らの能力を使い、光の反射や屈折を応用して自分の本来の位置からずれたところに己の姿を虚像として映しだしたのだ。

モリアはそれに見事に引っかかり、その結果が現在である。

「それで、どうするんだい？」

モリアに選択肢は一つしか残されていなかつた。

「くそ……入つて……やる……よ

歯を食い縛り、屈辱に耐えながら言った。

「最初からそう言つていればよかつたものをね」

これにてゲッコー・モリアの七武海入りが決定した。

第十六説・中将ボルサリーノ VS 海賊ゲッコー・モリア（後書き）

次はクザンとクロコダイルの戦いかな？

第十七説・中將クサンVS海賊クロノダイル（前書き）

やつぱり駄文だな…

## 第十七説・中将クザンVS海賊クロコダイル

シャボンティイ諸島のある海、否、凍土に面した場所。

クザンとクロコダイルは対峙していた。

「そうカッカセザ考え直してこらんよ

「るせえ……てめえのダラダラしたしゃべり方はいちいち續にさわるんだよ……！」

「そりゃ俺のモジトーは『ダラけきつた正義』だからな

「……ふざけてんのか

クロコダイルがドスのきいた声でいう。

「おー、怖つ！ 牛乳飲めよ」

クロコダイルはクザンのその一言でカチンときたらしく。

「砂嵐 重（サーブルス・ペサー）——」

右手に圧縮した砂嵐をつくり、クザンに向けて放つ。

「おわっ！」

クザンは何か横にかわす。

圧縮された砂嵐はクザンのいたところの地面をえぐった。

「危ないじゃないか」

クザンはさう言しながらそいり辺に落ちていた木の枝を拾つ。

「短気は損氣だぞ」

クザンの持つ木の枝がみるみるうちに凍つっていく。

「アイスサーベル」

あつといつ間に氷の刃が出来上がつた。

「本当にどうしても入らなっていつんだな?」

「ぐじー

クザンの確認はクロコダイルに一蹴される。

「はあ……。入ってくれないと俺が上からお叱りを受けるんだけどな

……」

「知るか」

バッサリと切つて捨てるクロコダイル。

「血も涙もないのかい、あんたは……」

クザンはため息をつく。

「じゃあいいよ。今から戦つて俺が勝つたら七武海へ入ってもいい。あんたが勝つたら俺を好きにするといい」

好きにしていい、とこいつ言葉に反応するクロゴダイル。

「本当か…？」

「ああ。俺の『ダララカ』にかけて誓つてやつ！」

「……」

まったく信用できない誓いである。

「まあいい。どちらにしろ負けたやつは勝ったやつのことを見  
くぼかはないんだからな」

そう言ってクロゴダイルは構えた。

「それは確かにそうだな」

クザンも氷の刃を構える。

「遅いな」

しかし構え終えるまえにクロゴダイルが一気に距離を詰める。

「三日月形砂丘…！」  
バルバン

「よつと」

さすがにクザンも中将である。

クロコダイルの突然の奇襲にも焦ることなく余裕をもつて氷の刃で受け止める。

しかし氷の刃は水分をとられ元の木の枝へと戻ってしまった。

「あらら。近接戦はちつと分が悪いね」

クザンは残った片手でクロコダイルの腕を掴んだ。

「アイスタイル」

掴んだところからクロコダイルの腕が凍りついていく。

「ぐおつーー！」

クロコダイルはあまりの痛みに思わず飛び退く。  
腕は半分近く凍りついていた。

「降参したほうがいいんじゃないの？」

「ほつとけ……！」

クロコダイルは残った片手で凍りついている腕を触った。

「あらり

クザンが少し驚く。

なんとクロコダイルの腕は凍りついていたところが砂と化し、元通りとなつたのである。

「ちょっととそつと凍らせた程度じゃ無理か…」

クザンは頭を抱える。

「かと言つてもひつ触れさせてもらひえないだらうしなあ…」

「やつてくれたな…」

クロコダイルは両手に砂嵐を作り出す。

「お返しだ！ ダブル・サーブルス二重砂嵐！」

そしてクザンに向けて放つ。

繰り出された二つの砂嵐  
はなんと一つになり、巨大な砂嵐としてクザンに迫る！

「あれはヤバイな…」

クザンは前に手を突き出す。

「アイス・エイジ氷河時代！ –！」

突きだした手から出た氷の塊が砂嵐に当たる。

「 –！」

その瞬間、砂嵐は巨大な竜巻型の氷のオブジェと化した。

クザンはそのオブジェを蹴り飛ばす。

竜巻型のアンバランスな氷のオブジェは蹴られたら当然倒れる。

「返すぞ」

「……」

だが倒れる先にはクロコ・ダイルがいた。

「ちつ！ 砂漠の宝刀デザート・スパーダ！」

クロコ・ダイルが生み出した砂の刃はオブジェを切り裂き、その先のクザンに迫る。

「おつとー。」

クザンは横にかわす。

その時に凍りついた海が目に入った。

「…………。確かに砂は水に弱いんだっけか……」

クザンは何かを思いついたかのように呟いた。

「何をぶつぶつこってやがるー。」

クロコ・ダイルは砂漠の宝刀を連續で繰り出してくる。

クザンはそれを全てかわしながら島の淵に立った。  
すぐ後ろは凍りついた海である。

「馬鹿が！ そのまま氷を破つて海へと突き落としてやるつー。」

クロコダイルが手を四つの砂の刃に変えてクザンに迫る。-

「砂漠の金剛宝刀！――！」  
デザート・ガスパード

そしてその手をクザンに突きだした！

「残念だが海に落ちるのはお前の方だ」

しかしクザンはその刃が当たる寸前に氷と化して地面に崩れ落ちた。

「なつ！」

目標を失ったクロコダイルは思わず前へつんのめる。

「そりよー。」

「――。」

そこをいつの間にか後ろにいたクザンに殴り飛ばされた。  
そしてそのまま凍りついた海に叩きつけられる。

「くつ…… 嵌められたか……」

その時にビシッと嫌な音が響いた。

どうやら今の衝撃で氷にビビが入ってしまったようだ。

「くわいー。」

クロコダイルはすぐさま起き上がるが、  
しかし氷が割れる方が早かつた。

「くつ……！」

クロコダイルはそのまま海へと落ちる。が、半身まで海に浸かつた瞬間、周りの海が再び凍りついた。

「何……？」

てっきり海へ落ちると思っていたクロコダイルは驚いて周りを見る。すると田の前にクザンが立っていた。

「降参するよな？」

「うう……。好きにしろ」

これにてクロコダイルの七武海入りが確定した。

第十七説・中将クザン▼S海賊クロノダイル（後書き）

次はくまとセンゴクかな？

第十八説・大将センゴクVS《暴君》バーソロミュー・クマ（前書き）

これでようやく戦いが一段落！  
と言つてもまだ続くんだけどね。

## 第十八説・大将センゴクVS《暴君》バーソロミュー・くま

先の戦いによつて破壊し尽くされた街から離れた場所。

轟音と共に体は巨大なのに足が短いアンバランスな男が吹き飛び、地面に転がつた。

「…………」

その男 バーソロミュー・くまは傷だらけだった。

「人の話を聞かないところは確かに《暴君》だな」

そんなくまに近づく男、大将センゴク。

「だが強さは全然だ」

「…………」

くまは満身創痍だが何とか立ち上がる。

「まだ諦めないのか?」

「…政府の狗などお断りだ」

そう言つてくまは構える。

「圧力砲…！…」  
〔パワード〕

そして手のひらの肉球で大気をはたいて、衝撃波とする。その衝撃波はセンゴクに向かっていく。

しかしセンゴクは当たる寸前に拳でその衝撃波を横に薙いでいとも簡単にかき消した。

くまはそれを見ずに肉球の瞬間移動でここから逃げようとする。が、いつの間にか近づいてきたセンゴクに殴り飛ばされ吹っ飛んだ。

「逃がしはせん…！」

まともに戦うことも逃げることさえもできないほど圧倒的な実力差。もはやくまには選択の余地は残されていなかった。

しかしくまには決して降伏も政府の狗になることも頭になかった。今まで残虐の限りを尽くしてきた『暴君』としてのプライドが誰かの下につくことを許さなかつたのだ。

「……」

くまは無言で立ち上がる。

その姿には覚悟の色が見えた。

「まだ立つか…」

センゴクはため息をつく。

くまはその隙を狙い、センゴクの背後に瞬間移動して至近距離で「圧力砲」を放つ。

しかしセンゴクはそれすら読んでいたかのようにするりとかわし、くまの「圧力砲」を放った方の腕を掴んで投げ飛ばし、地面に叩きつけた！

「……」

叩きつけられた衝撃により、地面に亀裂が走る。

まだセングコクの攻撃はまだ終わらない。

叩きつけられた衝撃の反動によりバウンスしたくまの体を武装色の霸気を纏わせた拳で殴り付ける。

「…………」

ホームランボールのように飛んでいくくまの体はヤルキマン・マングローブに激突して、それをポッキリと折った。

「しまった…。霸気を使う必要はなかつたか」

セングコクはやってしまったところで咳く。

折れたヤルキマン・マングローブがゆっくりと崩れ落ちる。そんな土煙の中一つの人影が見えた。

「…？」

土煙の晴れたそこにはくまが立っていた。

「驚いた…！ タフな奴だ」

もはや立つことすら困難なはずのダメージを負っているのに立つているくまにセングコクは素直に尊敬の念を送った。

「だがいつまでもおまえばかりに構っているわけにはいかないからな」

センゴクの形がみるみる内に変わっていく。

「悪いが本気でいかせてもらひ！」

そして大仏の姿になつた。

大仏になつたセンゴクは超スピードでくまに迫つていく！

くまは言つことを効かない体に鞭打つて周りの大気を圧縮し始める。

「熊の衝撃！！！」  
ウルススショック

そして圧縮し終えた大気の爆弾をセンゴクに向かって放つ！  
だがセンゴクはそれが爆発する寸前になんと握り潰した！！  
そしてそのまま自分の最強の技がいとも簡単に破られたことに驚いているくまの頭を掴み、持ち上げる。

「最後にもう一度聞いひ。七武海に入る気はないか

「ない……！」

くまはあつぱりと否定の意思を示した。

「……残念だ」

センゴクはくまの頭を地面に叩きつけると同時に衝撃波を放つ！

地面には亀裂が入り、めり込む。

超至近距離で衝撃波を食いつたくまはもう動かなかった。

「ふう…」

センゴクは人型に戻る。

そしてある一点を見つめた。

「ずっと見ていたとは悪趣味な奴だな…。ドンキホーテ・ドフリック／ンゴー！」

そこにはこやらじこ笑みを浮かべて近づいてくるドフリック／ンゴーがいた。

「フフフフ…！… わすが大将。とんでもねえ強さだ」

センゴクは身構える。

「おっと、勘違いするんじゃないねえ。俺は七武海といひに入るぜ」

「…」

「第一、あんたと戦つて得るものなんぞ何もねえ。それに七武海ってものはおもしろいんだ」

その言葉を聞きセンゴクは警戒を解く。

「…とにかくかかるがまあいいだろ？… 七武海入りを認める

これにてドフリック／ンゴーの七武海入りが決定した。

「それより大将さんよ。あなたの後ろに倒れていた奴。どうか逃げたぜ」

「何！」

センゴクは慌てて後ろを振り向く。

そこに倒れていたはずのくまは影も形もなくなっていた。

「ばかな…。まだ動けたのか…」

本来のセンゴクなら氣づけたが完全に倒したという油断と一人の海賊を七武海に入らせることができて氣の抜けたのが重なって氣づくことができなかつたのである。

「不覚…！」

センゴクはそんな口を恥じた。

その時、胸のポケットに入っている三つの小電伝虫の一つが鳴った。

センゴクは氣をとりなおしてその小電伝虫の受話器を取つた。

「い」報告申し上げます、センゴク大将！

どうやら海兵の一人からの連絡のようだ。

「何だ？」

「はい。只今サカズキ大将が『赤髪』のシャンクス、『鷹の目』の

ミホークと2番GR付近にて交戦中なのですがジリジリと1番GRに移動しつつあるのです！」

「何…？」

「一番GRには人間オークション…あ、いや職業安定所があり、中には多くの貴族や天竜人がいます！　このままだと彼らに被害が及ぶ可能性が！」

「くつ…。サカズキの奴め、何をやっているのだ…！」

この場合、避難させた方が最も手っ取り早いのだが、天竜人のことだから後々海軍がしつかりしていいからとかで難癖をつけてくるに違いない。

行つて止めるのが最善だと言える。

「分かつた。すぐに行く」

そう言つて電話を切る。

次にセンゴクは残りの二つの小電伝虫を取り出してかける。

「おー、こちらボルサリーノオ」

「ひちらクザン」

一人の中将が出る。

「センゴクだ。そつちは終わったか？」

「はい。七武海入りを認めてくれましたよオ～」

「ハハハもでゅ」

「よし。ならば至急一番G Rへ向かっててくれ」

「どうかしたんですねかい？」

センゴクはさつき海兵から聞いた話をする。

「要するに先回つして一番G Rへ行かせなによつてあるヒュード  
スか？」

「その通りだ」

「分かりました。すぐに急行します。」「安心なすつてください」

「りょーかい

小電伝虫が両方とも切れる。

「フフフフ…。何やら大変なことになつてゐみたいだな」

「お前には関係ない。七武海の称号の授与については後田、連絡す  
る」

そう言つてセンゴクは行つてしまつた。

「フフフフ…！　一番G Rか…」

残されたデフロリノ「」は意味の悪い笑みを浮かべた。

「ま、一 番GRか」

そこから少し離れたところに男がいた。

男はビデオセンサーの小電球の会話を盗み聞きしていたりじこ。

「《赤髪》のシャンクスねえ…」

男は一人呟く。

「どれ、助けにいってやるか

やつぱり歩きだした。

二番GR付近。

テラマキアとブルーは戦っていた。

「くそつ！　てめえをつたとくたばれ！…」

「くたばれと言われてくたばる奴がいるか！」

二人は激しく打ち合いながら少しづつ一番GRに近づいて行つた。

「テラ、一体どこへ…」

ガイアはテラを追つっていたが途中で見失つていた。  
その時、何かが暴れている轟音がした。  
ガイアは思わずそちらを見る。

「もしかしてテラの奴、戦つてるのか…」

ガイアはその先を見る。

「あの先は一番GRか…」

ガイアは音がした方向へ走り出した。

「うーむ、まだ着かないのかの？」

「もうしばらくかかります。ゾディアック聖」

従者の一人が答える。

ゾディアックは屋敷を出てから一番GRにある人間オーケーションを目指して歩いていた。

「もうオーケーションは始まつておるところだ……」

これは運命なのか。

はたまた誰かの意思なのか。

皆それぞれ一番GRに意図せずして集まり始める。

事件はいよいよ大詰めを迎へ始めつつあった

第十八説・大将センゴクVS『暴君』バーソロミュー・くま（後書き）

いよいよ大詰めだ！

**第十九説・集結（前書き）**

久しぶりにテラマキアの視点だ！

## 第十九説・集結

二番GRと一番GRの境目付近。  
遠くに人間オークションが見えるところで俺、テラマキアは父様を  
ぶん殴つた『神咲』のブルーと殴り合つていた。

「泣かす！」

「くそガキが！」

肉を殴る鈍い音が響く。

俺の拳がブルーの頬に一発入れば、ブルーの拳が俺の腹に一発入る。  
俺の蹴りがブルーの脇腹に一発入れば、ブルーの蹴りが俺の顎に一  
発入る。

そんな風に両者ともに一步も引かない攻防を繰り広げていた。

「食らえ！」

俺はブルーの隙を見つけて顔面に拳を打ち込もうとする。

が、寸前で拳を受け止められて防がれた。

ブルーは俺の拳を掴んだままフツと不敵に笑つて

「つらあつ！」

お返しとばかりに俺の顔面を狙つて拳を打ち込んできた。

だがあれも黙つてやられる義理もないでのその拳をさつき俺がやられたように受け止めてやつた。

「…！」

そしてそのままがつちつと掴んで離さないようである。

「離せ、こひり……」

「あんたが離してくれたらな……」

お互に相手の拳を掴みあって離さない。

「ぐぬぬ……」

「くわい……」

硬直状態が続く。

その時、横から飛んできた土の塊がブルーを吹っ飛ばした！

「テラ！」

「ガイアー!?」

二つの間に少し離れた場所にガイアがいた。  
わざわざ飛んでいたのがガイアの仕業らしい。

「アホかアー！」

「こひりー！」

ガイアは俺に近づくところなり俺を殴った。

「こきなり何を……」

「勝手に先走って心配かけさせんな！」

「…………」「めん」

まさかそんなことを言われるとは思わなかつた。  
俺は素直に謝つた。

「くそつ！ 二対一は分が悪いな」

吹っ飛ばされて起き上がつたブルーは青龍になつて飛んで逃げよう  
とする。

「あつ！ 待て！」

俺は慌てて追いかけよつとした。

「…………」

が、ブルーは横からきた巨大な斬撃に当たつて地面に落ちた！

うわ、ヤバイ。

何かデジヤブを感じる。

「いつつ……。一体なん……」

「大噴火アアア！！！！！」

さらにブルーは向かつてきた特大のマグマの拳に直撃した。  
ブルーは悲鳴すら上げずぶつ飛んだ。

そして黒焦げになつて地面に転がる。

不幸な奴…！

俺の怒りの念はそれを見て同情の念に変わった。

「おのれ《赤髪》に《鷹の目》。ひよこまかと避けよつて…」

「あんたもしつこくな！」

「……」

やつぱりさつきの斬撃とかは彼らの戦いの余波だつたらしい。  
てかまだ戦つっていたのかよシャンクスた。

「ん？ テラマキアじゃねえか！ また会つたな

「ほつ……」

「ぬ！ 一人逃がした奴か！」

それぞれこちうに氣づいて三者三様の反応を見せせる。

「… なあ、テラ。お前一体何してたんだ？」

ガイアは当然の反応をする。

「まあ、何だ。話せば長くなるんだ」

俺は適当にほぐらかしつつ答えた。

「むひ、ガイア…！」

サカズキがガイアの姿を見て唸る。

「裏切り者め…。」こんなとこひにいたのか！」

裏切り者？

「ガイア？」

「氣にするな」

拒絶の声。

俺はガイアを見上げる。

触れては欲しくない部分だったのだろうか。

ガイアは険しい顔をしていた。

「まあいい。お前らまとめてここで引導を渡してくれるわーーー！」

またサカズキと戦うのか…。

うんざりする。

サカズキの両手がマグマに変わり、異様に膨れ上がる。

その両手をじりじり元に向かって突き出す。

「超噴火アーーーーーーーー！」

その両手から異常に膨れ上がったマグマが放たれて一つとなり、あり得ないほど巨大なマグマの塊になつて俺たちに迫ってきた！

この辺り一帯を消す氣があいつ！

「周りの被害はお構い無しか…！」

「やばいな！」

「ふん……」

俺たちは慌てて回避しようとする。

「アイス・エイジ  
氷河時代！…！」

しかし氷の塊が飛んできて巨大なマグマを一瞬にして冷やし、土の塊に変えた。

「え？」

あまりのことに呆然とする俺たち。  
しかしそれだけでは終わらなかつた。

「あまのいわと  
天岩戸」

その土の塊に一筋のレーザーが当たり、それは木つ端微塵に爆発した。

あまりに規格外すぎる力。

俺はこの力をマンガで見たことがある。

だけどそれの持ち主がこんなところにいるはずが…。

「あらり、今のはやりすぎじゃないのか？ サカズキ」

「君の能力はただでさえ危ないんだからねエ～」

俺の予想を軽く裏切つて彼ら クザンとボルサリーノは現  
れた。

「何じゃ～お前ら！ 何で邪魔をするー？」

「だつてあのままいつたら根っこがやられてこのGRが海に沈ん  
でたぞ！」

「君ちょっと自重した方がいいよオ。人質の子供まで殺す気かい？」

「あのガキは悪魔の実の能力者の海賊だ！」

「おー、そうなのかい？」

俺たちを無視して話す三人。

おいおい、何で後の大将の三人がいるんだよ？  
洒落にならないだろ…！

「これつてもしかしてピンチか？」

暢気に言つシャンクス。

「……！」

それとは対照的にミホークは黒刀を構えてピリピリとした雰囲気を纏っている。

「何でお前らここにいる……！」

ガイアが警戒しながら聞く。

「んン？ 天竜人が殴られたこと知らないのかい？」

ボルサリーノがガイアの言葉に反応して返す。

「知ってるさ！ でも来るのは中将じゃなくて大将のはずだ！」

天竜人が殴られたという事実を初めて知つて驚いているシャンクスたちを横目にガイアは言う。

「もちろん私もいる」

「センゴクさん……」

いつの間にか三人の中将の後に大将センゴクがいた。

「大将……センゴク！－！」

俺たちに戦慄が走る。

何だよこれ……。

中将三人に加えて大将とかオーバーキルもいいところじゃないか……！

「ガイア中将か……」

「…………」

「噂でどいぞの海賊に負けて奴隸になつたと聞いていたが……嘘だつたか」

そして黒焦げになつたブルーに目をやる。

「《神咲》は始末し終えたようだな」

「わしの攻撃に勝手に当たつてくたぱりよつた」

「ふむ、そつか……。《赤髪》、《鷹の目》――お前たち七武海に入らなか?」

「――」

シャンクスたちに七武海への勧誘!?

「センゴク! ? 何を! ?」

「口を出すな、サカズキ。これは政府の決定だ」

「――」

「七武海といつのは……」

そりやつてセンゴクは七武海の説明をし始めた。

その説明は七武海の義務は程々にして、利点のほうを誇張して語っていた。

そして最後にこれはお願いではなく脅迫であると言つて締めくくつた。

「断るー。」

シャンクスの第一声。

「海賊つてのはやっぱ自由じゅうゆなもやなー。」

シャンクスらしい答へだ。

「……『鷹の爪』は?」

「私は別に構わん。だが……」

ミホークは黒刀の切つ先をセンゴクに向けた。

「『赤髪』を捕まえるのであればこの場は敵対せてもいいつ

「…。」

「まだ決着がついていないのでな……」

「ひらりも!! ホークらしい答へだ。」

「……ハアー……」

センゴクがため息をつく。

「揃いも揃つて海賊というのは痛い目見ないと分からん奴ばかりだ  
な」

そつ言つてガイアと俺を睨んでくる。

「そこの一人も逃がすわけにはいかないな

結局巻き込まれるのか…。

空気がピンとはじつめる。

「おー、トライ」

ガイアが耳打ちしてきた。

「何だよ

「もう天竜人つてばらしてしまえ。今はそうした方がいい

「……この状況で信じてくれると思つか?」

「……」

黙つてしまふガイア。

その時ボルサリーノが蹴りからレーザーを放ってきた。  
爆発が巻き起こる！

「あぶねー！」

「へつ……」

「おわつー！」

「……！」

俺たちは散り散りにかわす。

「貴様の相手は私だ『赤髪』」

セントゴクがシャンクスの前に立ちはだかる。

「大将か……。こりやキツいな」

「めんぢくせえな……。さつさと降参してれないかなー、『鷹の目』」

ミホークはクザンと対峙していた。

「……」

ミホークは無言で黒刀を構える。

「やつぱ降参するわけないか……」

「どうして裏切ったんだい？ ガイア」

ガイアはボルサリーノと組み合っていた。

「私は私の正義を貫いたまでだ」

「そうかい。ならわしあも自分の正義に従つて君を捕らえるまでだ  
ねエ」

「うわ、みんなそれぞれ戦うつもりか…。  
こんななんじや俺も引くには引けないじゃないか。  
今度は逃がしはせん！」

目の前には般若の形相をしたサカズキがいる。

俺は人獣型になつて構えた。

後の大将と一対一。

勝てる気がしない。  
とにかく死にたくないな…。

**第十九説・集結（後書き）**

次回はついにあの人が出てくるか……？

## 第一十説・それぞれの戦い（前書き）

やばい、もうすぐ「ストだ…！」

更新が遅れるかもしませんが」「承ください。

## 第一十説・それぞれの戦い

俺の嵐脚の刃とマグマの礫が飛び交う。

「なぜ六式が使える……！」

サカズキが俺の技を見て驚く。  
まあ、六式は海軍の体技だしな。  
それがたかだか一介の海賊が使っているんだ。  
驚くのも無理はない。

「まあいい。何にせよ骨も残さず消してやるつ……！」

おー、怖っ！

俺、テラマキアは只今、後の大将サカズキと死闘中である。  
でも全く勝てる気がしない。

「？五行の金？右腕硬質化

俺は右腕を硬質化させる。

「？飛ぶ？指銃……」

その右腕で指銃の構えをし、

「？白光？！？」

そしてサカズキに向かつて撃ち出す！

瞬間サカズキの胸に大穴が空く。

だがすぐに体のマグマが穴を覆い、元に戻ってしまう。

「無駄だ。ロギアにそんな攻撃が通用するわけなかろ？…」

そうなのだ。

奴のマグマに触れないためにもさつきから遠距離攻撃だけをしているのだがそれ以前に俺にはまだ霸気が使えない。

すでに負けが確定してゐるようなものだ。

ロギアにダメージを与えることができない  
無いわけでもない。

しかしこの技は直接相手に触れなければならない。

土、光などそれ自体に攻撃作用がなければ全然構わないんだけど奴はマグマだ。

触れば確実にダメージを負う。  
まさに諸刃の刃だ。

それ以前に奴は強い。

うまく懐に入れるかすら分からない。

だが今はこちらの攻撃が効かないと思って油断しているはずだから確実に懐に入れるだろう。

その一発で致命傷を与えなければ完全に俺の負けだ。

奴は一度と油断しないだろう。

つまりチャンスは実質一度だけ。

……やばい。

何だか死亡フラグが立ちまくつてゐる気がする。

「今度はこちから行くぞ……」

サカズキの右腕がマグマに変わる。

俺は考えることを止めて意識をかわすことだけに集中をせる。

「冥狗！」

俺の体を削ぎ落とそうと迫ってきたサカズキのマグマの腕をかわしながら俺は思った。

他のみんなは大丈夫かな

ミホークは黒刀「夜」を振り抜いた。

「あら、

クザンの体が横に真つ二つになる。

そして地面に崩れ落ちるがその時に凍りついた地面からすぐに再生した。

「なかなか鋭い切れ味だな」

「くっ…！」

ミホークは苦戦していた。

それはそうである。

原作での彼は恐らく霸氣を使えたであろうが今は原作の22年前。今の彼は霸氣を使うにはまだ未熟だった。

霸気が使えないのならロギアであるクザンに傷を負わせることはない。

その結果、ミホークはクザンに防戦一方になってしまっていた。

「アイス塊両矛槍」  
ブロッカーナントベック

クザンは空気を凍らせて氷の槍をつくり、ミホークに放つ。

向かってきた氷の槍をミホークは黒刀で叩き落とすと同時にいくつもの斬撃を放つた。

「アイスタイルカブセル」

クザンは全ての斬撃に正確に冷氣の弾丸を撃ち込み、凍らせた。

ミホークはその間に一瞬にして距離を詰めよつとする。

「アイス塊暴雉嘴」  
ブロッカーナントベック

それに気づいたクザンは間髪いれずに氷で作った雉たちを向かってきたミホークに突進させる。

ミホークは動じることなくそれらを一太刀のもとに斬り伏せてクザンに近づき、黒刀を縦に振り下ろし真つ一つに斬った。

さらに見えない程の速さの剣筋で粉々になるほど斬り、そしてこれでもかと言つほど粉微塵に斬り刻んだ。

だが実体のないロギアにはそんなことは当然無駄でクザンは何事もなかつたかのようにまた再生した。

「もう少、諦めようよ。いくらやつても無駄だつて分かつたろ?」

クザンはミホークに語りかける。  
しかしミホークはそれを無視して斬撃を放つた。

クザンはそれを苦もなくひょいとかわしながらため息をついた。

「海賊つてのはどうにも強情な奴が多いな…」

戦いは続く

「あまのいわと  
天岩戸」

「大地のうねり（ガイア・ウェーブ）！！」

全てを飲み込まんとする巨大な土の波に一筋の閃光が瞬き、巨大なそれに大穴を空ける。

他の一人とは違い、ボルサリーノとガイアの力は拮抗していた。

一瞬にしてガイアの目の前に移動したボルサリーノは光速で蹴りを放つ。

ガイアはそれに動じることなく反応して能力で鍊金したダイヤモンドの籠手に武装色の霸気を纏わせて迎え撃つ。

拳と蹴りが激突する！

すさまじい程の衝撃が大気を揺るがす。

衝撃と反動により両者ともに吹き飛び、空中で体勢を整えて地面に着地する。

「多少は衰えてるかと思つたけどまったくだねエー」

「お前こそ前より断然威力があがつていいじゃないか」

お互に荒い息をつく。

「天叢雲剣」  
あまのむらくわせん

ボルサリーノは光の長剣を生み出して構える。

「諦めたらどうだい？ あの子供と『鷹の眼』は霸気が使えないみたいだし、『赤髪』はセンゴクさんが相手をしているから万に一つの勝ち目もないよオー」

「鍊金？ダイヤモンド？ 大地の武具・剣ダイヤモンド∨e」

ガイア・ウェポンソード

ガイアはダイヤモンド製の剣を作り出して構える。

「ほかの海賊はともかくテリは違うぞ。何と言つても私の弟子だからな」

「弟子イ？ 君は海賊を弟子にとるのかい？」

ガイアはふつと笑う。

「実はあいつ天竜人なんだ」

そう言つてボルサリーノに突進する。

「冗談キツイよ、ガイア～」

ボルサリーノはそれを迎え撃つ。

剣と剣がぶつかり、鋭い金属音が鳴り響く

「ちよこまかと避けよつて……」

「あ、ぶな！」

俺はサカズキの攻撃を避けながら懐に入る隙を狙っていた。

「さつさとくたばらんか……！……」

怖い！怖い！

顔が般若通り越して不動明王みたいになってるよー！

カルシウムとうううー！

「…ええい！ めんどくさい！」

サカズキの足元からマグマが膨れ上がっていく。

「流星火山！」

膨れ上がったマグマから比較的小型のマグマの拳が次々と空に向かって放たれていく。

放されたマグマは小さな隕石となつて降り注ぐ。

しめた！

今なら奴は技を出して動けない！

絶好のチャンスだ！

俺は剃を使って降り注ぐマグマの隕石をかわしながらサカズキに高速で接近する。

「むっー！」

サカズキは接近してきた俺に直接マグマを放ってきた！

「！」

俺は咄嗟に体を捻つて避けようとしたが間に合わず脇腹にかすつてしまふ。

「……っ！――！」

脇腹にあり得ない程の激痛が走る。

だがここまできて引くわけにはいかない……！――

「？五行の金？両腕硬質化……！」

俺は激痛を我慢しながらサカズキの前に踏み込む。

「何を……！」

サカズキは俺の様子がおかしいことに気づき始める。

俺は意識を指先に集中して持てる力を全てを叩き込んだ！

「指銃？白砲？！――！」

「ガツ……！――！」

突き出した俺の両指はしっかりとサカズキの体にミシッともり込む。

一瞬遅れて衝撃波とともにサカズキがぶつ飛んだ。

「ぐあ……！――！」

熱ツ……！！

俺は指先の熱さによる痛みと脇腹からくる激痛につづくまつた。

何故俺の攻撃がロギアであるサカズキに当たったのか。

答えは俺の能力、？五行の金？を使つたからだ。

俺はサカズキに触れた瞬間、能力を発動させてサカズキを硬質化させたのだ。

硬質化することは形を保つこと。

つまりマグマはサカズキの形を保つた硬い固形物になつたのだ。

形ある硬い固形物なら誰にだつて触れられるというもの。

ただしこれは決して霸氣みたいに魔羅の実の能力を無効化しているわけではない。

いくら硬い固形物になつたといつてもマグマはマグマなのである。つまり俺はマグマに素手で直に触れたわけなのだ。

幸いこちらも腕を硬質化して形を保つていたので腕が溶けるということはなかつたが熱さによる痛みは感じる。

このようにそれ自体が攻撃能力を持つロギアに対しては諸刃の刃なのである。

これが俺がロギア対策用に考えた技。

霸氣を使えばロギアに触れられるとこからとつて名付けて？白霸  
？だ。

…何か中2つぽいな。

「あいてて…」

指先と脇腹が痛む。

ちょっと触れただけでこの痛さ。  
もし一撃でも直撃していたら洒落にならなかつたな。

俺はサカズキがぶつ飛んでいつた方向を見る。

渾身の一撃食らわせたんだからもう立ち上がるなよ…。

「アア…。やつてくれたな…」

俺の願いを容易く打ち碎かれた。

それなりのダメージを負っているようだがサカズキは立っていた。

「はは…」

笑うしかなかつた。

やつぱり俺の全力ごときじや倒せないか。  
俺は脇腹の痛みに耐えながら立ち上がる。

その時横からシャンクスがぶつ飛んできて地面に転がつた。  
土煙が舞う。

「くそつ…！」

「シャンクス！？」

シャンクスはかなりの深手を負つていた。  
もはやこれ以上は戦えない程の。

「こんなものか、《赤髪》」

センゴクが土煙の奥から現れる。

「早くやってしまえ、センゴク」

絶体絶命……！  
どうする……？

「まあ、もう荒てるな。一つ聞くことがある」

センゴクはシャンクスを見る。

「最後に一つ聞く。七武海に入るか？」

そんなものは決まっている。

「…………いやだ」

シャンクスは小さこ声でさつぱつと断つた。

「どこつもひこつも海賊と呼ぶのは……」

センゴクは拳を振り上げる。

「…………！」

「…………！」

俺はかばつよつてシャンクスに覆い被さつてギュッと皿を握った。

鈍い音が響いた

あれ？ 痛くない？

俺は皿を開ける。

「あぶないところだつたな」

驚愕に染まつた顔をしているサカズキの近くには白髪混じりの男が立つていた。

遠くにはセイゴクが土煙の中に倒れている。

「元気だつたか、シャンクス？」

男はこいつを振り向きながら言つた。  
この顔どこかで…。

「へ、レイリーさん…。」

……マジですか？

第一十説・それぞれの戦い（後書き）

ついにレイリー登場！

第一十一説・後に島の伝説になる絶言（前書き）

はい、いつも読んでくれているみなさん、ありがとうございます！  
今回は重大なアンケートをとりたいと思います。

それはテラマキアを襲ってきたサカズキを

許すか

許さないか

のです。

これによつて今後の物語の展開が変わるかもしませんのでご協力  
お願いします！

## 第一十一説・後に島の伝説になる絶叫

「冥王レイリー……！」

突然現れた伝説の男に他の奴等も戦いを中断してこちらを見ていた。

「酷くやられたな、シャンクス。大丈夫か？」

「レイリーさん。どうしてここに……？」

「ははっ、いや実はな……」

何かを言いかけたレイリーに、サカズキ、クザン、ボルサリーノ三人の中将が瞬時に距離を詰めて一斉に攻撃を仕掛ける。

だが次の瞬間、いきなり三人ともぶつ飛んだ！！

え？

今、何したんだ？

「まつたく。せつかちな奴等だな。少しごらいの話もさせてくれないのか」

そう言うレイリーの手にはいつの間にか剣が握られている。

もしかして剣で三人とも弾き飛ばしたのか？

全然見えなかつた……。

いつ剣を抜いたかすら分からなかつたぞ！？

いや、それよりも後に大将になる三人をまとめてぶつ飛ばすとかどんだけ強いんだよ！

原作でもこんなには強くなかったはずだ！

そういうえば今は原作の22年前だつたな…。

原作より若いからまだそんなに力が衰えていないのか？

「なぜ貴様がここにいる…、レイリー」

センゴクが起き上がり、レイリーの方を向く。  
その姿はいつの間にか大仏になっていた。

あれが《ム》のセンゴク…。

威圧感が半端ない。

「ちょっとした野暮用さ。この場に居合わせたのはたまたまだ

「なら邪魔をするな」

「とは言つてもかつての仲間を見殺しにするのは私も寝覚めが悪い  
んでね」

そう言つてレイリーは剣を構える。

近づくことさえおこがましいと思わせる程の威圧感が彼から滲み出  
る。

「七武海にならないのであればその男を新世界に行かせるわけには  
いかない。ルーキーの中でただ一人霸氣を使えているのだ。放置し  
ておけば間違いなく我々の脅威になる」

「力づくか…」

センゴクは無言で構える。

「すまんが少年。そいつを出すつむづくくれないか?」

「え?」

レイリーが突然俺に声をかけてくる。

「頼む

「あ、ああ

やばい。

俺、海賊王の右腕に頼まれちやつたよ。  
ビービービービービンシャンクスには借りがあるからやるつもつだつたけど

「立てるか、シャンクス」

「ああ…、悪いなテラマキア」

俺の支えを受けながらシャンクスは立つ。

「走れるか?」

「なんとか

俺たちはこの場から離れるために走り出した。

センゴクが猛スピードで近づき、衝撃波を放ってきた。

「逃がすか…!」

やば……！

しかしその瞬間、衝撃波は横からきた圧倒的な圧力によつてかき消される！

「やらせはせんよ」

レイリーが剣を振るつたようだ。  
周りが更地になつてゐる。

今の衝撃波をかき消したのつて剣圧か……？  
どんな速さで剣振つてんだよ。

ありえないだろ……！

「レイリー……！」

センゴクは歯軋つする。

「さあ、早く行くんだ」

「助かつた！ ありがと、レイリーのおじさん！」

「すみません、レイリーさん……」

俺たちは駆けていく。

「セレノをどけ、レイリー！」

「つれないことを言つたな、センゴク」

レイリーは再び剣を構える。

「最近暴れ足りなくて少々運動不足気味でね。少し付き合ってくれないか？」

「今度にしろ……！」

「私は我が儘でね……。今がいいんだ……！」

レイリーが一気に距離を詰める！

今、世界最高峰の戦いが始まる

「ん~、効いたねエ~！」

レイリーにぶつ飛ばされたボルサリーノは数秒間意識がとんでいた。たった一撃でこの威力。

上には上がるものである。

「ん？ あれは……」

起き上がったボルサリーノが見たのは逃げている子供と《赤髪》の姿だった。

「八咫鏡」  
やたのかがみ

もちろん見つけたからには逃がすつもりは毛頭ない。が、突然ボルサリーノの前に地面からせりあがった土の壁が現れて光を阻んだ。

「やっぱり邪魔をするんだねエ、ガイア」

ボルサリーノが後ろを振り向く。

そこにガイアはいた。

「何故だい？　あの子を守るのは分かるけどもう片方の『赤髪』は君の嫌いな海賊だよオ～」

「あいつが助けたといふことは『赤髪』はいい奴だということだ」

「根拠は？」

「私はあいつを信じている。それだけだ」

「…………君も随分、変わったねエ～…………

「…………かもしれないな」

お互に構え合う

「まだやるのか？　『鷹の目』」

「……」

頭を掻きながら聞いてくるクザンに対しミホークはただ無言で黒刀を構えるのみ。

「『鷹の目』、お前『赤髪』のために命を落とすつもりか？」

「……私はただ奴との決着を、戦いをしたいだけだ」

周りの空気がはりつめる。

「ゆえに死ぬつもりなど毛頭ない…………！」

ミホークの纏う空気が明らかに変わった。

次の瞬間、ミホークは黒刀を振り抜き、

一閃

比類なき斬撃が地を薙いだ。

剣圧により地面が抉れる。

斬撃が完全に消え去った時、辺りは更地になっていた。

「ふいー、危ないね

クザンは辛うじて回避していた。

ただその頬からは一筋の血が流れていた。

「うつや、とんでもねえもん田覚めさせひまつたかな……」

鳴り響く衝撃音。

センゴクとレイリー。

彼らの戦いはそれはすさまじいものだった。

レイリーが剣を振るう度に何かが斬れ、センゴクが衝撃波を放つ度に何かが破壊されていく。

彼らの戦いは周りを確実に更地にしつつあった。

そして彼らの技がぶつかりあつと、世界はその衝撃に震える。

彼らの一撃、一撃は

地を裂き

海を割り

天を断つ

圧倒的な次元の戦いだった。

「ふふ、じとんに胸踊る戦いは久々だ」

「わっわと受け！ レイリー！」

「まだまだこれからだぞ、センゴク…！」

俺はシャンクスに肩を貸しながら走り続けていた。

中将による追撃が恐ろしいが今のところ、それはない。

ていうか俺はそれよりもレイリーとセンゴクの戦いが恐ろしい。

だってあんなに離れてるのに戦いの余波がこっちにまで届くんだぞ

！？

物理法則無視しすぎだろ！

とにかく一刻も早くここから離れないと…。

「あぶねえ！」

俺はシャンクスの言葉に反射的に反応してシャンクスを掴みながら飛び退いた。

一瞬遅れてしまふまで俺たちがいた場所にマグマの塊が落ちてきた。

「惜しきこのへ…。もづくでやれたのへ…」

そのマグマがサカズキの形をとつていく。  
またサカズキか！  
しつこすぎるぞ！

「もうやるやるくたばらんかい…！…！」

「う…」

お前がくたばれ！  
俺は人獣型になる。

「シャンクス、先に行け」

「なつ！ でも…」

「あんたには惜しがあるんだ。返さかれていたってことだらう？」  
「だけどあいつは中将…」

「いいから行け！」

「…分かった」

シャンクスは走り出さうとする。

「最初に言つたんだろ。絶対に逃がしはせんと……」

しかしその前にサカズキが立ち塞がる！  
その手はマグマに変わり膨れ上がっている。

くそつ、不味い！

俺はシャンクスとサガルキの間にシャンクスをかばう形で寄ってきて入る。

「はっ！ わざわざ死にに行くとは。二人まとめて消してくれるわ！」

カナヘイ

「大噴か…」「何をしておるんじやああああああああああ…！」

叫び声が響き渡る。

おおこおこ、この声つて…

貴様、わしの元ラマヰアに何をしておる!」「

サカズキが慌てて出しかけた技を止めて膝をつく。

「すみません、もしかしてトライキッドのせんじの子供ですか

?

うわ。

サカズキ、悔しさと屈辱が混ざって顔がやばいことになつてゐる。

「ナウル」

「それは失礼を…。まさか貴方様の奴隸とは思いませんでした」

「奴隸だと……？」

ピキッ

あ、  
キレた。

「え」

サカズキたちの後に島の伝説になる絶叫が木靈した。

第一十一説・後に島の説となる絶景（後書き）

アンケート待っています！

## 第一十一「説・戦いの終結（前書き）

みなさんアンケートに「協力いただき有難う」といました！なんと30件以上もの返事がありましてびっくりしました。こんなにたくさん来るとは思っていなかつたので作者は感謝感激です！

改めて有難うございました！

それでは結果発表である今回の話をお楽しみください。

## 第一十一説・戦いの終結

俺、テラマキアは歴史的瞬間に立ち会っていた。

それは皆の死ぬほど驚いた顔である。

シャンクスやミホークも驚いている。

あのレイリーすら口をあんぐりと開けて驚いている。  
特にすごいのが海軍サイド。

皆の驚き顔にさらに真っ青な色が加わった顔だ。

サカズキなんて驚きすぎて鼻水がちょっと垂れている。

例えるならああだ。

空島のエネルがルフィに雷が効かないと分かった時ぐらいだ。

やばい…。超痛快。

吹き出しそうだ…！

俺は必死で笑いをこらえる。

遠くで肩を揺らして笑いをこらえているガイアの姿も田に見えた。

漫画でも見たことがないぞこんな。

激レアだ！

「何とか言わんか、貴様ら……」

父様の一喝でみんなが我に返る。

「申し訳ございませんでした……！」

センゴクがいつの間にか父様の田の前にまできて土下座した。  
あれ？

さっきまであんな遠くにいたのに……。どんな速さだよ！

瞬間移動でも使えるのか？

「何のために貴様らを呼んだと思つてゐるんじや！ 海賊達を殲滅させるためじやうつ……それを何でわしの息子を殺そうとしておるんじやあ……。」

「返す言葉もいひこません……。」

三人の中将たちはなにも言わない。

自分が不用意な発言するよりセソゴクに任せるにしたのだろう。

「挙げ句の果てに我が息子を奴隸呼ばわりなどして……！ 覚悟は出来ているんじやうつな……ん？」

父様が言葉を止める。

何だ？

何か俺の方めっちゃガン見してるので。

そしてその表情がだんだん憤怒の形相へと変わり始めた。

え、何！？

何か俺悪いことした！？

ふと俺は父様が俺の体のある一点を見つめていることに気づいた。

その目線を追つていくとそこはサカズキのマグマにより若干表面が削りとられた脇腹、端的に言つと怪我した脇腹だった。

「貴様ひ……！ 傷つけたのか……！ 息子を……！」

「あ、いえ、それは……！」

サカズキが思わずしまったという顔をする。  
父様はそれを見逃さずサカズキを指さし、

「衛兵やれ！ やつてしまえ！！」

父様が衛兵たちに銃をかまえさせた！  
お、おいおい！

「ちよ、ちよっと待つた父様！」

俺は慌てて父様とセンゴクの間に割つて入る。

「な、何で邪魔をしおる、テラマキアー？ わしはお前のために今  
から」のべぐが出る程むかつくシリをしたこいつを殺してやります」と  
……」

「ちよがに殺すのはやつすぎだと思います、父様」

「何を言つておるー お前は」の男に殺されかけたんじゃぞ！？」

確かに父様の言つことは的を射ている。

俺だつて本音を言えばサカズキはあまり好きじゃない。  
原作でも色々ひどいことしていたしね。

だがそれはそれだ。

そもそもこの件に関しては俺が悪いのだ。

「元はと言えば私がこんな格好で外を不用意につぶついていたのが  
悪いのです。こんなどこから見ても下々民の子供を誰が天竜人だと  
思うのですか？」

「む……」

よし。

何とか怒りは鎮まつた。

後ろではセンゴクたちがあらぐりと口を開けてこちらを見ていた。  
まあ、当たり前か。

何せ自分たちが傷つけた天竜人が何故か庇ってくれてるんだもんな。  
そんな顔にもなるか。

「……しかしそれなら彼らは下々民に危害をえたことになるぞ?」

「それは私を傷つけた彼と出会つたのは無法地帯だからです。ただ  
の子供が普通はあんな場所にいるわけないですから海賊が何かと間  
違われても仕方ありません」

俺はサカズキの方を指さしながら囁く。

「それなら領けるの?……。ん? テリマキア、お前無法地帯に  
なんかに行つっていたのか!」

「あつ……」

やべ!

バラしちゃつた……!

「あれほど無法地帯には近づくなと言つておったのに! 驚き者め  
!」

「「」「」めさんなさい父様! お説教は後で聞きますから! あ、痛

い！ 拳骨は痛いです父様！」

俺は何とか父様を宥める。

「と、とにかく彼はただ自分の職務を全うしようとだけですか  
ら彼に非はありません」

「ふむ、事情は分かった……」

父様はゆっくりと膝をついているサカズキに近づく。  
そして銃を腰から取りだして銃口をサカズキの頭に押しつけた！

「父様！？」

「じゃが事情がどうであれこいつがわしの息子であるお前を傷つけ  
たのは事実じゃ」

銃を握る手に力が入る。

「親が子を傷つけられて許せると思つか…………！」

「ち、力が……！」

サカズキがぐつたりとしている。

「どうやら能力者じゃつたらしいのう。この銃は銃口が海楼石でで  
きている特注品じゃ。故に今、引き金を引けば貴様は死ぬ

センゴクは止めようにも天竜人に手をあげるわけには行かないので  
ただ黙つて見守ることしかできない。

ガイアも腕を組んでこちらを見ているだけ。

他の全員も展開の早さに付いていけず放心状態だ。

「父様！ やめて下わーー！」

俺は必死に語りかかる。

「…………」

「お願いです…………」

「…………」

「…………私は父様が人を殺すところを見たくはありません…………！」

「…………」

俺の言葉に反応したのか父様が一瞬震えたように見えた。

そしてじしまじまくじめくじめくじとサカズキにつきつけっていた銃口を下ろした。

「…………テラマキアに感謝するんじやな」

「有難うござります…………！」

センゴクが改めて土下座をした。  
よかつた…。

分かつてくれて。

「だからと書つてなにも処罰がなこと思わない」とじゅー。」

「……」

まあ、これ以上は庇いきれないな。

「処罰の内容については後日、話しあっての席を設けて決めるとする」

「……分かりました」

センゴクは深く頷いた。

あ、そうだ。

「もう一つ条件つけてもよいですか?」

全員が一斉にこちらを見る。

「何じゃ、トラマキア。お前が書つたらなんでも良いや。今回の件の被害者じゅかるの」

センゴクたちが固唾を呑んで俺を見る。

センゴクたちからしてみれば恐ろしいだらうな。

さりとまで庇つてくれた奴がいきなり条件とか言い出し始めたんだから。

「じゃあ遠慮なく」

俺は「ほんと一つ、咳払いをした。

「海賊『鷹の眼』のミホークと『冥王』レイリーと『赤髪』のシャンクス及びその一味をこのシャボンティ諸島にいる間は手を出さないでください」

「テラマキア……!?」

シャンクスやミホーク、レイリーが俺の言葉に過敏に反応した。

「……何故じや、テラマキア。何故海賊たちを庇つ?

「……彼らには恩がありますから」

「……そうか。ならいいじゃらつ」

そう言つと父様はセンゴクたちに向き直り、

「今のテラマキアの言葉、絶対厳守するんじやぞ」

「分かりました……!」

サカズキ悔しそうな顔してゐるなあ。

「あ、ガイアにも手を出したら駄目ですよ。私の奴隸ですか

「……もう驚くまいよ」

何かセンゴクが一気に老けた感じがする。

大丈夫かな?

その一部始終を見ていた皆はそれぞれ戦闘体勢を解いていく。

「ガイア、まさか君の言っていたことがまさか本当だとはね……」

「私が嘘をつかない」とは知っているだらう。

「あらら、何か唐突な終わりかただだつたな」

「フッ……」

「まさかこの年にもなつてこんなに驚くことがあるとは……。やはり世界はおもしろいな、ロジャー……」

「サカズキ……もう一度と見境なく攻撃するのはやめてくれ……」

「…………」

「トーラマキア、お前天竜人だったのか……」

「ああ、隠してて悪かつたな……、シャンクス

「トーラマキアの脇腹の傷を手当てせんとのう。衛兵、薬箱をー。」

はりつめていた空気が緩んでいく。

「元戦には終結した。

本当に

？

途端、俺は嫌な胸騒ぎに襲われた。

何だ。

もう戦いは終わったんだ。

何を今更心配する必要があるんだ？

……待てよ？

何か忘れている気がする。

「どうしたんだ、テラマキア」

シャンクスが俺の様子がおかしいことに気づいて声をかけてきた。

「いや、ちょっとな……」

「ふーん？ でも天竜人にテラマキアみたいないい奴がいたなんてビックリしたぞ！」

天竜人

龍

「…」

俺は忘れていた奴のいる方向に目を向けた。

瞬間、そこから轟音と共に巨大な青い龍が飛び出した！！

全員あまりに突然のことに対応できない！

龍は猛スピードで一直線に大人間オークション会場に向かい、そのまま入り口に突っ込んだ！！

途端、中から多くの悲鳴が聞こえた。

会場は龍の巨体が突っ込んだことにより崩れかかるが、会場の周りから突然生え出した何本もの大木が会場に絡みついて覆っていき、崩れずに持ちこたえた。

そこで皆がようやく我に返る。

「しまった！ 『神咲』のブルーか！」

「しかし奴はわしの攻撃で黒焦げになつたはずだ！」

「とにかくこじ開けて早く中に入らないとね！」

ボルサリーノが会場に向けて、指先からレーザーを放とうとする。

「駄目だやめる、ボルサリーノ！」

しかしセンゴクがそれをやめさせてしまった。

「何故止めるんですかい？ センゴクさん」

「今、あの会場はあの絡み付いた大木によって崩れずに済んでいる。  
もし不用意に攻撃して大木が折れたらその瞬間会場は崩れ落ちる…  
…！」

「……つまり容易に手出しが出来ないと？」

「…………そうこういとだ」

センゴクは頭を抱えた。

「何か大変なことになつてんな

暢気に言つシャンクス。

「トラマキア？ ビーじゅー！」

突然ゾディアックが叫び出した。  
皆そちらの方を向く。

「エリにあむ！返事をするんじや、トライマキア！」

辺りにはトライマキアの姿はなかつた。

「まさか…」

ガイアは会場を見る。

オーケーション会場内。

「ふう…。うまくいったな」

会場の中心にはブルーが立っていた。  
その体には一切の傷がない。

「…………」

会場内にいた貴族や天竜人たちは全員、会場の隅で突然現れた男に驚いている。

「でもまさかお前が来るとはな、クソガキ…！」

ブルーが後ろを振り返りながら言つ。

「クソガキ言つな……！」

そこにテラマキアはいた。

事件は本当の大詰めを迎える

## 第一十一説・戦いの終結（後書き）

実はまだ終わらなかつたりするんです。

第一十三説：一騎打ち（前書き）

シャボンティ諸島編クライマックス！

## 第一十三説：一騎打ち

オークション会場内。

「まさかお前が天竜人だとは思わなかつたぞクソガキ……！」

「聞いてたのかよ……！」

俺、テラマキアは《神咲》のブルーと周りに天竜人や貴族がいる中で対峙していた。

「……一つ聞きたいことがある」

「何だ？」

「あんた何が目的だ……？ わざわざこんなところに立てこもって何がしたい？」

そう、これが一番の疑問である。  
こいつにはもう既に父様を殴った罪があるから逃げられない。  
だから今更何をしようとも無駄なのだ。  
この行為も余計に罪を重ねるだけだ。  
ますます何がしたいのか分からない。

「……もうどうせ俺は助からないんだろ」

「……まあな」

「だから最後に一花咲かせようと思つてな……。天竜人を皆殺しに

して

「……」

会場に戦慄が走る。

「こいつ正氣かよ……！」

「下々民の分際で何を抜かすえー！」

会場に声が響き渡る。

「の声は…

「そんなことをすれば海軍大将が貴様を地の果てまでも追いかけて必ずお前を殺すえー！」

ロズワードさんか！

傍らには妻らしき天竜人の女性とその子供であるチャルロスヒャルリアが見える。

そんなロズワードさんの声を聞いて会場から口々にそうだーそうだーとか死にたいのかーなどの声が飛び出してきた。

「だからせつかも言つただろ？が。俺は助からない。大将はすぐ外にいるから」

「ならば話は早い。貴様はもうすぐ捕まるやー！」

ロズワードさんが勝ち誇った顔で叫びた。

「でも期待しない方がいいぞ。あいつらは簡単にここに入つてこれないから」「

「なつ……」

「ここは俺が入つてきた時にもつ既に崩れかかっているんだ。それを俺の能力で補強して何とか保つてゐみたいなものだ。だから無理に扉をこじ開けようとするとそれだけでペシャンコだ

つまり外からの助けは期待できな<sup>いづれ</sup>にここからの脱出も無理と  
いうことか…。

「でもまあ、いずれ何らかの方法でやつてくれるとは思つがお前らを皆殺しにするには十分すぎる時間だ。ついでに貴族もやつちやつて奴隸解放しようか？」

会場にいる天竜人や貴族たちの顔は絶望に染まつていくのに對して、その奴隸たちの顔は希望に満ちていく。

「あほかお前。俺がそんなことさせるとでも?」

会場にいる奴等が全員こぢらを振り向く。  
何か圧巻。

「その声に顔…。もしゃテリマキアかえ!?」

「はい、わつですよ。ロズワードねえ

つて今更気づいたんかい！

まあ、俺は今、防護服もシャボンもしてな<sup>いづれ</sup>にさしきの戦闘で

ボロボロだからね。  
仕方ないか。

「やつぱり邪魔をするか……」

「当たり前だろ」

まあ、俺は父様と母様以外の天竜人はあまり好きじゃないんだけど、さすがに皆殺しにされるとなれば黙つてているわけにはいかない。

「テラマキアお前、死ぬつもりかえ！？」

ロズワードさんが心配してくれる。

下々民に対しては厳しいけど案外天竜人の中では温厚で優しい人なのだ。

「大丈夫ですよ。ロズワードさん。俺は鍛えてますから

ロズワードさんがは？という顔をする。  
いまいちピンときていらないらしい。

「おー、あんた！ 皆殺しにするならまず俺と勝負してからこじり  
ー！」

「何…………？」

「あの時は邪魔が入つて途中で終わってしまったけど今なら存分に  
鬪れるぞ」

「…………」

ダメ元で提案してみる。

「……いいだろ？　お前も天竜人だからさのまちやるつもつだったし、確かに俺も決着をつけたい」

お、乗ってきた。

言つてみるもんだな。

「何よりお前は何かむかつく」

「奇遇だな。俺もだよ」

俺は軽く足を屈伸をしながら答える。

「おー、お前らー。巻き添え食いたくなかったら舞台上に行け！」

会場にいる奴等がブルーの言葉を聞いて我先にと舞台上に上がる。

「何を……？」

「邪魔は少ない方がいいだろ？..」

会場にいる全員が舞台上に上がったのを見るとブルーは

「？五行の木？檻壁」

能力で舞台と客席の間に檻状の壁を作つて空間を隔てた。

へえ。

律儀なやつだな。

案外そこまで悪いやつじゃないのかもしれない。

「おい、聞こえるか、テラ！」

その時、会場の入り口の扉、今は扉が壊されて絡み付いた大木で閉ざされているが、そこから声が聞こえてきた。

「その声はもしかしてガイアか？」

「やつぱりそこにいたか、テラ」

「テラマキア、無事か！？」

「ちよ、ちよとむとむとむとむ！ 押さないでくださいよー。」

「ひつやら父様が俺の安否を心配してガイアを押しのけて聞いてきたらしい。

「ははっ！ 大丈夫です、父様。安心してください」

「や、そうか。よかつた…」

つぐづく心配性な父様だ。

でもだからこそ俺は父様が大好きなんだ。

「中の状況はどうなってる？」

再びガイアが聞いてくる。

「ああ、どうやらブルーは自分が逃げられない」と悟ったせいが天竜人たちを皆殺しにしたいらしい

「なつ……！」

向こうにいるガイアたちが絶句しているのが分かる。

「でも俺が奴と決闘するように持ちかけたから今すぐには皆殺しへられない」

「……………」

「だからお願ひがある」

「何だ？」

俺は一息つく。

「助けはない。手出し無用でお願いする……！」

「……！」

向こうが俺の言葉でざわついているのが分かる。

「ダメじゃ、テラマキア！ わしが認めん！」

当然父様は断固反対していく。

「分かってください父様！ もし戦っている最中に邪魔が入れば奴は最優先の目的である天竜人の皆殺しを実行してしまうかもしれな

いのですー。」

「……ツーーー！」

父様は俺の言葉に思わず詰まってしまう。

「心配しないでください。俺が勝てば万事解決ですから」

「じゃが…」

「勝てるんだな？」

父様の言葉を遮ってガイアが俺に聞いてきた。

「……当たり前だろ。あなたの弟子だぞ！」

「……そうだな。なら私は弟子の勝利を信じて待つとするか

「ど、どこへ行くのじゃ、ガイアー！」

ガイアが扉のそばから離れていくのが分かつた。

「おー、何か大変なことになってるみたいだなー！」

「シャンクス！？」

「何かよくわからんねえけど勝てよ！　俺たちを助けてくれたお礼の宴、準備して待ってからさー！」

まさかシャンクスが応援してくれるとほ…。

「……ああ、必ず！」

俺は深く頷いた。

「トライマキア聖殿」

「この声はヤングロクさん？」

「はい、数々の『無礼』をしたのにそれを庇っていただき、本当にありがとうございました」

「いやいや、気にしなくていいよ。元はといえば俺が悪いんだしね」

「今回の件についてはあなたの危惧していた事態が起つたる可能性があるので我々海軍が介入することは非常に難しいです。だから恥を承知で頼みます」

センゴクはそこで一拍おいて

「勝つてください……！」

そして言った。

「分かつてますよ

何か未来の海軍元帥に頼まれちゃったな。  
まあ、言われなくても勝つつもりだ。

「トライマキア……！」

再び父様の声。

「お前本当にやるつもりつかの……？」

「はい。必ず勝ちます」

「しかし……」

「父様。私はあなたの息子、テラマキアです」

「……」

「息子を信じてください

「……」

黙つてしまひ父様。

「…………子供にそこまで言われて親が信じないわけにはいかないのう

「父様…………」

「必ず勝つさじやぞ……！ テラマキア！」

「はい……！」

「話は終わったか？」

見るとブルーは既に戦闘準備を終えていた。

周りの壁にさつきより大木が絡みついている。

「念のため補強をせてもうつた」

「あんた本当に律儀だな」

俺も構えて戦闘体勢をとる。

「おめでたさ」へ

それと同時にブルーは俺に飛びかかってきた。  
速い……！

舞台から悲鳴が上がる。

従かやられるとても思つたのだが、  
しかしあおいにく様。

それにこいつには一言いこたいことがある。

一  
細  
重

俺は反射神経でひらりとブルーの拳をかわしてその腕を掴む。

11

「一回、あなたに会っておきたかったのがある」

俺は拳に力を込める。

何で俺が白虎なんだよ！

普通は天竜人である俺が龍だろ？が！  
調子のつてんじやないぞこらーーー！

俺は大声とともに完全なる私怨を込めた拳をブルーの頬にぶつけ  
ぶつ飛ばした！！

ブルーは轟音とともに客席に突っ込む！

舞台の人々は突然の大声と俺の強さに驚いている。

「あー、すつきりした！」

「意味分からぬ…」

ブルーがガラガラと音をたてながら瓦礫と化した客席から出でてくる。

「まあいい。今度こそ草木の肥やしにしてやるわ…」

「絶対泣かす…！」

第一十三説：一騎打ち（後書き）

次回、いよいよ青龍と白虎のガチバトル！

## 第一十四説・白虎テラマキアーヴ青龍ブルー（前書き）

青龍と白虎のガチバトル！

これからテスト一週間前だから更新が遅れるかもしませんがご了承ください。

## 第一十四説・白虎テラマキアムVS青龍ブルー

「ふんっ！」

「鉄塊！」

ブルーが俺の脇腹を殴つた瞬間、鈍い音が響く。

「つーーー！」

ブルーは拳の痛みに顔を歪めて一瞬、硬直する。

「指銃！ー！」

俺はその隙を見逃さずに奴の脇腹を田掛けて指銃を繰り出す。

「ーーー！」

しかしブルーは反射的に足で俺の腕を蹴りあげて指銃の軌道をずらした。

「くつーー！」

そして後ろに飛び退いて距離をとる。

「セセセルカ！ 嵐脚？ 地走り？ーー！」

俺の神速の蹴りから出た斬撃が地を這つてブルーに迫るー。

「ちつ。？五行の木？壁木！」

ブルーの前に突然、木製の壁が地面から競り上がって斬撃を防いだ。

「変な体術使いやがって、クソガキが……！」

「クソガキ言うな！」

俺、テラマキアはオークション会場にてブルーとの激闘を繰り広げていた。

とは言つてもまだお互いに人獣型にすらなつていなが。  
でもあいつ人型なのに五行の力を使つていたな……。  
俺も頑張れば使えるつてことかな？

「…………！」

舞台にいる人々は俺たちの戦いを見て、ただただ驚くばかりである。  
そりやそうか。

天竜人の子供が億超えの賞金首と互角以上に渡りあつてるんだから  
な。

天竜人が戦つているというだけでもあり得ないのに。

「……お前何で天竜人のくせにそんなに強い？」

「あ？ 天竜人が強くて悪いか？」

「……お前の言い方はいちいちムカつくな……！」

ブルーが青龍の人獣型へと姿を変える。  
いよいよ能力を使ってくるか…。

ならばこちらも…！

俺は人獣型へと姿を変えた。  
舞台の方から悲鳴があがる。

あ、そういうえば俺が悪魔の実の能力者だつてことは何かと不都合だから バラしてはいけないって父様が言つてたな。  
なるほど。

今ならその理由がよく分かる。

「ば、化け物…」

「恐ひしや…」

舞台上にいる人々は貴族や天竜人に関わらず怯えた目でこちらを見て  
いた。

「報われないやつだな…」

「同情はいらない」

ブルーは憐れみの感情でこちらを見てきたが、俺はそれを突っぱね  
た。

「ならば遠慮なくいかせてもらつ

言い知れない圧迫感が俺を襲つた。  
肌で分かる。

サカズキ程じゃないけどこいつ強い…！

「？五行の木？青縄…！」  
あおなわ

瞬間、ブルー周りの地面から草のツルが飛びだして俺に迫る！

「つおつー！」

俺は瞬時その場を飛び退く。

ツルはさっきまで俺のいた場所に勢いよく突き刺さった。  
おいおい…。

ツルって突き刺さるもんなのか？

俺はそのまま距離をとろうと後ろへ跳躍する。

が、何かに引っ掛けられて遮られた。

「なつー！」

それはツルでできたネットだった。

ゴムのようにしなやかな性質だったらしく俺が勢いよく引っ掛けたせいでその反動で俺を前へと押しだそうとしている。  
そして目の前にはいつの間にかブルーが迫っていた。

「しまつー！」

勢いよく前へと押し出される俺。

そこにブルーの拳が脇腹へクリーンヒット！！

「……！」

前に押し出された勢いが加わった威力は半端ない。

俺はそのままぶつ飛ばされて壁に絡みついた大木に激突した。  
いってえ……！

舞台から再び悲鳴があがる。ブルーはさらに追撃する。

# 「五行の木？大木掌！」

地面から巨大な大木が俺を日掛けて突き出してくる。  
俺はかろうじてそれをかわす。

しかし大木の側面からいきなり枝が勢いよく生えてきて俺に突き刺さった！！

二二二

ありかそんなの！？

「なんて恐ろしい光景……！」

一化け物同士で相討ちしてくれないかえ？」

そんな声が舞台から日々飛び出す。

突然大声が響き渡った。

「せつから聞いていれば好き勝手に言いよつて…」

ロ、ロズワードさん？

「あの子は、テラマキアは私たちのために戦ってくれておるんだえ

「……」

「化け物だろ？と何だろ？関係ないえ……」

「侮辱する奴はこの私が許さんえ！……」

舞台から飛んでいた声はピタリと止んだ。

「テラマキア…… そんな下々の者に負けるんじゃないえ……」

……頼もしい人だな。

俺は立ち上がる。

ありがとう、ロズワードさん。

「がんばれーー！」

「勝つてくれー！」

そのかわりに応援の声が聞こえてきた。

「まさか天竜人のくせにこんなことがあるとはな……」

「あるわ。俺たち天竜人だつて人間さ」

「そりや初耳だ……」

ブルーの近くの地面からツルが飛びだして俺に巻きついた。  
そしてツルを引っ張つて俺を引き寄せる。

「おわっ！」

そしてそのままブルーは回転する。  
どうやら尻尾で俺をなぎ払つもじらひして。

「？五行の金？物体硬質化」

俺はツルを硬質化させる。

ツルはそのまま形を保つたために俺は尻尾が当たる直前で急停止する。

「なつ！」

ブルーは攻撃する目標を失つて思わず体勢を崩す。

俺はすかさず硬質化を解いて巻きついたツルをうちきつた。

「嵐脚？白爪？！」

そしてそのまま至近距離で白虎の鋭い爪から強力な斬撃を繰り出す。  
断然かわせる道理はない。

「ぐおつ…！」

肉の切れる小気味良い音。

ブルーは斬られた胸を押さえながら後ろに飛び退いた。

舞台から歓声が聞こえた。

「こつまでもやられてると思つなよ…」

「ちひ、少々なめすぎていたか。だが…」

ブルーは胸を押さえていた手を離した。

「…………？」

おこおこ、嘘だろ…！

何でいまさつきつけた傷がまづふさがりつつあるんだよ…？

「五行の木の真髓は？成長？細胞の活性化だ」

「……なるほど。つまり細胞を活性化させて驚異的なスピードで傷を治癒させているというわけだ。あのときマグマを食ひ込んで黒焦げだったのに立ち直ったのはそういうわけか…」

「さうだ。だからお前の勝つ確率はゼロだ、クソガキ…！」

「あんたが勝手に俺の勝ち負けを決めるな！」

俺は剝で一気に距離を詰める。

「？五行の金？右腕硬質化

「？五行の木？青竜刀」

「指銃？白弾？！」

「まつー。」

ブルーの出した木製の鋭い薙刀は俺の肩に突き刺さり、俺の能力で強化した指銃はブルーの脇腹に突き刺さる。

「……っ！」

「くつ……！」

お互一歩も引かない。

「嵐脚？白迅？！」

「？五行の木？青竜槍！」

袈裟懸けに繰り出した蹴りの斬撃でブルーの胸に深い切り傷を負わせるが代わりに木製の槍で左足の脛を貫かれた。

「くそっ……！」

足をやられて体勢を崩してしまつ。  
相手はその隙を見逃すわけがない。

「？五行の木？青竜刀乱舞！…！」

地面から次々と木製の薙刀が飛びだして俺に突き刺さる…！

舞台から甲高い悲鳴が聞こえた。

やばい…！

痛みで意識がどびそうだ…！

だがここで諦めたら奴に与えたダメージが全て無駄になる…！

俺は残った右足でおもいつきり踏み込んでブルーに突っ込む。

「……」

「？五行の金？両腕硬質化！」

食らえ！――

「指銃？臼砲？！――」

残った力を振り絞って俺の最強の技を繰り出す。

「……」

ブルーは突然の不意打ちに反応できず、モロに食らってぶつ飛んだ！  
そして壁に激突する。

「やつた……か……！」

瞬間、横から突然飛び出してきた大木に俺は弾き飛ばされた。  
そして舞台と客席を隔てている木製の檻状の壁に激突する。

「トラマキア！」

ロズワードさんの声が聞こえた。

何とか立ち上がる。

くそ……！

さすがに体がもう……！――

「だから言つただろうが。お前の勝つ確率はゼロだって」

ブルーがゆっくり歩みよつてくる。

その胸の傷は完全にふさがっていた。

「まあ、よくがんばった方だ。ゆつくり休め」

「貴様テラマキアを離せ！－！」

「？五行の木？大木封印」

地面から出た四つの大木が俺を四方から押し潰すように当たる！

「がはつ……！－！」

あばらが……！

「破」

ブルーがそう言い放つた瞬間、四つの大木から無数の枝が鋭く生え  
出して俺に突き刺さった。

「テラマキアアアアアアアアア！－！」

ロズワードさんの絶叫が聞こえたような気がした。



第一十四説・白虎テラマキア vs 青龍ブルー（後書き）

敗北してしまったテラマキア。  
どうなる…？

## 第一十五説・戦う理由（前書き）

更新が遅れています！

テスト前なものでなかなか執筆ができません。

来週の土曜日にはテストが終了するので前の更新速度に戻ると思います。

## 第一十五説・戦う理由

オークション会場内。

テラマキアとブルーの死闘により所々が壊れているその場所はある負の感情で満たされていた。

それは絶望。

舞台上にいる人々は物言わぬ骸と化したテラマキアを見て誰もがその感情を露にしていた。

それは例えるなら暗闇の中に見えた一筋の光明がさらに真っ黒な闇に塗り潰されたようなものである。

対して奴隸たちは心の内から沸き上がりてくる笑みを抑えるのに必死だった。

自分達が奴隸から解放されるのはもちろんだがそれ以上に天竜人がボコボコにやられたのがいい気味だったのだ。

彼らはいずれも全員天竜人に憎悪を抱いていたから例えそれがまだ子供だったとしても関係なかつた。

子供は子供でも天竜人なのだから。

「「」苦労様つと……」

自分がズタズタにしたテラマキアを見ながらブルーは言った。

「許さんぞえ……！　貴様！」

そんなブルーをロズワードは怒りを込めて睨み付ける。

「おいおい、お前立場わかつてんのか?」

ブルーは首を「キキキと鳴らす。

「お前これから死ぬんだぜ?」

ブルーが放った濃密で圧倒的な殺氣。

「つーー!」

それを受けてロズワードどころか会場にいる人々全員が怯み、顔が恐怖に染まる。

「そうだな……。まずは最初に俺に上等決めてくれたお前だな

ブルーはロズワードを指差した。

「俺の理不尽な人生の最後のハッ当たりってな……」

「大丈夫かの?……? テラマキアは……?」

「安心してください。テラは強いですから」

オークション会場から少し離れた場所。

そこにゾディアックとガイア、冥王レイリーに海軍大将センゴクと三人の中将たちがいた。

シャンクスは宴の準備で、ミホークはどこかに行ってしまったここにはいない。

「わははは…。まさかお前の田の前でのんびりと酒が飲めるとは思わなかつたぞ、センゴク」

「…………」

不機嫌なセンゴクを前にしてレイリーはどこから持ってきたのか酒瓶を片手に上機嫌だ。

「ほり、お前もそんなムスッとしてないで一緒にどうだ?」

「いらん!」

センゴクが不機嫌になるのも当たり前である。

何せ今は天竜人であるテラマキアが戦っている最中なのだ。  
勝てばいいのだが負ければ天竜人の皆殺しは必至。

大将と中将三人もいながらこんな事態を引き起こしてしまったこと  
自体も十分失態なのにさらに天竜人の皆殺しまでされてしまえば海  
軍はどうなるか……。

考えたくもないだろう。

さつきからこのことがセンゴクの頭を占めていて気が気でないのだ。

「すまん、センゴク。わしがあの時完全に済しておれば……」

「今さらグチグチ言つたつて仕方ないよオ、サカズキ」

センゴクに詫びるサカズキを諫めるボルサリーノ。

「そうだぞ。なつてしまつたものは変えられない。それに責任はお前一人にではなく、油断していた我々全員にあるのだからな」

ふと、氣づく。

「クザンはどうだ？」

「むひ、そういえば……」

「せつきまでここにいたのにねエー」

辺りを見回してみると  
そして見つけた。

「おひ、この酒うまいねレイリーさん」

「ほう、分かるか。なかなかの酒通だな」

「クザアアアン……」

センゴクの怒声が響いた。

「暢気な奴等め…。海軍に限っては恩人であるテラマキアが戦つておるのになんだあの態度は！ 少しごらい心配せんのか！」

「まあまあ、落ち着いてください。おとづさん」

センゴクたちを見て憤慨するゾディアックをガイアは宥める。

「ガイア、本当にテラマキアは大丈夫なんじゃな？」

「はい」

「…………わしに氣をつかわんでいい。包み隠さず申せ」

「…………」

しばしの沈黙が流れれる。

「……正直なところを言つと分かりません」

「そうか…」

「客観的に見ればむしろ負ける確率が高いです

「……」

ゾディアックは非難と憎しみを込めてガイアを睨み付けた。

「でも私はあいつが勝つと信じています

「……根拠は？」

「あいつが、テラが勝つと言ったからです」

「……」

ゾディアックはその言葉を聞いて顔を緩めてフツッと笑った。

「…………わしも信じると言ってしまったし、どうりで後には引けんしのう」

そして二人してオーディション会場を向く。

「絶対勝てよ、テラ」

視界が暗い

俺はいったい

ぼんやりとした意識の中、俺は頭を追つて思いで出していく。

そうだ

俺は戦っていた

『神咲』のブルーと

何かを守るために

たぶん父様と母様だらう

だつて俺が強くなつたのはそのためなのだから

ぼんやりとした意識が徐々に覚醒する。

それと共に猛烈な痛みまではつきりしてきた。

そういうえば俺はどじめを刺されたんだつけ

?

無理に動いて激痛を感じないようにそつと体を見る。

俺を押し潰すかのようにしている大木から無数の枝が生えて俺に突き刺さつていた。

しかし実際突き刺さつていたのは十数本である。

その中でもしつかり刺さつているのは僅か數本だつた。

殆どの枝は俺に刺さる直前でポツキリと折れていた。

恐らく攻撃を受ける瞬間、無意識に能力を発動して全身を硬質化させたのだろう。

しかしそれは不完全なものだらう。

もし完全であれば一本も刺さるはずがない。

今まで自身の体で硬質化できたのは両腕だけだつたのだ。  
いかに命の危険が迫つてできなかつた全身の硬質化ができても不完全なのは当たり前だ。

しかし結局動くことはできない。

枝が刺さった云々の前に大木に四方から押さえつけられて全く身動きがとれないのだから。

不意に強烈な殺氣を感じた。

傷を痛めないようにゆっくりと顔をあげてそちらを見る。

そこにはたぶん殺氣の主であるブルーと木製で檻状の壁を隔てて沢山の貴族や天竜人たちがいた。

天竜人

?

そうだ、思い出した

俺は天竜人の皆殺しを防ぐためにブルーと戦つっていたんだ

あれ？

どうして俺は天竜人なんかのために戦っているんだ

？

俺は父様と母様をマリージョア襲撃事件から守るために強くなつたんだ

それがどうしてほかの関係ないクズの天竜人たちを守るために深手を負うほど必死になつていたんだ

？

彼らには助ける義理も何もない

むしろこのまま皆殺しにされたほうが世の中のためじゃないか

？

だつて彼らは父様や母様と違つて平氣で人を殺す

自分に触れただけでも殺す

目の前を横切つただけでも殺す

意見を少し述べても殺す

挙げ句の果てにムカついたから殺す

権力を笠に着て傍若無人で傲岸不遜で暴虐の限りを尽くす

世界の害悪ハリ

冷静に考へると彼らを守る必要なんてこれっぽっちもないのだ

皆殺しにされるべきなのだ

うん、そうだ

それが世界のため

「うわあああああああああん！！」

突然、子供の泣き声が聞こえた。

「わああああああああん！！」

それはロズワードの妻に抱かれたチャルロスだつた。

「あああああああん！！」

他のあちこちからも子供の泣き声が聞こえてくる。  
さつきのブルーが放った殺気の影響だろう。

ああ

何て馬鹿なことを考えていたんだね？

天竜人の子供たちの泣き声

それは普通の子供たちと変わらない

天竜人だからといって関係ない

嬉しいことや乐しいことがあれば笑う

悲しいことや怖いことがあれば泣く

優しくて親切してくれる人もいる

残酷で悪い人もいる

何も人と変わらない

天竜人が悪なわけじゃないんだ

どうしてこんな大切なことを忘れていたんだろう

でも一度と忘れない

体の奥底から何かが沸き上がってくる。

だから戦おう

彼らの未来を

沸き上がる何かは俺を満たした。

守るために

そして俺はそれを解き放った。

俺が放つた殺氣のせいで会場にいたガキどもが一斉に泣き出しあがつた。

「わああああああん！！」

煩いつたらありやしない。

俺に上等かましてくれたこいつは後回しにしてガキからやるか？

瞬間、すさまじい轟音と共に衝撃波が後ろから俺を襲つた……！

「…………！」

突然のことを受け身もとれずに壁に激突する…

いつたい何が……？

「なつ…………！」

俺は目を疑つた。

会場内に強烈な風が吹き荒れていののだ。

もはやそれは暴風の竜巻。

その竜巻は俺が天竜人のクソガキにとどめを刺した大木をバラバラにして巻き上げていた。

「…………もう迷わないさ」

そしてその中にあの忌々しいクソガキが立っていた。

「さて、一回戦を始めようぜ」

第一十五説・戦つ理由（後書き）

次回、いよいよ決着！

## 第一十六説・長い一冊の終わり（前書き）

みなさんお久しぶりです！

ようやくテストが終わつた！！

執筆できる！

とはいってもひねりしぶりに書いたらちょっと手間ビリちゃつた。

これからまた徐々に慣らしていくと思います。

それでは長らくお待たせいたしましたシャボンディ諸島編の完結話をお楽しみください。

## 第一十六説・長い一日の終わり

会場内に暴君のよう荒れ狂ひ龍捲。

その勢いは全く衰えるところを見せない。

その中心には止めを刺されたはずの俺は人獣型になつて超然として立つていた。

無事である俺の姿を見てロズワードさんが感情が極まったのか涙声で俺の名を呼んだ。

俺をというより俺に渦巻く竜巻を見て、だろうが。

しかしネーネの実モテル?白虎?に風を操る能力があるのは分か

むしろ五行の金よりこっちの方がメインなんぢやないのか？

「フソガニ、お前ミジ一助ナ二つハ

ブルーがそれだけで虫を殺せそ<sup>う</sup>な程の威圧を込めて俺を睨んでいた。

「あのまま寝てればいいものを……」

ブルーは再び人獣型になる。

「いいだらう。完膚なきまでに叩き潰して草木の肥やしにしてやる」

「残念だけど、」

俺は荒れ狂つっていた風を自分の周りに収束させた。  
端から見たら風がなくなつたよつに見えているはずだ。

「あんたは俺に勝てないよ」

それは直感だつた。

さつきはあんなにボロボロにされて負けたのに何故か今は不思議と  
負ける気がしなかつた。

「へえ…。ずいぶんな自信だな。つこさつき俺にやられたのこもつ  
忘れたのか?」

奴の周りの地面に亀裂が走つている。  
恐らくあそこからあの大木が出るのだろう。  
わざわざ待つてやる必要もない。  
こちらから先手を仕掛けてやろう。

腰を落として体勢を整えてから俺は跳んだ。

「！－！－？？」

次の瞬間、俺は驚異的なスピードで一瞬にしてブルーに近づき、そ  
の顔面に膝蹴りをぶちこんでやつた。

予想もしなかつた攻撃にブルーは口クに防御もとれず、吹っ飛んだ！

速さはそのまま攻撃の重さに比例する。  
驚異的なスピードは驚異的な威力を生み出す。

「つ……！」

吹っ飛んだブルーは壁に激突した。

大木に補強されたおかげで今までどんな衝撃を受けてもビクともしなかつた会場がミシリと音をたてて揺れる。

「…………てめえ、本当にさつきのクソガキか…………！」

疑うのも無理はない。

死に損ないだつた奴がありえない速度で動いたのだから。夕ネ明かしするとさつきのは足の裏にあの風を圧縮させてから解き放ち、その反動によりあんなスピードで動けたのである。

「くそつ！ 調子に乗るな！」

ブルーの声と共に地面から次々と大木が突きだして俺を押し潰そうと迫つてくる！

「ふう…………」

俺は心を落ち着かせて神経を研ぎ澄ます。

「紙重」

そして大木の一つが俺に当たる瞬間、反射的にその大木の上に飛び乗つた！

「なつ！？」

そしてそのままブルーを目指して大木の上を走り出す。

「ちいっ！」

ブルーが俺に手をかざすと前から両横から大木が俺を狙って突きだしていく。

しかしそれら全てを紙一重でかわしつつ、俺は着実にブルーへと近づいていった。

「させらるか！」

後一步のところで俺にツルが絡みつけと地面から飛び出してくれる。

「邪魔だ！」

俺はツルが絡みつく前にあの風を操ってツルをバラバラに斬り捨てた。

「くそがつ！！」

ブルーはツルを斬られるやいなや自分の前に何本もの大木を作り出して俺の攻撃に対し防御姿勢をとる。

「？五行の金？右腕硬質化

俺は能力で腕を硬質化させると同時に指先に風を圧縮させる。

「指銃？圧風白弾？！？」

俺の指銃はブルーが防御のために出した大木を全て叩き折り、ブル

一へと貫通した!!

「……」

大木のせいで威力が弱まつてぶつ飛びこそしなかつたが、ブルーは致命傷を受けていた。

ブルーは傷を癒そうとして後ろに飛び、距離をとろうとする。しかしそんなことをみすみす見逃すわけにはいかない。

「？五行の金？両腕硬質化

俺は硬質化した両腕の指先にさつきと同じように風を圧縮してさりに足の裏にも圧縮させた。

ブルーの方を見る。

そして足の裏に圧縮させた風を解き放ち、一直線へとブルーに向かつて驚異的な速さで跳んだ。

「！？」

ブルーは慌ててかわそうとするが間に合わない。

「指銃？旋風白砲？！？」

「……」

圧倒的で強烈な一撃。

指尖に骨が折れた感触が伝わつてくる。  
そしてブルーは為す術もなくぶつ飛んで地面へとめり込んだ。

俺は地面へと着地する。

ブルーがめり込んだ地面からは何の動きもなかつた。  
舞台から歓声が上がる。

「やつたぞ！」

「助かつたんだ！」

「終わつたのか…………？」

「グオオオオオオオッ！！」

瞬間、雄叫びと共にブルーがめり込んだ地面から青龍が飛び出して  
きた！

舞台の歓声が悲鳴に変わる。

「ちつ、……俺つてやつは……最後まで……ついてねえな……」

しかし青龍となつたブルーの体は致命傷だらけで治癒が追いつかず  
満身創痍だった。

「俺の治癒もこんな傷じやすぐには治りねえ……」

そんなブルーの周りから数えるのも馬鹿らしい程の大木が突きだし  
てこちらを向く。

大木はいずれも先が鋭く尖つている。

「だがこの勝負だけは負けられねえ……」

ブルーもどぐろを巻いてこちらを睨み付けてくる。  
どうやらこれで決着をつけるつもりらしい。

「…………？五行の金？両腕硬質化

俺は両腕を硬質化してから指先に風を圧縮し、腰を落として迎え撃  
つ体勢をとる。

「終わりだ、クソガキ……！」

「クソガキ言うな……！」

ブルーは若干溜めてから、

「？五行の木？千青龍槍！……！」

そして大量の大木の槍と共に一斉に俺を目掛けて突っ込んできた！

「指銃？旋風白砲？！……！」

それを現時点最強の技で迎え撃つ！

そして激突  
！――！

すさまじい衝撃波が会場を揺らす！――！

いくつもの大木の槍と青龍の突進。

白虎の能力と圧縮した風の全力の突き。

その威力は拮抗していた。

しかし徐々に俺は押し負けつつあつた。

۱۷۰

本来なら拮抗するはずの力。

故に生まれたその差は俺に無いもの  
積んできた経験の違った二つ

「うあああああああーー！」

「ヘリコ...」

さらに劣勢になる。

## 俺の負け

! ! !

「負けるなあああーー！」

「いえええーー！」

そうだ。

俺は守るつて誓つたじやないか！

掛けたまるか！

勝てる、勝てないじゃない……

……勝つんだ!!!!!!

「う……」

俺は刺さっている右手の指を抜いて瞬時、風を圧縮してもう一度刺した！

「……」

次に左手も同じように抜いて瞬時、風を圧縮してもう一度刺す！

「……」

さうして右手、左手と交互に同じことを繰り返してその間隔を狭くしていく。

「うううううううううう……」

猛烈な指銃の嵐！

「うおおおおおおおおおお……」

あいつたけの力を込めて叩き込む……

叩き込む……

叩き込む……

「ああああああああ……」

もはやブルーを完全に押し返してくる……

「ぶつ飛べえええええ！」

そして俺はとどめの一撃を放つ！

「指銃？烈風白蓮？！？！」

「さつきからひどく揺れておるが大丈夫かの？？」

「あいつは必ず勝ちますよ」

オーケーション会場の外。

ひどく揺れだした会場にガイアやゾディアック、レイリーにセンゴク、三人の中将たちは全員、注目していた。

そんな中、一際会場が大きく揺れたかと思うと突然、風の竜巻と共に巨大な龍が会場の入り口辺りの部分をぶち破ってぶつ飛んできた！！

「…………！」

龍は地面に落ちる間にシュルシュルと縮んでいつて人の形となつた。

「こいつは《神咲》のブルー……」

センゴクはその人を見て言った。

「つまりテラマキアが勝ったということじゃな……？」

「そういうことです」

ガイアからその答えを聞いてゾディアックの顔は徐々に笑顔になつていく。

「でもあんな出方したら会場が崩れちゃうんじゃないのかい……？」

ボルサリーノの言葉に一斉に会場の方を振り向く。  
しかし会場は崩れてはいなかつた

半壊したオーケーション会場内。

俺は人獣型のままで膝をついて床に手を当てていた。  
そう。

会場が崩れないのは俺が能力を使って硬質化して会場の形を保つて？いたからである。

ブルーが入り口をぶち破つてぶつ飛んでいった瞬間、床に手をついて能力を発動させたのだ。

とは言うもののもはや俺の体力も限界だ。

早く逃げてもらわないと……。

「全員、ここから逃げて！」

しかし全員、戦いが終わって気が抜けたのか放心している。

「早く！」

俺の怒声によつやく反応して動き出す。

幸い木製の檻の壁は俺とブルーの技のぶつかつた時の衝撃波で壊れていたので逃げるのには手間取ることはなかった。

「ありがとう！」

「助かりました」

「感謝するえ！」

貴族や天竜人たちが俺のそばを通りすぎると同時にお礼を言つていいく。

「テラマキア、お前も早く逃げるえ！」

ロズワードさんも声をかけてくれた。

「……すみません、ロズワードさん。後で俺も行きますんで……先に行つてください」

でも俺はまだ行けない。

俺が行つてしまえば会場が崩れてしまつ。  
俺が行くのは全員が出てからだ。

「しかし……」

「大丈夫です。先に行つてくれさい……！」

「……分かつたえ。でも必ず逃げるんだえ！ 色々とお礼をしたい  
んだから」

そつまつてロズワードさんは行つてくれた。

さて、全員が逃げるまでもつてくれよ、俺の体。

オーラクション会場の外では逃げてきた貴族や天竜人で溢れかえつて  
いた。

「役立たずの海軍め！」

「！」の事態をどう責任をとるえー！

「ですからその件については……」

海軍サイドのセンゴクたちは天竜人や貴族のクレームの対応に追わ  
れていた。

それを酒を片手に楽しそうに見る《冥王》と呼ばれた人物が一人。

「テラマキア！ ビニにいるんじや！」

「テラ！」

ゾディアックとガイアはテラマキアの姿を探していた。

「チャルロス……？」

そんな中、慌てた声が上がる。

「チャルロス！ ビニにいるんだえ！」

再び半壊したオーケーション会場内。  
もはや俺の体力はなかつた。

能力でこの会場を保つのも限界だつた。

「全員、無事に逃げきれたか……」

不意に子供の泣き声が聞こえてきた。  
その方向を見る。

「チャルロス……！」

それはロズワードさんの息子、チャルロスだった。  
どうやら逃げる途中でこけたらしく、  
膝に擦り傷があった。

母親とは逃げる時に人波ではぐれてしまったのだろうか。  
逃がしてやりたい。  
だけどもう体が……。

「ひつなつたら……」

俺は人型に戻つて能力を解除し、最後の力で剃を使ってチャルロス  
に近づき、庇うように上に覆い被さつた。

能力が解除されたことにより会場が一気に崩れだす！

俺は守るつて決めたんだ！  
命を懸けてでも守つてやる。  
俺は覚悟を決めて目を瞑つた。

「…………」

不意に体に何かが巻きついたかと思うと突然引っ張られて浮遊感を感じた。  
すぐさま何かが崩れ落ちる音がした。

そして何か弾力性のあるものの上に落ちた。  
そつと目を開ける。

「あ……」

俺とチャルロスはツルのネットの上にいた。  
そしてそこは会場の外だった。  
こんなことができる奴は一人しかいない。

「どうして助けた、ブルー……！」

目の前には大の字になつて寝ているブルーの姿があった。

「…………勝負にお前は勝つて俺は負けた。勝者が損をするのは……間違ってるだろ…………？」

何といふか、

「あんた本当に律儀な奴だな……」

やつぱりこいつ悪い奴じゃない。

「チャルロス！」

ロズワードさんが走り寄ってきてチャルロスを抱き締めた。

「よかつたえ……！ 本当に感謝するえ、テラマキア！」

いや、実質助けたのは俺じゃないんだけどね。

「わっ！」

突然、横から誰かに抱きつかれる。

おお、こんなに傷だらけになつて……！」

一父様！」

父様はぐしゃぐしゃに顔を歪めながら涙を流していた。

一  
心  
配、  
かけまし  
た  
…

おいたぐじき!! 無茶ばかりしねいわからー!!

まあ、でも大切なことを思い出せたし、よかつた。

二三

「ガイア？」

ガイアがいつの間にか俺のそばに立っていた。

「俺、勝つたぞ」

「当たり前だ」

俺はフツと笑う。

「 もう、 だな…… 」

これにてシャボンティ諸島の長こ一田は幕を閉じた

数日後。

家の屋敷にて。

「 もうもと傷を治せ、 クソガキ。 お前と勝負が出来ねえじゃねえか  
! 」

「 ビハしてわしがこんな」と云ふ

「 まあまあ、 サカズキ。 これからお互に奴隸になつた海軍本部中将  
として仲良くなつてしまひやないか 」

……………ビハしていつなつた?

第一十六説・長い一日の終わり（後書き）

なぜこんなことになつたのか。  
詳しいことは次回です。

第一一十七説・事件の後日談（前書き）

テストが返ってきたぜ！

かなりやばい点数だった……。

でもめげずに頑張る！

## 第一一十七説・事件の後日談

あのシャボンデイ諸島を揺るがした事件から数日経つた。

俺の傷も大体は癒えてきた。

ていうかあんなに大怪我したのにたつた数日で歩けるまでに回復するとか俺も本当に化け物染みてきたな。

「ふつ……、気持ちいい……」

そして俺は今、屋敷の庭の芝生の上で仰向けに寝転がって口向まつこをしている。

ビームでも澄みきった青い空。

たびたび吹くそよ風。

……平和だ。

「ぎゅはははははは！…マジかよ、おっさん！ クソガキに手え  
出して奴隸とか超ウケる！」

「灰にするぞ、貴様ア！！」

「待て待て待て！… サカズキ、マグマを出すな！ 芝生が燃える  
から！ テラも寝てないで止めてくれ！」

前言撤回。

家は全くもつて平和じやない。

「離せ、ガイア！ わしの正義が奴を消せと言つどいのだ！」

「お願いだから落ち着いてくれ！ おい、ちょっと何だその右手のマグマの大きさはー？ この辺り一帯を消す氣かお前はー！」

「ぎゅはははは、」ほつ、「ほつ、ははははは、」ほつ――――――

笑いすぎてむせてるし。

「はあ……」

どうしてここにブルーとサカズキがいるのか。  
それはあの事件が終息を迎えた直後に遡る。

「やばい、マジで疲れた……」

「トーラマキアアアーー！」

「父様、泣き止んでください」

「傷だらけだな、テラ」

「ガイアも見てないで父様を宥めてくれよ…」

俺とブルーの戦いで全壊したオーラクション会場前。

俺は歩くことができないほど消耗していたので病院への搬送待ちだつた。

ガイアが連絡してくれて患者が天竜人と聞いてすぐに行かせていただきます！と言っていたらしいがそれでもここに来るまでに15分以上はかかるらしい。

まあ、ここは無法地帯だしね。

「てか父様、いいかげん本当に泣き止んでください」

「う、うむ。すまん、テラマキア」

ふう。

ようやく泣き止んでくれた。

まあそれだけ心配させたところなのだろう。

確かに無理しそぎたな。

「さて、わしのかわいいテラマキアここにまで怪我をさせたこいつはどうしてくれよう？」

そつぱつて父様が目の前に大の字になつて寝ているブルーを睨み付ける。

ブルーはどうやら力死きて氣絶してゐるみたいだから父様の言葉に反

応しない。

ていうか父様かわいいとか言わないでください。  
凄く恥ずかしいです……。

「ふふふ、トライキアに手を出した罪は重いぞ……。死ぬより苦しい目にあわせてもうひつ」「ひつ

怖っ！

父様からじです黒いオーラが出来る！…  
何か口調も変わっている気がするし！…

「覚悟はいいか……？」

あ、ひつと！  
やばい、やばい！

「ちよつと待ってください」、父様

「何じや、テラマキア……？ 今、ここにひまわりが絶望を叫ぶ  
うか考へていたところなんじやが？」

あれ？

何かデジジャブを感じる。  
まあいいや。

「こいつを俺の奴隸にしたいですー！」

「なつーー？」

分かるんだ。

「こいつは根は悪いやつじゃない。

助けてくれた恩もあるし、死なせるのは少し酷いかもしない。  
父様は少し驚いたが、すぐにしかめつ面になる。

「奴隸にするのは構わんが、テラ。お前は奴隸だからとこいつて何か  
酷い事をするわけではないだろ？」

「いえいえ、ちゃんとそれなりの報いは受けさせむつもつですよ」

できるだけ凶悪そうな笑みを浮かべて言ひながら、もちろん嘘だ。  
奴隸にした後は隙をみて逃がすつもりだ。

「本當かのう？」

「本當です」

じっと父様の目を見つめる。

「…………分かった。奴隸にする本當たつての話はわしがつけておこ  
い」

「あつがとうござりますー 父様

ふう、よかつた。

でもなんだかんだ言つても父様は真剣に頼めば最終的には俺のお願  
いを聞いてくれる。  
いい父親だ。

「はあ……」

「ん？ ガイアはこいつを奴隸にする」とについては何も言わないのか？」

「…………お前が天竜人の枠から外れるのは知ってるから何も言わないよ」

「どうやらガイアは俺のブルーを奴隸にすることの真意に気づいているようだ。」

さては見聞色の霸氣だな？

「やあ、大丈夫かい？」

「ん？」

「おおっ！ レイリーのおっさんだ。

「ほひ、君はテラマキアが恩があるから底つた海賊じやな？ 息子が世話になつたのう。感謝する」

レイリーのおっさんは父様の言葉に驚いた表情をしたがすぐに顔に笑みを浮かべた。

「なるほど。この親にしてこの子ありといふことか」

「な、何か用ですか？ レイリーさん」

「はつはつは！ 今さら愚まらなくてもいいさ。君がシャンクスを連れて逃げる時に私のことを呼んだだろ？ その名で構わん！」

…………気さくな人だ。

「じ、じゃあレイリーのおっさん。一体どうしたんだ？」

「うむ。シャンクスから云々を頼まれていてな

「云々へ。」

「ああ。お礼の宴をする場所と口

そして俺はレイリーのおっさんから娘の口と場所を聞いた。

「その頃なら傷も癒えているだろ?」

「ああ、たぶんな

イマイチ自信がないが、まあどうにかなるだろ?」

「それから個人的に礼を言わせてもらおつ

「え?」

「ありがとう。おかげで助かった」

「あ、ああ

海賊王の右腕にお礼をいわれちつたよ。  
何かすこ恐縮するな。

不意に辺りが騒がしくなった。  
何だ？

「海軍は能無しの集団かえ！」

「誠に申し訳ございません……！」

どうやらセンゴクたちが天竜人たちに詰め寄られてるみたいだ。  
まあ、あんなことがあつたのにも関わらず、海軍全く役に立たなか  
つたもんな。

天竜人たちに何か言われるのは当たり前か。

「海軍には罰が必要だえ！」

「そうだえ！ こんな能無し軍団には罰がいるえ！」

「……」

あれ？

何か雲行きが怪しくなってきたぞ？

「そうだな……。」のムカツク顔をしたこいつに決めたえ！

そう言つて天竜人の一人がサカズキを指さした。

「お前を処刑するえ

「なつ！？」

はあ！？

なに言つてるんだよ！

これじゃ俺が許した意味がないじゃないか！

「どうかお情けを……！」

センゴクが土下座をして許しを請う。

「ふんっ、いやだえ」

当たり前のように一蹴する天竜人。

そして土下座していいるセンゴクの踏みつけた。  
そのままぐりぐりと踏みにじる。

「能無しの言ひことなんか聞く価値もないえ！」

俺は

俺はこりんのが見たくて彼らを助けたんじゃない！

天竜人たちがサカズキを見る。

「死んで償え！」

「処刑！」

「処刑！」

「処刑！」

「処刑！！！」

# 「处罚！！！！！」

「処刑！！！！！」

「処刑！！！！！！！」

俺の中で何かがキレた

「そいつは俺が奴隸にする！！！！！！！！！」

「え」

本日一度目の絶叫が島に木靈した。

まあ、そんなわけで勢いでサカズキを奴隸にしてしまった。父様はかなり渋い顔をしていたけど。

天竜人たちは俺がそう言つならいいだろ？とこづけで引き下がってくれた。

俺は彼らにとつて命の恩人にして英雄だからだろ？それに奴隸と言えば死ぬより辛いことだと彼らの認識ではなつてゐるはずだからな。

世界政府も条件つきで認めてくれた。

その条件は緊急時においては秘密裏に召集するというもの。だから普段は普通の奴隸と変わりないのだ。

恐らく世界政府は失うよりもマシと考えたのだろう。

あのまま俺が奴隸にするつて言わずにいつてたらマジで処刑されたかもしないしな。

センゴクにはすごくお礼を言われた。

海軍本部中将を奴隸にするにお礼を言つてびうよ？

後、ブルーについてだが

こちらはわりとすんなり奴隸になつた。

天竜人は前述した通りで何も言つてこなかつた。

世界政府も当たり前だがブルーは海賊なので何も言わない。

ここまではよかつた。  
問題はここからだ。

俺は奴が目覚めた時に大方の事情を説明した。

そして俺が奴に逃げるよう促すと、あらうじとかこんなことを言

い放つた。

「クソガキ！ てめえ、さては勝ち逃げする気だな？」

はあ？ と思つた。

何やら未だに俺に負けた事を根に持つてゐるらしい。  
あの風を出して今すぐ勝負しろとか言い出し始めた。  
俺は怪我してゐるのにお構い無しかよ。

それ以前に俺にはもうあの風は使えなくなつていた。  
出そうにも出し方分からぬのだ。

あの時も勝手に出てきた感じだつたしな。

俺がその事を説明するどじやあ使えるようになるまで待つとか言つ始末。

結局ブルーはここにいることになつた。

それが未だにブルーがここにいる理由だ。

そうそう。

俺の悪魔の実の能力が天竜人たちにバレた件だがあの事件で天竜人たちを救つたのとロズワードさんのおかげで蔑まれるのではなくて、逆に尊敬されるようになつてしまつた。

その子供たちにも憧れの英雄みたいに見られてゐる。  
チャルロスもその例外ではない。

父様と母様はこのことに對して泣くほど喜んでいた。  
俺が蔑まれるのを覚悟していたんだから当然か。

「わわわわわわわ…… やべ、腹筋壊れる…………！」

「殺す！ 絶対殺す！！」

「やめろって……」これ以上は本当に洒落にならないから……

しかし一気に賑やかになつたな……。

二人増えるだけでここまで変わるとほ...

「アラヤ ササセバ、 もー？」

ブルーが何かに躊躇したのか後ろに仰向けて倒れる。

「好機！離せガイア！」

「だから落ち着け！」

サカズキとガイアが揉み合つてサカズキの右手のマグマが飛び散る。

飛び散ったマグマは運悪く仰向けに倒れていたブルーの股間に当たつた。

ブルーが白目を剥いて悶絶した。

そう言えはブルーについてはもうひとつあつた。

ブルーは超絶に運が悪いのだ。

今さっきのこともそうだが、あの事件の時に俺から逃げる途中にあ  
いつはミホークの斬撃とサカズキの大噴火を運悪く直撃していたし、  
俺との戦いの時だつて運悪く俺の風を操る能力が発現して負けてしまつたしね。

そして極めつけは体が勝手に動いて父様を殴ったことだ。

まるで誰かに操られるみたいに。

こんな律儀な奴が嘘をつくとは思えないし、それに誰かを操る奴には心当たりがある。

ドンキホーテ・ドフランヘルム。

十中八九、こいつだろ？

あいつもちょうどブルーキーとしてこの島に来てははずだ。  
にしても本当に運が悪い奴だ。

ドフランヘルムに目をつけられて、さらに天竜人を殴らせられるなんてな。

ブルーの懸賞金が高いのもたまたま島を襲っていた海賊をやつつけたら、避難していた島民に運悪くお前も島を襲いにきた海賊だな！  
と勘違いされてたりなど、そんなことが色々積み重なって今の懸賞額になつたらしい。

もう不憫すぎて泣けてくる。

それでもブルーは全てを自分の運の悪さのせいにせず、己の力が足りなかつたからだと考えているそうだ。

やっぱりこいつ普通にいい奴じやないか？

「おおおおお…………！」

「ふんつ、いい氣味だ」

「…………」愁傷さま

まだ悶絶しているブルーをふんぞりかえつて見ているサカズキと脱力しているガイア。

「はあ…………」

明日はレイリーに言われた宴の日だつたな。  
楽しみだ。

第一一十七説・事件の後日談（後書き）

次は宴の話かな？

第一二十八説・海賊と天竜人と奴隸の宴（前書き）

今日は難産だつた……。  
更新遅れてすみません！！

## 第一一十八説・海賊と天竜人と奴隸の宴

日が暮れた頃。

シャボンティ諸島のとある無法地帯。

「カーッ！ 夜は冷える！」

「ならわしがマグマで暖めてやろうか？ ん？」

「あほか、おっさん。そんなことしたら俺が死ぬだろ？」「

「だからどうだ？」

「……おっさんまだ俺が昨日、大笑いしたこと根に持つてんのかよ  
「当たり前だ。お前はいつこの手で消すと決めとるんだからな  
「はあ……。しつこい奴は嫌われるぜ、おっさん。あ、やべ、思  
い出したらまた笑えてきた……！」

「……よし。やっぱ今、消してやる！」

「あーっ、もうー。ついでにお前ひー。」

俺はさつきから何十回と続いているサカズキとブルーのやりとりを思わずつっこみをいれてしまった。

「お？ 何だクソガキ。俺と闘りたいのか？」

「誰が闘るかバカ。ていうかそのクソガキっていうのもう止める。お前一応、俺の奴隸つてことになつてんだから誰かに見られたら俺はもう庇えないぞ?」

「は? 別にいいじゃん、クソガキ。」

「…………お前全つ然理解してないだろ」

「やめとけテラ。そいつらに何を言つても無駄だから」

ガイアが俺の肩に手を置きながら言つ。

おい、何だ。

その悟つたような穏やかな顔は。

「まあ、とにかくだ。せつかくこれから宴をやるひつて時にくだらないことでうだうだ言つのは止めにしよつ」

そう。

俺たちは今、シャンクスに招待された宴に向かつている途中なのだ。最初、宴に行くことは父様たちに反対されたが、ガイアたちを護衛として連れていくことで何とか説得した。

何せ全員が能力者だ。

しかもその内の一人は元海軍本部中将で自然系。

余程のことが起つたとして大丈夫だろつ。

しかしサカズキはずいぶんと宴に来るのに嫌がつていた。

原作で海賊を絶対悪だと思つているのは知つていたけどそこまで海賊と一緒に飲むのが嫌なのか。

最後にはあんまりやりたくないのだが仕方ないので天竜人として命令して無理矢理連れてきた。

連れてきたはいいけどブルーとの口喧嘩が絶えなくていいかげんう

んざつしてきてる。

「ぐだらなくはない！ わしの正義がかかつておるのだからな！」

「すいぶんぐだらないことにかけてんなー。おっさんの正義」

「お前はいちいち人の神経を逆撫である」とを言こむるな……！」

「…………」

「一体何でここまで仲が悪いんだ、じこひりば？

おい、ガイア。

だからそんな悟ったような穏やかな顔でじこひりを見るな。

「あ、あれか？」

そつこひしている内に明るい大きな焚き火の火が見えてきた。  
こっちに向けて手を振っている人影が見える。

「おーーー！ こっちだテラマキアー！」

どうやらシャンクスらしい。  
手を振り返す。

「ちつ……」

「こりサカズキ！ お前舌打ちしだろー！」

「ふんつ、海賊と飲む酒なんぞ不味くて虫酸が走るわ

「だからといってシャンクスたちに危害を加えたら本気で怒るや..  
..!..」

「.....」

サカズキは腕を組んでそっぽを向いてしまった。

「ありやつや。拗ねけまつた」

「拗ねてなどおらん!..」

「おー、怖つ!..」

「全くサカズキは.....」

それぞれがサカズキを呆れた目で見る。

「はあ.....。とにかく行くぞ」

俺たちはシャンクスたちの元に急いだ。

「おう、元気にしてたかテラマキア。傷はどじつだ

「ああ、シャンクス。順調に回復してるよ」

挨拶をかわす俺とシャンクス。

「あんたがうちの船長を助けてくれた奴だな。礼を言ひ

シャンクスの後ろに控えていた仲間たちから一人の男が出てきて礼を言つてくれた。

漫画で見たことがある。

確かベン・ベックマンって人だ。

シャンクスの海賊団の副船長だけ。

道理でシャンクスに次いで威圧感がある人だと思つた。

「へえー、マジで天竜人かよ。船長の言ひこと本当だつたんだな」

仲間の内の一人の肉に食いついている太つた男が笑いながら言つ。あの人は確かラッキー・ルウつて人だな。

「やあ、また会つたな。テラマキア君」

「あー、レイリーのおっさん」

手を上げて俺に挨拶をするレイリーのおっさん。その隣には見覚えのある男が立つていて。

「あれ？ もしかしてミホークか？」

「……」

その男 ミホークは腕を組みながら田を睨っていた。

「おひへ、わうなんだよー。その辺にいたから誘つたんだよ」

「……おれとしては貴様と早く決闘の続きをしたいのだがな。《赤髪》」「

「今はいいだらつ。《鷹の田》。せっかくの宴なんだからぞー。」

「ふん……」

ミホークはそれきりでまた黙ってしまった。

「わははははー。むちじろい海賊と縁を持つたものだな、シャンクスー！」

「まつたくですよ。レイリーさん」

シャンクスはふと俺の後ろに田を向けた。

「お、何だ。テラマキアも連れがいたのか…………ってあんたは確かあの事件の時にいた元海軍中将の……」

「やめてくれ。もう私は海軍中将ガイアだったのはもう昔の話だ。今はこのテラマキアの奴隸兼師匠のガイアだよ」

シャンクスの言葉に苦笑しながらガイアは田紹介した。

「ん？ 奴隸で師匠つておかしくないか？」

「まあ、あまり細かいことは気にするな。それに元海軍中将といつ  
なら彼の方が合っているだろ？」

そう言つて、ガイアは自分の後ろをあいだ指す。

「…………」

そこには相変わらず腕を組んでふて腐れているサカズキの姿があつた。

「ああ……あんたはあの時のマグマ中將ー。」

「彼も今じゃ私と同じ、トライアキアの奴隸だ」

ガイアの奴隸という言葉が気に入らなかつたのかサカズキは舌打ちした。

「へえー、レイリーさんの言つていたこと本当だつたんだ。最初、  
聞いたときは大声を上げて驚いちまつたけど正直、半信半疑だつた  
からな。まさか助けるために奴隸にするとは……」

奴隸の主張が間違つてないかとシャンクス。

「なあ、おっさん。いつまで拗ねてんだよ。そりそり機嫌直そうぜ

「うるさいー。」

「やれやれ……」

ブルーはお手上げのボーズをとる。

「ん？ そいつは？」

そんなブルーを見てシャンクスは疑問の声を上げる。  
そういうえばシャンクスはまともにブルーの顔を見たことがないんだ  
つけ？

「こいつはブルー。ほら、あの事件で天竜人を殴った奴さ」

「ああ、あの天竜人を殴った奴ね…………って何でそれで無事なんだ  
？ まさかそいつも…………」

「ああ、俺の奴隸さ」

「やつぱり…………！」

「ええ！？ 俺って奴隸だったのか！…？」

「…………今更気づいたのかよ…………」「…………」

その場にいる多数の人からつっこみが入る。

「へー、俺、奴隸だったのか。あれ？ でも俺今まで奴隸みたいな  
扱いされたことないぞ？」

「…………なあ、テラマキア。お前奴隸の意味知ってるか？」

「知ってるよ！…！」

シャンクスにバカにされたような感じがしたから思わず言い返してしまった。

「まあ、主賓もきた」とだし、これによつやべ宴を始められるなー。」

シャンクスの仲間たちから酒を手渡される俺達。  
無論、俺はジユースだ。

「さあ、野郎共！――酒の準備はいいか――！」

シャンクスの仲間たちは酒を上に上げて応答する。

ガイアザブルー レイリードモタ

ミホークは酒を小さく酒を上に上げて サガスキも嫌そーな顔をしながら場の空気に合わせて酒を上げている。

モニタの備考欄ではないがジョブ番号を上書きしている

い  
い  
！  
！  
！  
！」

シャンクスの声と共に騒がしい宴は始まつた。

「君ってマジで天竜人なんだってな！」

「まさか天竜人にいいやつがいるなんて思いもしなかったなあ。それも子供だし」

「よく言われるよ」

「あんた天竜人を殴つたんだってな！ すげえ根性あるなー。」

「そ、そうか？ 僕つてすげえ奴か？」

「ああ！… すげえよ！」

「ギャハハハハハハハ… なんか照れるな…！」

「おひ、楽しんでるか？ 『鷹の眼』…」

「ああ、それなりな。『赤髪』」

「そっか！ よかつたぜ」

「……たまにせいかつのも悪くないものだな」

「だろー！」

「ほりほりあー、しょんなしけた顔してないでさあ、シャカズキも飲もうぜエー」

「おー、ちよ、ひらガガイア！ お前もつ出来上がりつつあるだろー。」

「わははははー！ あれだけ嫌がっていたのに楽しそうだなー！」

「『冥王』ーー 誰が貴様ら海賊と飲んで楽しめるかーー っておいガイアー！ 無理矢理飲ますのはやめつ……ーー！」

「いい飲みっぷつどうわなあー、シャカジュキ。ほら、もつと飲めーー！」

「…………」

「わはははははははーー！」

「ふう……。もう腹一杯だ」

宴が始まって数時間後。

俺は階から少し離れた場所で一息ついていた。

「にしてもすごいな。海賊の宴つてのは」

正直なめていた。

でも実際はやばかった。

あいつら俺にはちゃんと酒じゅなくしてジュースなどと油断していたら俺の杯に酒混ぜようとしてきやがった。

中には無理矢理飲まそうとしてくる奴までいる始末。

一応、俺は天竜人なんだけどな。

あいつら絶対忘れてるよ。

ていうか本当に元気だな。

ブルーたちは何かやつてるし。

「ギャハハハハハハハハ！」　一発芸やるぜえ！　

そう言つとブルーは能力を発動して青龍になつてとぐろを巻いて、

「うん」

あほだろ。

全員あほだろ。

「アタシがお母さんを殺した...。」

その時、宴の中心から拳型の巨大なマグマが飛び出してきた！

あのバカサカズギ！！！

「わしゃあのひ、わしゃあのひ、己の正義に従つてがんばつてきた  
んじゃあ——それが何で奴隸にならなきやあいかんのだ——」

何で愚痴ってんだよ！？

「分かた、分かた！ お前の悩みはよおーくう分かたせシャカジユキ！ だから飲もうぜ！ 飲めばなんとかなる！」

「おおう、ガイア！！ わしのことを分かつてくれるのはお前だけ  
じゃー！」

そして何でそれで納得する！？  
てかガイアもベロベロに酔つてるじゃないか！…

「同感だよ、レイリーさん。『鷹の爪』もやつ狂ひだらへ。」

「…………ああ」

「はははー、やつぱりなー、あつ、おーい、トロマキアもそんな  
ところにこなこで」ひたちに来いよーーー。」

「ああ、今行くーーー！」

本当に賑やかで楽しくて騒がしい宴だな。  
俺はシャンクスたちの元に向かつて走り出す。

そつやつて宴の夜は更けていった。

「悪いな、わざわざ見送りにきてもらひて」

「こやこや、気になくていい。俺が来たくて来たんだからな」

俺はシャンクスたちの出航の見送りに來ていた。

「そういうえばガイアたちは？」

「ああ、あいつらなら今」る屋敷で一日酔いつぶしとでるよ

昨日の夜は馬鹿みたいに飲んでたからな。  
あいつら酔いつぶれちゃったから、俺が白虎になつて運んで帰るは  
めになつてしまつた。

一応護衛として連れてきたんだけどなあ。

まあ、そのせいで父様と母様に物凄い剣幕で怒られていたけど。

「シャンクス、ミホークとレイリーのおっさんは？」

「ああ、レイリーさんならこの島での用事は済んだらしいから行つ  
てしまつたよ。何やら冒険の思い出巡りしてゐるらしいんだ。《鷹の  
目》については知らないな」

「そつか……。行き先は魚人島だよな」

「ああ。そのための船のコーティングも終えてるから準備万端だ！」

確かにシャンクスの船はゼリー状の膜に覆われていた。  
あれが「コーティング船か……。

「おうと、やういやお前に渡したい物があるんだった」

そう言つてシャンクスは自分のそばに置いてあつた箱を俺に渡して  
きた。

「これは改めて俺を助けてくれたお礼だ。受け取ってくれ！」

「ええ！？　いいのか！？」

「ああ、俺たちひとつちや必要のない物だしな」

うーん、折角くれるって言つてるんだし、断るのも失礼だな。

「なら遠慮なくもらひうよ」

「ああ……」

満面の笑みで喜ぶシャンクス。

「んじや、そろそろ行くな

「ああ」

シャンクスは船に乗り込む。

「船長、浮き袋を外しました！」

「おひ、ありがとよ」

途端に船をシャボンが膨らんで覆つていいく。  
それと同時に船が沈み始める。

「　　またな————！」

シャンクスやその仲間たちが手を振ってくれる。

「ああ、元気で！――」

俺も負けじと振り返した。

船は完全に海へと沈み、見えなくなつた。

「……また会おうな、シャンクス」

…………さて、屋敷に戻るか。

「ん？」

振り返つた時、自分のそばにある箱が田にひついた。

そうだ。

シャンクスからお礼をもらつていったんだっけ？

「いつたい何なんだらう？――」

俺は箱の蓋を開けて中身を見た。

中には縞模様の入つたメロン？らしき果物が一つ入つていた。

おいおい、これって――

「悪魔の実じゃないか――」

シャンクスたちは必要ないって言つてたけど俺にも特に必要ないんだけどなあ。

父様に渡して売つてしまひつか？いやそれよりも――

「これって何の悪魔の実なんだ？」

「どこかで見たような気がするんだが…。  
確か屋敷に悪魔の実の図鑑があったよな。  
それを見れば分かるかもしれない。」

「やうと決まれば急いで」

俺は急いで屋敷に向かつた。

「ん、この本だな…」

帰つた俺は早速、自室にいもつて本棚から取扱ての本を見つけた。

「悪魔の実の図鑑…」

箱から悪魔の実を取り出して横に置き、本のページをめくる。

「えーと……これは違うな……これも違う……」

そして何十ページかめくった頃にそれは見つかった。

「あつた、これだ！」

そのページに描かれていた悪魔の実と今、横にある悪魔の実は色も形も全く同じだった。

「えーと何々、この悪魔の実はゴムゴムの実……？」

「ゴムゴムの実……」

「マジ……？」

## 第一十八説・海賊と天竜人と奴隸の宴（後書き）

根本から原作崩壊www

次からはしばらく日常編かな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4788w/>

《天竜》の伝説

2011年10月29日20時08分発行